詞之栞講義

一

ホ 2
5571
1

冊 二
號 和八十
函 十一

詞栞徴講義一

サテ今晩ハ詞ノ栞ノ講釈デムガ先ツ皇國ノ詞ノ活用ノ数ガ十四種ムヂ第一ガ四段活用第二ガ一段活用第三ガ中二段活用第四ガ下二段活用第五ガ加行変格活用第六ガ左行変格活用第七ガ奈行変格活用第八ガ良行四段一格活用タダシ此活用ヲ[illegible]ノ活用ト云フヂヤガヤハリ良行四段一格ト云ガヨロシイ其ワケハ其處ノ講談ノトコロデ申サウ第九ガ四段ノ五ノ音ヨリウツル格ノ活用第十ガクレキ レキレキノ二ノ音ヨリウツル格活用第十一ガクレキ活用第十二ガレクレキ活用第十三ガクレキ一格活用第十四ガレクレキ一格活用コレデ十四種ヂヤ此十四種デ吾大皇國

門 ホ 2
號 5571
卷 1
簡齋書箋

細註

△うきかり　ふかかり　くもとるかり　ナド云フ詞ハ一種別ダヤガ別ニ格ヲタテマセヌハ此詞ハ全ク一ノ詞デハ無クテ辞（テニヲハ）ダヤニ依テタテヌノデゴザル但シうかりトイフ畳辞ヲ申スノデゴザル　うき　ふか　くもとる　ナドヲ辞（テニヲハ）ダヤナド、心得ル方モヲセ多マイゾヨ委シイヿハ　うき　ふかし　ぞノ講談ノ才申サウ

ノ詞ノ活用ハ昔モ今モ足リテアルダヤ△サテ又心得テオカネバナラヌ事ガ御座ル今小生ガ申ス事ヲ詞栞ノ図ヲ見ナガラ聞メサレ四段活用ヨリクレキ　レクレキノ二ノ音ヨリウツル格ノ活用マデノ十種ハ詞ノ活用ダヤガ（ヲ作用言ト申スノダヤ用ラナイ故ニ詞ト）クレキ　シクレキ一格シクシキ一格ノ四種ハ有形ヲ云フ詞デゴザルヨッテコレヲ形状言ト云フダヤサル故ニ活用ノ段数モ多イノデゴザル委シイ事ハ後デ申スト混雑イタスカラ其処デ申サウ

サテ是カラハ第一ナル四段ノ活用ノ将然言ヨリ申サウガ先将然言ト云フ名目ハ図面ニモ有ル如クシカラムト思フ詞ダヤ此詞ヲ未来言（一ノ音ト云モ未来ダヤ）ト云イフノデゴザル。サテ四段ハ加行左行

コノ事ハクケ段ニ有ナシ

□一ノ音ヲ受ル辞（テニヲハ）ガ四ツアリマス図ニモ有ル如リ　ず　む　なむ　む　ヲ四ツダヤ　花さこのむトイヘバ咲ナイヿ　花さこのむトイヘバ咲ウトオモフヿ　花よさなむトイヘバ咲ウナラヨイト誂フルヿ　咲なむトイヘバ咲ウナラトオモハデゴザル美四ツノカタ

ず

多行波行麻行良行ノ六行ヨリ外ハナイヂヤッノかさたはまらヲ四段ノ一ノ音ト云フデゴザル此一ノ音ヲ受ル辞ガ四ツアリマス図ニモ有ル如ク　ず　む　なむ　む　ノ四ツヂヤガマヅずトイフ辞ノ意ヲ申サウ北邉成章主ノあゆひ抄巻四ニ　ぬ　又　ぬず　よも里こぞし上記トイハレタハアカヌコトデゴザル名高キ学匠ノ説ヲワロイト云ヘバ其人ヲソシルニ似タレドコレハサウヂヤナイ道ノ為ヂヤニ依テ申スノヂヤサテずハ　ナイ　又　ナイデ　ト解スガヨロシイデゴザルカヤウニ二様ニ解ス故ハずハ断止ト連続トニツニ互デゴザルコレデずノ意ハ会得シタガヨイ

サテコレカラハずノ一ノ音　かさたはまら　ヲ受タル

か　か　か　か

祗ヲ申サウコノ徴ハイハイデモ誰モヨウ知テドアラウヂヤガマヽタ知ラヌカタモアラウヂヤニ依テ申マヽレヤウ

断止ぞてノ徴

仁徳紀 上　羂阿企莵辭麻椰莽等能倶珥珥箇利古武等和例破枳箇儒［ぞて］

小町集　うきなてをしれふるあめのしたにましてわがぬれきぬはほせどかわかず［ぞて］

古今 秋上　ちはやふる神代もきかず［ぞて］竜田川からくれなゐにみつくゝるとは

武蔵野紀行　あくればゆ月ならぬ朝ぎりいよいよふかくして道もさだかならず延わかなで［ぞて］馬にまかせてゆく

さ　さ　さ

ふじの千年の底にもつきぬ［ぞて］　此ノ作者ハ北条氏康公ヤ

サテコレラデ断止ぞてノ意ハワキマヘタガヨロヽレイデムコノ徴ハ加行バカリテ飽タラヌユヱ さたもまら ノ徴ヲモ申マヽレヤウアマリクドイトイフ仁モアラウガマヅオ聞ナサレ

方丈記　四大種の中に水火風もつねに害をなせども大地にいたりては殊なる変をなさぬ［ぞて］

萬葉 巻三　豊国乃鏡山之石戸立隠爾計良思雖待不来座　まてど来まさぬ［ぞて］

落久保 一　母もなきにむすめおきて北の方こゝろやいかにおもしけむ思ふまつる子達の数にだにおぼさぬ［ぞて］

天皇登高山見四方詔之於國中烟不發國皆貧窮
不發 ふぬちにけぶり
各たゝで國皆貧窮

著聞集 [illegible]

古事記下 於國中烟不發 けふりたゝで

同上 解御頸之璵含口唾入其玉器於是其璵著器
婢不得離璵 たまをはなたで

聴聞ノ中ヨリ一人スヽミ出デイハク此處バカリはなたでヲレナイ
ト先生ノトカルヽカケハイカヾヲ吞ソレハヨウイハレマシタ
コレハ一ツノ詞ノ格デ古今オシナベテ有ルヿデムソレ故ニ此
ヲ今日ロザノヘ申タノダヤ ○全躰此詞ハ多行下二段ノ活用
デはなてなてれどトモスベキノデムソレヲ古ヨリ今ニ至ルマデ
はなたでト四段活用デイヒナラハシテアリマスソレ故ニレナイ
ト解セネバナラヌロケデム 近もいはまで 近もいひはなちて ナド
モ此格デ 近もいはまで 近もいひはなちて トモフヿデム

古事記下
大殿破壊悉雖雨漏都勿脩理
ひたまてたゝで

帰命本願抄 なほしても五濁乃凡夫乃くせなれど四儀
乃作罪をとゞまるべき余分あり[たてで]たとひわづか乃
示きよき心をおこせども水にゑがくが如し
貪嗔乃るゐこそかぎりなきころでおぼゆくもやまず
するりてでは煩悩乃みなもとをたてで

萬葉三巻 山代泉小菅凡浪妹心吾不忘 わすれても
はなたで

拾玉集五 衆生ゆる秋乃板屋乃めもあまはなたで さすらふ小袖
乃月さやかなるらめ

新拾遺雑上 春日野やくもらぬ月乃影ながらなほ名をとゞめぬる
乃跡もまよはなたで

ま ま ま ら ら

萬葉 四巻　百千遍戀跡云友諸茅等之練乃言羽者吾波不信　わきもこのまずて

源氏明石　なほ雨風やまずて

北国紀行　其暮湊中より風はげしく海あれて艘を出さず浪大山をうつぐずめし大悲乃弘誓をあのむらさきまうでふしして又光明寺おろぎさいよせ侍りずて秋もろ不風雨やまずて

萬葉 十九巻　我門従喧過度霍公鳥伊夜奈都可之久雖聞飽不足　あきたらずて

風雅 賀　君が代乃ためしとされむとやすむ乃山岸乃松村いろもかはらずて

コレヨリ以下ツヾク ずての徴 改正本ニハ下ニ置ケリ 又一歌トス

ら

小嶋乃くちすさみ　小倉山乃麓中院[illegible]乃庵をたづね[illegible]がとみ侍りし須臾もやすらはでわづらひていとゞ身乃くるしみもはれぬべきこゝちしてぞころばうらしかもよろこびにまどふるひ年おもひたる大徳などのこゝろばへぞさぶらふつくりものなどせしうちも物おもひさはらずて

サテ四段一ノ音 か さ た は ま ら ヲ受ケテ ずての徴カツマメ ずての俗意ハナイト解シサヘスレバ歌ニモセヨ文ニモセヨ古今貫通テオナジク解セラルレドモコレデドナタモ断止ずての意ヲガテンセラルレガヨロレイサテコレヨリ文連続ずてハナイデト解シマスワケヲ申シカツ又 か さ た は ま ら ヲ受

万葉上十丁
「うちよわたしぬむ
安思我里乃波故禰能禰呂能爾古具佐能波都麻奈礼世比登可受ひもとこの『徴』
禰牟』改

竜田風神祭
「ろむよそとてろうまるふ
誰神曾天下乃公民乃作作物乎不成傷神等波』改

タル徴ヲ申マレヤウ

徒然草　「筆ぬるあれど『と』なむ申侍りて海をて
あまてへとよき『徴』こそやむしく詞さく
なり〳〵むかしものゝ」

栄花物語　「九重の内ちかくハおのづから志るしらぬ『徴』
人ひろくなどして明にありくまかりたり
人もたゞ今ありつるやうにふけなくもてなさ
せ給ひし』

萬葉一巻　河上乃湯都磐村二草武左『生』常丹毛冀
常処女煮手
常ニモアラムアモ哉之

枕草紙八　「まづてはしめありてきあるらすおもひまへ

諺
世間問答序
「おほかたのたきことはいふもさら『徴』
うちまかせてなれてもんぞふと名づけ侍る
なるべし』

萬葉十二
佐保河之河浪不立静雲君二副而明日兼欲得』改

さる『徴』にふさはしきをえらびて『など』いひて

続紀宣命　朕者不堪止辭白所賞不坐うけまさ『徴』在
聞ニ遍多々日重而讓賜

渋抄（文覚上人消息）　「署さてもし八情乃ふかきはしきものをまほ
らむ『と仰かハ心うるまじき』と申かハ常主摂
政将軍乃擇て身乃楽をおもはれ『徴』只いつの
もしてろをいやさ『徴』人をくるしめ『徴』わび
しめ『徴』国土を安くして寒暑時をあや
まる『徴』飢疫乃禍多く兵乱多く浪風も多た
『徴』世間を静ふなうま『と』当ぬふをんか
まりしきゝ『と申かるまり』

万十三上三十三丁
みなせ川の川淀く（揺）うつくも
召四九之丁
みまかりまし（揺）あるを
水鏡廿四丁
みなかましく（揺）あひみたり
源氏久秀
むかしまていつてとり
てしかるやき所のはそ
なまあり待ちあゆつつむ
とめまあま（揺）おほひり
ぬつろ」
[続紀宣命上]
朕カ髪カミヲ曽リ
天テ佛ホトケ乃御ミ袈ケ裟サ
服キ天テ在テ止
國家ノ乃政ヲ不行
おこなて（揺）
阿止流不得」改

新六一（村雨に改）
ふところ手の紙の思ひまよひてねぎる勅ふ
けく（揺）ころつろぶりなり」
続紀宣命
明久浄岐心以天仕奉乎氏氏門方絶多末方（頻）
たちたま（て）（揺）
治賜『止勅御命乎諸聞食『止勅
萬葉九
上長歎 珠手次不懸時無口不息 くちやま（揺）
吾ワガ恋コレ児乎
扶桑拾葉九九
林忠勝をいさむる 従勝
暑上 四ツ乃時乃川のまりけくぞふこころをとくし
雲あつくなびく緑乃ガ乃枝ふ千代をまさて
まさつそ千ぶるよられあ川き日ざめり山石井の
水ふ木乃葉をあつめ丹をとさめめ七夕ふ結び
乃糸をとりまなかつまれたまる中をゆし

水鏡上
このときに壹岐直ノ祖真根子といふものありき武内の大臣によくにて（揺）あひたりき」改

さらむで
雅言集覧 ようちの条

□改正本ニハカクアリ
一種ハ相違ナレト事ヲ限テ云フナリ 同ナリ
ナドモ此さらむ詞ヲ解言
ニ言ヘ云フル詞ニシテ
ニハアラズ限りト成限
又トニ云フナリ
解レ无モまちレナ ハ限りト

みなかれ志なあらまむきも程なくハいもやさくて
まどろま（揺）ずありあらしぬ」
萬葉七 三ミ空ソラ往ユク月ツキ讀ヨミ壯士ヲトコ夕ユフ不サラ去ズ さらに（揺）目メ庭ニハ雖ミレドモ見
因ヨル縁ヨシ毛モ無ナシ」
聴聞ノ中より一人ススミ出テ日ク不サラ去ヲ さらにて（揺）ト
鮮レマス訳ハ会得イタシタガ其 さらにて トイフ義ハ退去
ノ義ニ候ヤ予答 さる トイフ詞ガ二ツムコ一ツハ退去ノ義
デ限 号コハ限ノ義デムコ一ノサラズハ 不限トイフ意デ限ノナイ ムダヤまりテ
コデ月ハ夕ニカギラズ夜中モ曉モ見えんトデム 春されバ
ナドヽ云モ春ト成テ冬ノ景色ハモハヤナクナツタ孫て
春サト限タコヂヤ此事ハ五ノ音ノ構挨ノキクハレク申

然レバ此ノ夕ぞらぞモ殊ニ事限ラズト云フデヤ月ハ殊ニ限ラズ夜中モ晴モ見エルトイフコデ心デヨ

マレヤウマヅコレデ四段ノ分ハ心得ラルヽガヨロシイ

サテコレまで一段活用 (き)(に)(ひ)(み)(い)(ゐ) ノ講釈香ヽ國

ニモヲル通リ一段ハ加行奈行波行麻行也行和行ノ外

ハナイヂヤコノ (き)(に)(ひ)(み)(い)(ゐ) ノ六行ヨリぞトツヾくん

様ヲ申サレヤウ久ジレ俗意ニ前ノ通リヂヤドコ迄モ貫通

シマス

(き)

断止ノぞ

雅亮装束抄 四月一日きるぞうまね『とてきるきさらぎ』西をきん

ひきつるかさねあまきつるきまきりひとへ張『きるき』

あせをりをきるなる『かん』こちめ石之人五る

(に) (ぬ) (そ) (ひ)

六百番歌記史きるなり『きぬかへりはきぞ』

空穂 国譲 中 めでてまてそのまゝにぞ

石之係一 もち餅ひやえきむ『とおもふなど雨男鐙

さうせて朴の梃をおちさせらうれしきてる

もみふまぞ

枕草紙 上 類従本 文あのさまずりまくれまでもあふちのさいと

をかし『こともかの花はまぞ

古今 物名 心うふ花のちるくふそぼちつくひぞ』

とのそるるのるくらむ』夏くく不干ニ驚ヲ兼タノヂヤコレハドナタモヨウ御存ジヂヤ

サテ此ひぞノぞハ微ニハ聞ヨクナイデ△ツノ訳ハ一旦ぞト断止

テハアレドモとト受テ下ヘツヾケテアレバ全リノ断止デハナイ

デムサレド今思ツカヌユヱマヅコレヲアゲテ後見出シタ
キ又々申サウ 猶是ヲ申ス先々モ無據ナハ此例ヲ申マス左様心得メサレ

和泉式部集

海士のすむ女将あり明乃月をみて
あかしいづるべし
ながめしてひとりたり明乃月をみれバ
昔ながらし人がうらしまし
くつし
ねやねやのハ重むぐらせきよの木のかどにも
あけがくの月をぞにも見る 抄

赤人集

神さびてふりし里みすむ人も都にならふ
花をぞみる 抄

図 菜花月宴
あふ坂もをそハゆきて
のせきこも図 抄たづねあ
てとひこ 二本ぎバこのすゞ
此歌ハ当意ヂヤ 合香炉
トイフコヲ読イレタノヂヤ

き ノ轉言

き ノ轉言

纂中抄四 をとめ女子おりむべきまの　乃鏡とよむ 抄
律名例一第 凡六議者犯死罪皆條所坐及應議之状先奏
請議儀定奏裁 略文 流以下減一等其犯ハ虐ヒ
者不用此律 この律をもちゐず 抄
コレデマヅ一段活用ノ一ノ音ヨリ下ヘ下ト続タル徴カツマタ
断止 意モガテレユカレメデアラウ
サテコヽニマウ心得ネバナラヌコガゴザル此一段活用ノ詞 外ニモナキニハアラズ
ニハ轉言ガム 其轉言トイフハマヅ和行カラ申マシヤウ着
トイフヲ着トモイヒマス又着トモイヒマス是ガ即チ轉言

ト申スノヂヤ萬葉巻廿ニ七重着トイフ処ヲ七重着
トヨミテアリマス又同集巻六巻十五ナドニ着トイフ処ヲ
着トヨンデアリマスヂヤサテカ様ニあるけるナドハイヒ
マスガ不着トモ不着トモイフタコハナイデム其故ニコレ
ヲ轉詞ト申テオクノヂヤレカルヲ義門法師ガ山口栞
ニ「着服といふことの加行一段の活なることをたれもよく
志らざるをけるとまたいふは意おなじ着服乃
字ふあるまじきことば詞乃活きざまも又さら別ふある
あらじあるまじき其別なる用きざまをいふも一音づゝふて
加行乃四段ふ加気久計と活くなりけり」上已トアルハサス
ガノ学匠ヂヤガコノ説ハ至テ誣説ヂヤ着トイフ詞ガ

ドウレテ加行四段ニハタラキマレヤウヅサラバ着衣ヲ
着衣ト云ハネバナラヌガ左様ニイウタ例モナク又イハレ
ナイテムコレハ轉詞ト云フコヲ心得ラレヌカラノコヂヤサテ
又山口栞前文ノツヾキニ曰ク「ころもにも其中四音計をば
うち咲けり開けるさけらんるとふがごとく又ちりるれと变る事も阿まりば
あるひハ赤さ志すせとうくるものあるを　さては
偶ず足するごとくもまた同じ例乃佐行四段の活き
なるをバその中四音せをそこの伊勢許曽なとのごとく後らりるれ
と变るさまもなるなりけり安我家流といひ那何祁西流といへるを御衣を美祁斯と
といへることも是ふてらく解あるべし」上已カヤウニ法師ガ弁別セラレタガコレモ
マドハレタヂヤトカク轉言ヲ四段ノ活用ヂヤト思ハレタ

△是ハ語学者ノ議論よりも覚エヌコヂヤ○頭ヲたさむトモ云ヒ頭ヲかさむトイフナドハ詞ノ自他ナリ何ゾ同ジ格ニ是ヲ論ジマレヤウゾ○四段五ノ音ノ計リ加記久計ト移リテ活用スルハ絶テナイコデゴム　改正

故是ノ僻論ヲイタサレタノヂヤソノ僻説ナルコヲ弁ジマレ
ヤウマヅ著ヲ加行四段ノ活用加気久計ト活用スト云
ハレタレド前ニ申ス通リ著我トモ又著ら無著盛し
トモイヒシ徴モナク且又左様ニモイハレヌコデゴムカラ是第一
僻説ナルコヲドナタモガテンシレメサレ又其活ナル加気久計
ノ計ヨリさしすせト覚ゆるもある也トイハレタレドカ△レ
○絶ヘテナキデゴムレカラバ櫻咲さむ咲し咲す咲せナドト
云フ可キニヤ抱腹絶倒デゴムサ是デ僻説ナルコハシレタデ（四段ニ活用シタルハ師ノ惑ハレタノモ御衣トイフ詞ニ付テノコト思ハレマス　改）
ゴムウロトカク轉言トイフコヲ知ラレナンダユヱ強テ四段トセレ
ガタメニ此様ナ説モ出タルノヂヤ又美祁斯とつることも
是まてよく解かるトアルモ是デハトケヌヂヤ東ニ祁斯ハ

按其敬語ノ例ヲイサヽカイハバ立さ立せ立し立ふヲ立し立ふトイヒ佩かせ佩し佩ふ佩ませ佩ふヲ佩し佩ふ著ませ著ふヲ著し著ふトイフ例ヂヤ此著し著ふヲ体言ニ云居テ御衣トモ云フノデゴム会

口さし如（改正ニハさしすせツカリ改メタリ）

著ノ轉云ヨリさしすせト佐行四段ニハタラク格デゴムコレハ
コノ著バカリニハ限ラズモロモロノ用言ノ第一ノ音ヨリ佐行（将然言ノ事ヂヤ）
四段ヘウツリテさしすせト活用スルコ多クゴムヂヤソレハ何
等ノ義ヂヤト云フニ世シセトイフ程ノコデナガハッハ
ウヤマヒ詞ニナルコデゴムヂヤコノ著ナモウヤマヒ詞ニツカフタ
モノデゴム大坐ヲ四段ニイフモ同ジ格デゴムコレハコトナガイカラ
左行変格ノ処デ申マレヤウ凡テ一段（コレラヲ一段ト申ス）ノ活用詞ハタド一音
ヂヤホドニ詞ガセマリマスヂヤセマル故ニオノヅカラ轉言ガ
アリマス故デ著トイフ詞ヲ外々ノ詞ト同様ニ一ノ音ヨリ
四段ニウツレテ著さむ著し著す著せトモ云フノハクルシクナイ
故ニ著さむ著し著す著せトイフノデ則チ御衣モコレ

得シ合セシ 転言ニハ活用転言アリ又ハタラカス転言ガムゲヤ其外々デ委シク申マシヤウ 改正

ロ 又萬葉十三巻ニ哭児如哭 改正

デム是デ転云ノ訣モヨリ会得イタサレタゾノアラウ 転云ニハ活用転云
アリ又活用又転云ガムゲヤ其トコロバハデ
委シク申マシヤウ
此外(ホ)ニ転云ニ紛シキ詞ガムツレハ何ヂヤトイフト古事記
ニ久羅下那洲多陀用幣琉之時又如狭蝿皆満ナド
イヘル なづさて ハ此一段活用太奈行ノ(ホ)似ルトイフ詞ノ転云
カトフトオモハル丶詞デムガ左様デハナイデムコレハ本ヨリ別
ヂヤ なづさて ト着テトヒトツ格ノ詞デハゴザラヌ なづさて ハ萬葉
巻十三ニ哭児如ト書テアル如クデ海月ノ如ク五月蝿ノ如ク
トイフ意デムサ是デ別ノ詞ヂヤトイフコトガヨウ合点シマス
サレ此くらげなす又ことむけるナドノ類ニテトイフコトヲ詞ノ門ガウレハ得ダガヘヨレテ活語雑活二編ニイハレタコトデ論弁イタスト餘リ長クナリマスカラ別ニ中マシヤウ
サテ又(ヒ)干ルトイフ詞ヲ然為詞ニイフ時ハ左行四段ノ活用デ

(ミ)ノ転言

ほさてトイヒスコレハ転云ノ例デハナイ干ルトイフ詞ハ自然
詞デム乾トイフ詞ハ為然カスル詞デムヂヤニ依テ別ヂヤト申
スノデム允テ予ガ転云ト申スノハ語意ハヒトツデ詞ノハタラキマス
ノヲ転云ト申ノヂヤ着さむハ着しト申ノハ着さむ着し着てトイフベキ
ヲ着さむ着し着す着せトイヒマタ着ルトイフヲ
着トモイフノデム
麻行一段ノ活用ナル(ミ)見ルトイフ詞ニ転云ガムコレハ何ヂヤ
トイフト試トイフ詞又垣間見ナドイフ詞デムマヅ試ハ
心見ナルヲ心見トイヒ垣間見ナルヲ垣間見トイヒ心見
ナルヲ後見トイヒ後見ナルヲ後見ナドノ類デムコレハ見
トイフモ見トイフモ同意デスガ麻行一段ト中二段ト活用

是ヲ活用転言トモ云マス

ヰノ轉云

〔頭注〕△改正本ニハ此段ニコノ末トヲリカヘシテカクアリ
トアルつきゐハつきゐノ轉言デム是ハ用トトイフヲ用ト云フベキヲ用ト云フト同義ヂヤサレド用ハ用ゐるト用ゐ有マスガつきゐハつきうト両様ニツカヒテ、ゐるトツカヒタル(?)ハ見アタリマセヌ是モ尋ラオカネバナラヌ又但シ用ゐるモ用ゐるモ意ハドチラモ同意ヂヤ徴ヲ挙テ申サウナラ名義鈔ニ云ニ以下大同ノ文

ガ替ルノミノ丁是ヲ麻行一段ノ轉云ト申スノヂヤ
和行一段ノ活用ニモ亦轉云ガ厶ルソレハ何ヂヤトイフトゐ
居ルトイフ詞ヂヤコノ居トイフ詞ヲ居トイヒマスガ語意ハ
居モ居モ同意ヂヤ此詞ハドナタモ聞ナレヌ詞デアラウカラ
徴ヲ申マレヤウ崇神天皇紀ニ急居此云菟岐ヰコレデ会得レメ
サレ又用トイフ詞ニモ轉云ガ厶ルコレハ用トイフベキヲ用ト云ヒ
用トイフベキ所ヲ用トイフノデ厶ルコレモ語意ハドチラデモ同
意ヂヤコレモ徴ヲ申マレヤウ類聚名義鈔部人ヲ以モチウ
又続古今集序ニ古今の字をもちゐるハトアリマスサレド
林葉拾葉集ノ方ニハ古今の字をもちふるもトアリマス
サラバもちふるハ往来云ト申スノヂヤ和行ニノ音ト波

〔脚注〕堀川ニ見ハ下段ニ載スル轉云ノ活用ヂヤ猶二ノ巻ニ徴ヲ挙テ申サウ

〔頭注〕改正本此段ノ末ニロク程シテ此一段アリ
聴聞中マヲアル一人ガ云ヲレカラバつきうハ断止詞ニハアラザルニヤ マア答タ論ナリ崇神紀ニ変衛述迹姫命仰見而悔之急居 此云菟岐于 則箸撞陰而薨トアルヲヨク見ラレタガヨイゾつきゐテ自懲ヲ著ヲ以テ陰門ヲオ撞アソバレタノヂヤつきうそなもちうト語ヲツヾケテ見ネバナラヌ所ヂヤ会得レタサレつきうテ文をなもちうトムスベキヲ文字ヲ省クハ常ノ格ヂヤガ心得ス仁ガアラバ第二階ノ講談ノ寸申サウ扨轉言ノ論ガアマリナガスギテドナタモ飽ラレタデゴザラウ於第三階ノ講談ニもちふるトアルトコロデ申サウ

行ニノ音ト往来マスノヂヤ緯ニ往来ヲ往来言ト云ヒ経
ニ轉ヲ轉云トイヒマス往来ノ丁ハニアガサキニアラハレタレ
月草ヲ見テ其定格ノアルヿハ合点レメサレサラ是デ
用トイフ詞モ和行一段ニテもちゐるもちゐるもちゐ
トイフガ根元デアルト云フヿモシレラレマレヤウ又急居ヲつきう
トイフテアルハつきゐト同意デ轉言ヂヤトイフヿモ知へ
ラル丶デアラウ又中ニ段ノ活用ナル用もちふるもちふれ
トハタラク方ハ和行ノゐヲ波行ノひニカヨヒテノ夫ヨリ
ヒトツノ活用言トナリレ訳モシレラレタデアラウサテ轉云ノ論談
ガアマリナガスギテドナタモアキラレタデゴザラウ

サテコレヨリ又一段路ヲ一ノ音ナルきほひみ以ゐヲ
其々其ノ断止ズシテ連続アカシヲ申シマセウ

連続ぞノ徴

萬葉十一 吾背子之使乎待『跡笠毛不着』出乍其見之雨落久爾 なきもまで（ナイデ）

源氏橋姫 すみなれ給ひし……のあひ給はしある
なけれども……よそに思ひやりしは
かで（ナイデ）いとあはれにおぼつかなう思ひしを
時つさなどもくもりいぶかしうおぼそかなれ給乃おもかげ
れいのまで（ナイデ）きこゆるをゆうしづかにて
落窪三 かゝるまちみしこと父なるまで（ナイデ）いひをとりげ

……なる姫君なりけり
大和物語下 このおとこをたしなしならびなく大徳は心にもあらで
ならひけるがおやにも（て）京にもまゐひてなむ
ありけるとぞ』

萬葉十四 芝付乃御宇良佐伎奈流根都古具佐 安比見受安良婆安禮古非米夜母』 あひで（ナイデ）あらバ 安禮

徒然草上 音にきゝて』見ぬ人』何事もこゝろもとなし
ありつあるはこともなくりみで（ナイデ）にほはせて
いひちらさせはるに

(ゐ)

枕艸紙 五 春曙鈔 行事の蔵人のいね置ぐさね そのやうこときよらなる 四□

ちらねば『ちどちまきとど中〻画ものがり ゐ 摂 女房ども

いそたるさぬほめそしり

(ゐ)

順次往生講式 知利毛為須（チリモヰズ） ちりもゐ摂 粟与久多邉（アヨクタベ）

奈留古呂毛美尓加介天（ナルコロモミニカケテ） 註五本コレナシ

サテコレラデ一段ノ淺解ノ一ノ音ヲ受ルぞノ連続アカレ且又

俗意ヲモワキマヘラルヽガヨロシイ

コレヨリ又中ニ段ノ淺解ノ一ノ音 (き)(ち)(ひ)(み)(い)(り) ヲ受

ルぞノ断止アカシ且又俗意ハ「ナイ」ト解スベキ徴ヲ申ス

おちき

古今六帖四

こぞ舟の梶のしづく

くふおち(ゐ)摂ぞも 吐

此哥ハ人のこゝろをいふ

たのまむトイフ歌ノ上句

ヲ紀貫之ノ付ケラレタ

ルノデ此ノ邸前条

ニ申シタひ例ノ如ク

デ全ク断止デハな

ヌ 段二

ヤウ

断止ぞノ徴

(き) 萬葉九 神南備神依板爾為杉乃念母不過（カミナビノカミヨリイタニスルスギノオモヒモスギズ）

(き) あもひ吐もさき摂 戀之茂爾（コヒノシゲキニ）

十訓抄 八四段 けしのうぬ あやしの織のめなとが物越さき

ところが軍亀ハ陣里もくるしくいゝでか

(き) くへきも『ではいゝまでも百二日 などおハさきま摂

圓光大師繪詞 おほより佛教おほ『しいでどこ所詮戒定

法然上人傳六 傳六 恵乃三学をも吐 さきが摂

(ち) 莊河記 北川『でいふ川まる水おちき摂

(ち) 太平記 廿八 罪人此ノ苦ニ責ラレテ泣ントスレド涙落摂

吉平風躰抄序
ちはやふる神代よりさだまりて、うきしまの国のことわざとなりにけるより、此うたその心おのづから六段ありて、そのすがたは万代よく(ち)捨

○迩
波行中二段ナリ古リトテ四段ノ方ハ常アルナリ後世ハ両段ニハタラク詞デゴザル

古今六帖四　こぐ舟の棹のしづくはおちぬ迩とも

砂石集二四段　金乃泥にくもる迩　蓮乃水かろまぬが如く迩

萬葉十一　我屋戸之甍子太草雖生戀忘草見

未生　これどいまだおひ迩

千載集序　そもそもこの歌の道をまなぶることを

いふは、から日乃本のもろきふみのみを迩

まなびひ迩　志かの園をし柿峯乃ふるきみの玉をまなぶるも何ら迩

聴聞ノ中ヨリ一人スヽミ出テイハク學ハ波行四段ノ濫觴ト

波行中二段ノ濫觴アリヤ答云レカリフルクハ波行四段ナリノチ

ニハ波行四段波行中二段両段ニカヨフ詞デゴザ偲ヲ偲ブ

憐ヲ憐ナド皆ヨノ格デゴザルタドレ語意ハ四段ニ濫觴モ中

二段ニ活用モ同意デゴザル只新古ノ差別ガアルノミデヤ

簾中抄四　月みきかりみちたりいはむみちまろまいで

著聞集九　まく水をあみ迩

鳥ノ名　とう立て南へとびゆる段上六矢をさげて左右なく

も(以)迩

萬葉十一　面忘太爾毛得為也登手握而雖打不寒

うてどもさり迩　戀之奴

聴聞ノ中ヨリアル一人ガイハク本居春庭翁ガ詞ノ八衢ニハ

和行中二段ノ濫觴ガゴザ先生ノ御著述ノコノ詞の栞ニハ和行

△改正

シカレバ八衢ニ和行中二段トテ出サレタルハ皆轉言ヂヤ轉言デモ悉ク活用ケバ（識恨ナドノ知）和行中二段ノ活用ヲモ出サネバナラヌガ波レテ左様ナ活用ハナイデム是ハ春庭翁ガ勘定ノ足ラヌノデム義門法師モコノ ひきゐる ナド云フ詞ヲ定メカネテ山口栞中巻ニ ひきゐる とふも訓読ニ見えたることもなきを

故ハキトモ云ハレズイト見エマスゲヤ猶又山口栞左ノ文ノツヾキニ云ク然れども八ちまたにいへる崇神紀急居此日菟岐于

□ニハ同巻ニ乾を賦とよみべく注せる或ハ身をむといひ神をかむといふ類あらんともおもへるまどもことに

中二段 う うる うれ トイフ一行ノナキハ何ナル故デム

ゾ答云ソレハ前ニモ申ス如ク此段ナル和行ノ率 急居ナド

ハ實ハ一段ノ活用デ ひきゐる デムソノ ひきゐヲ

轉云ニ ひきう トイヒ つきゐヲ轉云ニ つきう トイフノデム

サレバ和行中二段ノ一行ハ何ノ詞モ皆轉云ヂヤサテ轉云デ

モコトゴトク活用バ和行中二段ノ活用ヲ出サネバナラヌガ ひきゐ

ひきう ひきうる ひきうれ 又 つきゐ つきう つきうる

つきうれ ト全ク活用スル徴ヲ見ナイデム是故ニ和行中二段

ハ省キマシタノヂヤ 徴ガ出マシタラ加ヘマシヤウマヅソレマデハ活用

又轉云ニシテオクガヨロシイ

□ヒバ和行中二段の活は決めてなしともいはゞさゞめあへる人よく〻思をたゞしてよ 上ト云ハレテアルヂヤ此ノ崇神紀ニ乾ヲ賦ト云ヒ身ヲ躬トナヒ神ヲ神トイフモ皆轉言ノ轉言ヂヤ是迄ニ云ハレテ

万十五卅ウ

あまひろそてひとりをちかふ

き

ち

ち

サテ是ヨリハ中二段活用一ノ音ヲ變ル で ノ 連續徴ヲ

申シマシヤウ俗意ハ例ノ通リ ナイデ トナリマス

連續で徴

萬葉五

烏梅能波奈伊麻佐家留期等知利

須義受 ちりすぎで 和我覇能曾

能爾阿利己世奴加毛」

源氏竹河

なかの入道乃宮をもとて こぎつぎで まゐり

頼ふなめり」

萬葉一

山越乃風乎時自見寐夜不落 ぬる夜おちで

家在妹乎懸而小竹櫃」

古事記上

夜知富許能加微能美許登夜阿賀淤富

受見之可拵毋伊等波
奴伊知予都寿和多流
麻呂

久遍奴斯許曽波、遠遍伊麻世婆、宇知
徴流斯麻能佐岐邪岐加岐徴流伊蘇能
佐岐岐流知[illegible]和加久佐能都麻母多勢
良米」

（ひ）枕草紙 [illegible] まどの石まひぬまたるむすも[illegible]
（ひ）類従本 [illegible]やなるむ』とおもふまそいとわろけれ」
（み）源氏 面あがり 人のもとかくも名をあまぎなおび[illegible]
まゐりてなめり」

（以）
（り）蜻蛉日記 二人乃御ちかひありき[illegible]つる」
（り）中務集 [illegible]すまゐも[illegible]まで柳のいと
（り）ハふり[illegible]も見ゆるいろの[illegible]」

是デ中ニ段活用ナル一ノ音ヲ受ルモノ運便徴且又俗
意ヲモ心得ラル丶ガヨロシイゾヨ
サテ是ヨリ又下ニ段ノ活用ノ一ノ音ナル（え）（け）（せ）（て）（ね）（へ）
（め）（ゑ）（れ）（ゑ）ヲ受ルモノ断止徴ヲ申且又俗意ハ例ノト
ホリ「ナイ」ト解シマスレバ解セラル丶徴ヲ申サウ

(え) 東大寺大佛殿縁記　大佛殿は建立乃時足固に大山ありて巨材を下さむとせしえ〔ゑ〕

(え) いづ○もえ〔ゑ〕をつけもしらず

(け) 清輔朝臣家歌合判詞　すみよしと尼ぞいはれども心もえ〔ゑ〕

萬葉三　燎火ヲ雪以滅落雪ヲ火用消通都　詠名　不得ツヒモ〔ゑ〕　不知あつけもちらま

断止(たえ)ノ徴

續紀宣命　朕方髪乎曽利天佛乃御袈裟乎服天在止毛國家乃政乎不行阿流己止不得　おほやけ〔ゑ〕イデ

あることえ〔ゑ〕

神中抄四河社条　今付說々案之有不審先綺語抄乃河上にある社をあまりなるをこそけなる河合社を云義不知川社之案内或人河社又はそれ〔ゑ〕

言ふにたゞくありさて夜のまも人こえ〔ゑ〕心えて〔ゑ〕　是ハ河社ノ説ヤ

大鏡一　むかし一条乃院泣なやとのをりおほせられけるをきこしめしては泣ずみまうふ一乃大臣をなむ春宮にたてまつらせ給ひしかばしろみ

按　コヽノ波行ハ羅行ノ誤カ

コノ一条江戸本ナシ

(け) 徒然草下　まづき人を知らず思ひあはせ〔ゑ〕

有「とらするも乃もなし殊にまうし」始あることを聡る「」

こそあらじはよけ〔ゑ〕のぼりみえて近〔ゑ〕

(せ) 西園寺殿雁馬百首　泡ふやふたちもとをとしかけ露ひとひとつどふも風をまちひの世〔ゑ〕

此歌乃詞ニかとをまれトヨミテ𪜈ガコノ詞ノクハ波行四段活用デかとほるトイフ詞ヂヤノ手ニハ波行中二段ニモ活用テかとほりかとほるかとほるかとほれトハタラキマスヂヤ是ハ前ニモ論弁イタシタ學[徒]ナドノ詞ト同格デ𪜈サ又コヽニかとをまれト書テ𪜈ハかとをまれノ推來言ヂヤ推來言ハ月草ヲ見テ合点レメサレ

(せ) 空穂俊蔭 虎狼むしけら『よら』ども人乃けぢかきことを
あくりまよせ〔御〕

(せ) 濱松物語一 たまとぶほしぞせてやとめるわざをせむ』と
いひあはせつゝおどろきあざむけしき
見せ〔御〕

(て) 源氏玉葛 母君乃ゆくゑを志らむ』とよろづの神佛
にまうでゝよるひるなきおいてさるべき所々
をたづねさと近きまゐでつゝみにえきき
いで〔御〕

コハ中オクテガム『ゆく』氣や『ゆく』ガ本デ『ゆく』ハ往来
言ヂヤ又『つゐ』ハ『つひ』カ本ヂヤ『つゐ』ハ往来言ヂヤヨウ

(て) 心得タガヨロレイ 圓光大師行状絵詞十六 法然上人傳十六本 高野乃僧都明遍ハ三論の奥旨をきはめあ
才名世にゆるされしかども名利をいとふ心
ふかくしてうと光明山に居をしめて諸行を
すて〔御〕

(ね) 落久保一 ねるもいもねず〔御〕

(ね) 竹取物語一 ねぶりやすきもねず〔御〕

(へ) 知顕抄 大宮川之条下 是を御溝水といふゆへに二条より上を溝

（へ）
新六三　清浄にさいやげて花をたらふうこそ御
すゞおいる野中の志をづいてづらふぬるまき
あらうも世に叫つゝう御

（へ）
四季物語注　神代にも草木もものいふをときまれる
後世になれもさなれまハ谷のあゞれ山乃山風叫とつで
もさつくへ御

（め）
新六三　千鳥　風をいとゝあうりにこよふ友に寄る浪たか
かゝし〜流しとこめ御

（め）
壬生二品集上　わおやども人もこれ野乃浅茅原かよひし
駒乃あとも叫とどめ御

（め）
堀河院百首　とるまりなぐ人しなれきむ春駒乃野辺の

沢水にみもとこめ御

（匠）
十六夜日記　こゝろハ三ゆるたい川をしめ乃さぐめる記を
なきハふりみふくみしぐまもと匠御

（匠）
源氏夕霧　大輔乃めのとしいとくるしてきこてもの叫
きこと匠御

（匠）
正暦日記　卅六日あなてなるひておもむきまいるをおり
より浜風ありくしく雲かくれちさはぎ
て富士叫つんそ御

サテ此文ニ…トアル詞ハ…ガ本ヂヤ…ハ往来言
ヂヤ　又云るどゝろさハ…トアルハ…ガ本ヂヤ…
ハ往来言ヂヤ　張ニ假名多ガヘヂヤ　ナイゾイサレドモ今

一九三
すまのあまのしほやき
きぬの衣はまどほにし
あればいまだきなれず
須麻乃海人之塩焼衣乃藤服間遠之有者未著穢

ノ世ノ中スベテノ古学ヲフレタフヽト成タレバ往来言ヲフルク
ヨリ往来レテ有ル詞ハ用ヰテアタラレイ往来言ハ用ヰ
タクナイモノデムサテ今ヒトツ申レノコレタ見えまでトアル
詞ハ「ミヽまで」ガ本ダヤ「見えまで」ハ往来言デムグ 往来言ノマヽハ月草ヲ見テ会得レサセ
萬葉十一 木國之飽等之濱之忘貝我者不忘 わすれまで
年者雖歴
今撰和歌集 うき雲のしるびくよもの月かげハかくとふき
ぬ〳〵もほどもきへれまで

扶桑拾葉集 九下 俊勝 さゝがにもてもりぞめるその光りもてならどれる
軒端いくへのまねてすゞもみやうしくちりも
すゞりまで 是ノ文ハ豊臣勝俊朝臣ノ妙壽院ヲイタメル辞ヂヤ
コヽニすゞりまでトアルヲ一本ニ「すゞまで」トアリマス「すゞりまで」ガ
本ダヤ「すゞまで」ハ往来言ヂヤ
サテコレデ下ニ段ノ一ノ音ヲ受ケまでノ断止詞ハ会得イ
タサレタデアラウ是ヨリマタ連続までノ徴ヲ申レマシヤウ

連続まで徴

源氏物語 素 までてすきもしきかるべきなくりまで
わらひあをさと人のいそむやうにさくら
え初おぬせられて」と中将まくむ」

引八ト云『で』ノ意ナリ　(え)

万葉十二
高麗錦紐之結毛解不放ときさ(け)まで
齋而待杼驗無可聞』　(け)

百十二
すみよしのきしのひめのゆふひもとけてまつ』とけまでしまし　(け)

従月秋集云
としごろはかなきまぎれにまぎれつゝ家のうちにもあらでおはしつる人をも名をとだにきこえさせ給はざりしを　(せ)

大鏡 五 九代
ちかくなりて侍る『とてもいけつやうりけりらせ
給ぬ』いのちなる事なかり』ところえ給へ』おほし
めすほどにうく位川のせ給へり一年八年ト云ト云ヿ辭

萬葉二
磐代乃野中尓立有結松情毛不解
古所念』
こゝろもとけ給へ』

日中行事
まづて一箇をとらぬほどに二箇已下是を
結つかれしをとうへるほどハ末乃藏人箸を
おとの給へかへりけもたびけ給へりつかふまてくふ
なり』

十訓抄八 四
西行法師男なりける時かの郎等男女

まて耳に物をさとしやきなきなんが心ちうとけぬ人を
何』ともおもはれぬ』西住法師いまだ男まて
源次兵衛尉』とて有けるに目を見合せて
此事ころ既に』とけ云て人にもうちとけさせ給へ』さ
まげなく御乃氣色ものそうとけて居られ

萬葉 十四
伊可尓思騰吉比波伊可伊毛爾武蔵野
乃宇家良我波奈乃伊呂尓低受安
良牟いろにでぬ』とてあらむ』

源氏 箒木
さおかのふかきひしろきゆかかれまひる
まさそぐせ』といふがあやなることゝいのちなるをつけ

ぶや『よいひもまて瀬ちりりとでぬるふ

㋹ 萬葉 ホ 伊幣毛良等伊乎禰受乎礼婆安 そと

ねられてまて 多頭我奈久安之弊毛

美要受波流乃可須美爾

㋹ 順集 さみだれのもさつまもまくさむみる

とりおきひのよるそいもねられ

コノ歌ノねられハ結句ニアレドモ斷止ニテハゴザラヌ上

ノ句ヘ返ルデゴザル おきびハ燠火ニ起居ノ両吟ヂヤ ひト夜ノ往來スルノハヂヤ 改正オカクアリ

㋬ 萬葉 十 朝井代尓来鳴杲鳥汝谷文君丹戀

八時不終鳴 ときをへなるく』

聴聞ノ中ヨリアルヒトリガイハク時をへずトハイカナル

意デゴザル答テイハク時ヲ不終デナクノ義ナリ節リまで

なくナドモ此詞ト同ジヤウナ詞ヂヤ時リ長ナクノヂヤ

時不終モ時ヲ不終長ナイテヰルノヂヤ時トイフハ此哥

ニテ申サウナラ杲鳥ガ鳴ハジメテ鳴ヤムマデノ其間ヲ

時トイヒマスノヂヤ其時ヲ長杲鳥ガナクノデ不終ハ時

ヲ早ク終ナイデナクト心得テヨロレイデゴザル此歌ヲ萬葉

集畧解ニトカレタ説ニツイテ論弁レタイノデゴザルガコト長

カラ別ニ申サウ

㋬ 草根集 春日といでゝ『ともなきあしたの世すゝ

つのくにて世をわたるかなれて せとわたるでをわくるかな

㋱ 寂蓮法師集 名にたかきもんじゆの磯をけふ見るまで

あまをとめ舟（ナデ）浪がうきけり」

（め）源氏夕顔　見もえたつ程までわらひとりさうしがりいでき
持給へりけりさる人よいきとのべてぞ
かくしきるるもおほろえきる」となむりいと
いとくえもとめ給（ナデ）なきたまふ」

（近）萬葉　七　神前荒石毛不所見　足近給（ナデ）浪立奴従
處將行　奇道者無荷

（近）源氏玉鬘　さる方もとうわ紀前おき玉』とかいひて」
そのわたりまでいまかうしある人ハまゐりて
少貳のむまぶんのありさまをききてつくろ
打えに近給　なをとづきくるもいとかみじく

為治曰ク拊ト云詞ニ加ト同ジク『句點ヲ加ヘテレタルナヲ黒河先生ニ問ヒシニ先生曰ク拊ドハナンゾカヤトトムアリニテ其ナンゾカヤトムアナハ必ズ上文ノ中ニアルナリ也ト答ヘラレキ（為）

年ろしまときやまでなきむ』コハ二ノ印ヲ附タハ往来言テムコレヨリ已下皆ナヤウニ
ナメシテニシヤウ

（ヒ）山家集　上　雲のかる山』でも我もおもひいづよ』花ゆへゑるれ
しむ川びわきを至給（ナデ）

（土）蓮生陳状　但五月雨昔をわすれぬ事まてりつバ味す
おまりまわる郭公まてもわらめ』などある
せらとて方もいづとてハ又五月』でみゆる詞此
外にあらで至給（ナデ）いつバ

永緑奈良坊歌合判詞　左乃歌はとに跡しかへねとさせらふとがるし』
みぐるしき文字』などもすみ給（ナデ）とみわるゝ
と似ワリ」

（こ）

サテコレデ下二段活用ノア音ヲ受ル割ノ連続辞ハ合点
セラレタデアラウ
コレマデ又加行奈行左行ノ三変格ノ一ノ音ヲ受ル割ノ
断止辞ト俗意トヲ申シマシヤウ

断止ぞノ辞

萬葉 十一
梓弓引見弛見不来者不来来者其其乎奈何不来者来者其乎
此哥ハムツカシイ詞ツヾキテムカラ別ニ釈ヲイタシマシヤウ
梓弓ひきみゆるべみこずばこず こばこそ

玉葉恋二
よるまつとひるまく
らでは月もあれど
ゑしまおもへど
こひしもこ割
□

（こ）

そをなどこずば こば そをと
比哥ノ四ノ句ヲ萬葉集略解ニ来者其其乎奈何
トヨマレタノハ誤デヤ第一意ガトホリマセヌデヽ又来
トイヒテ希求ノ詞トモナル下ハ如ノ辞ノ講釈ノ時申
マシヤウ
嘉元百首
人はこずとも我ふみならす跡ばかり
ほりきし谷のこのひ落
コレラデ加行変格ノ一ノ音ナル（こ）ヲ割ト受タル辞ハ
會得セラレタデアラウ是マデ左行変格ノ一ノ音ナル（せ）
ヲ受ル割ノ断止辞ヲ申サウ

（せ）

萬葉 七
武河乎船令渡呼跡雖喚不所聞有之

落久保四　御ゆりてのちまて物をとひつるえべきものを……部もおませ給』

(せ)撥音毛不為　かなはよいせ給』

(せ)續後撰雜上　月おゆく雲のかよひ路かはれども をとめ
のすがたはわすれしいせ給』

(せ)方丈記　まづて世の人の住かを作るならひなるほど
手のこめるにいせ給』

(せ)円光大師行状繪詞　其後も國中の貴賤たうとみあがめけるが
番匠にてありえおませ給』念仏の化導もひろく
ぞ行はれける　是ハ繪詞卅五ノ巻ナル禪勝房ガ行状ヂヤ

(せ)落久保ニ　それを申しそ』まことおもくちもおませ給』
サラ爰ニヨウ弁別セネバナラヌコトガムヂヤソレハ何ヂヤ
トイフトニ一段ノ轉言ノ所デ嬉させ』嬉き』ト四段ニ活用ウツリ

マストイフタヲ大坐モ此格ヂヤト申タツノ大坐ノ詞デム
先大坐ノ詞ノ根元カラ申マレヤウ大坐ハモト大坐ト
云フ詞デム其アカレハ續紀宣命ニ日嗣之位者大命
爾坐世大坐坐而マタ同キ宣命ニ大御形毛圓滿天別
好久大末之波末世トムヂヤコノ大坐ノ二字ヲ伊勢物語
真字本ニおもし』ニ當テ書テアルヂヤソレ故ニおもし』
ハ大坐ガ根元ヂヤト申スノデムサレバ大坐ハ佐行四段
ノ活用デヨイ訳ヂヤガおぼます』ヲおもし』ト約テイフテ
ハ必ズ佐行変行ノ活用デイヒナラハレテムヂヤ熱田縁起
ニ。○許多寳媛命ノ御歌ニ　夜須久志津加爾於波瀬又麻毛利於波勢與
ナドモ見エテデムヂヤ四段ノ活用ナランニハおもせよ』

四段活用ナラバおほせ(せ)ト希求言ニ云ヒテおほせ(せ)ト文字ヲ添テ云フコハ上代ニハカツテナイコデゴおほせ(せ)トモ又おほせトモ云ヒテ希求言ニ用フテ有ガ則チ佐行変格ノ的證デゴ其外九ラノ詞ニワタリテモ四段ノ五ノ音ニヲ添テきこしめ(せ)きこしめ(せ)ナドヽ云フコモ上代ニハ曽テ无イコデゴ皆中古ヨリ已下ノコデゴザル

頭書細注

トハフルクハイハヌコデヤ「四段ノ五ノ音ニヲ添テ希求言ト為ルハ中昔已後ノコデゴカラ」是ヲモツテ大坐ハ佐行変格ノ活用トヿガ定メ申スノデゴ

サテ是デ大坐ハ佐行変格ノ活用ナルコヽドナタモ會得レメサレタデゴウサテコノ大坐トイフ詞ハ金聯尊言ヂヤグソレヲ又ヒト段タフトミテ大坐大坐大坐大坐ト惶佐行四段ニウツレテ中昔已後皆ツカウテ有マス是ハ大坐させトまをすデ告させ玉ふヲ告玉ふト云ヒ見させ玉ふヲ見玉ふト云ヒ聞させ玉ふヲ聞玉ふト云ヒ佩させ玉ふヲ佩玉ふト云ヒ執させ玉ふヲ執玉ふトイヒマスコノ告見聞佩執マヽ一段ノトコロデ論弁イタメレタ著ナド

頭書本ニコレ大ナレ而メ上層ノ文細注ナリ

惶ハ左ノ誤カ

皆コノ定格デゴ大坐ヲ佐行四段デツカフノモ中昔已後ノ人ガ私ニツカヒ出レタ格デハゴラヌフルクヨリ有ル格デヒト段タフトム格ヂヤ義門法師ガ山口栞又さし出の磯ナドニイカイ骨ヲ折ラレテ大坐ハ左行変格ヂヤト定メラレタハヨイヂヤガ其餘ノ活用ハ誤デモアラウカ又ハ寫誤デモアラウカト論ゼラレタハアカヌコデゴ佐行変格ノおほせるハ普通ノタフトミ言ヂヤ佐行四段ヘウツレラレイフノハ又一段マレテタフトム言デゴ

サテ又モヒトツイハネバナラヌコガゴ此佐行変格ニハタラク大坐ヲ佐行下二段ニモ中昔已後ハウツレテイウテアルヂヤソノ下二段トイフハ宇津保蔵開巻下ニおくておほせてるも

とも近まり給ぬありしをとうちておはせ給ひし

で近しうぞ又栄花浦で別にそゝろぞくしておはせまれ

ドト見エタルノヂヤコレハおはせさせ給ひニハおはせノせさせヲ約メタヂヤ

何ノ遊附モナイコトヂヤ義ツ法師ハコレノおはせ給ひし

おはせまれバヲ謂字デアラウト思ハレテ甚ダ窮セラレ

タツコデ下ニ段ニツカフタル処ノ右ノ園樣浦々別ノ両處

ノおはせハおはせさせ給ひトアリケニヲさせの二字脱ぐるま

たゞむトカヤウニ近イハレタガ縦言トハ更ニ気ガツカレナン

ダアカス丁デムサ救コノツイデヂヤニ依テ申スガ南方紀傳

ニ元弘八年八月廿四日戌刻主上南都ヘ行幸 其より

笠置山ニ皇居中宮ハ野宮ニ行啓 万里小路季房卿

ロ印ヨリ以下四行カクアリ
尊語ノせさせ令せさせガ二種アリ令ノ字ノせさせ令ガ一種ムガ押ナベテカゾヘ見ルト尊語ダ八分令ノ字ノ方ハ二分デム

供奉して野宮へおはしまさせ給ふ事ニ一品公主此舟

宮ふたゝび世給はむとておはしまし更故あるりことコノ

たゞせト同義デム令ノ義デハナイ遊ばさせ玉はむノ義

ヂヤせさせヲ約テ遊ばせ給はむトイフノヂヤおはせ給ぶ

ト同義ナルコヲヨウ心得ラルヽガヨロシイ佐行下二段ノ

(世)ハ二タ様アルト前ニモ申タ通リ(ロ)タフトミ言ノせさせ

アリ令ノ字ノせさせガ一ツム令ノ字ノせさせハせさせしめ

トモ延テイヘドタフトミ詞ノせさせハせさせしめトハ決テイハレ

ヌ格ヂヤコレデヨウ會得レメサレ

サラカヤウニ大坐ハ三(四)遍アル訳デ其根元ナル大坐ハ四段

ノ活用ツノ大坐ノ約メ大坐ハ左行変格ノ活用ツノ大坐

㋤　㋤

ヲ今一段タフトニ詞トイフ大坐太坐大坐大坐ハ佐
行四段ノ活用又大坐ませト活用ハ左行下二段ノ活用
コノ大坐ませヲ約テ大坐トイフモヤハリ同ジ活用デ
同義ヂヤトイフニヨリ合点レメサレ此詞ニハ先達モ大
キニマドハレタデ公
サテ是マリハ奈行変格ノ一ノ音ナル㋤ヲ受ル所ノ断止
徴ヲ申マシヤウ
著聞集九　みさごの魚をつゝみてゐるを見てよめりける　為
ハ足ハ切るともたぐらみ給ふ㋤所「魚をみさごの
爪立るがら給㋤所「魚もとりもころさぬやうに「と
勅定をうけ給はりながらくつゝりこゝろかり「

㋝　㋙

サテ是デ三変格ノ一ノ音ナル㋙㋝㋤ヲ所ト受テ断止ノ
又俗意モ[ナイ]ト解セバ解セラルヽ、ケヨウ合点セラレヨ
是マリ又連続所ノ徴ヲ申マシヤウ俗意ハ例ノ通リ[ナイデ]ト
解シマス
猿丸集　ひとりゐてこひわびぬる「身に鏡のかげぞ
ひさもろてふみ近ら所ナイデ
萬葉二十　麻氣波之良寶米弖豆久礼留等乃
堅切ト訓ツケタリ

皺其等己麻摯波波刀自拵米加波梛勢栄

おもがはりせ給ひて

落久保 一

コノ条浴古本ナシ

かくてのちハいまだハしまさせ給はむといふ
いちへもせ給ひていひわづらひて居たりけるにこの
天の川を水かみるとてめでたけれバうちぬ

源氏處女

うへにまうでさぶらはせ給ひておほひるおはしまし
ゆきてめでたきある人のもとにゆるびせ給ひてくらう
ゐてわぶめる事をゐなひて餓わまおでさせ
なたまふ

太平記 十五 三井寺合戦

法師武者の長七尺餘もあらむと見えけるが
阿閉了願と名乗て唐綾威の鎧に小太刀帯て
柄の一丈斗なる鐵を馬の平頸に引
添て少も擬議せ給はずこそ

風爾都礼奈栄物語

一条の左大臣ときに御むすめの女子
ぞおはします人おはすめるあまたうちめもあ
やまるつしけれバちうとぶらぬなしきも
のはおぼしてただ一人ぞおはせ給ふ
しづきあふ女御よりもやむごとなくしふかし
づき給ふを

此外变ノ行ニ活用詞ニ居ヲリ侍ハベリ等ハ左様デハムヌカラ是モ心得置并ニ居侍ハベリハ是迄ノ通リデム

サテ是デ三变格ノ一ノ音(に)(せ)(な)ヲ受ル𪜈ノ連續ツヾク徴且又俗
意ヨリモヨウガテンユカレタデアラウ
又是ヨリハ良行四段一格ノ一ノ音ナル(ら)ヲ受ル𪜈ノ斷止キルヽ徴
且又俗意ヲ申マシヤウ此段ノ詞ナル有アリトイフ詞ニツイテ心
得オカネバナラヌヿガムソレハ何ヂヤトイフト一ノ音ノ有アリ𪜈
トイフ詞ヲ俗意ニ解セニハ[あり侍]ト解セネバナラヌヿデム
「コノ所以下上層ノ如シ コレガ一格メルエヱデムバヂヤ」サテ此有アリトイフ詞ト同格ニ活ハタラク
ハ居ヲリト侍ハベリトノ二ツデム詞の八侍ニ有アリ居ヲリトアゲラレタルヨリ

因ニ整全ナホ階まて示すべし

レテ後人ガ有居アリヲリノ活用ハタラキトモイヒマスガソレハコロ中ヂヤ侍ハベリ
トイフ詞モコヽノ活用ハタラキホドニ有居アリヲリノ活用ハタラキト申スノハワロイ
トコヲガ申スノヂヤ

[斷止キレドマリノ徴]

萬葉 十 梅花開有ウメノハナサケリ 岡邊爾オカベニ 家居者イヘヲレバ 乏毛不有トモシクモアラズ と
もしくも(あり侍)ロナ 鶯之音ウグヒスノコヱ
古今集序 月をおもふとてしるべなきやみにたどれる
心くをみなひてまかしとおどろかなり『とおもし
めしけむこのあるのまにデ(あり侍)とでもき
石ふたとへ筑波山このけて
國ニイフヿガム并門法師が山口栞ニ柳ちどりハ居あり有

のつゞまりなりさて四ッの活詞どもの第四音けせてへめれ
よりらりるれと活くるもいづれも有字在字の意なる
あらふ㋑韻のり文字を截断言とさだめて筆業子卯
ぐる處ハ莫有靡有とやうにてかけるもさて此ちぞ
ハ其をぞりをけりりなどふるめぐひておるハそのる洲
却くるなどふるゝぐふ詞なり上ニトアルハ尤ヂヤトオモウヤウ
ヂヤガ左様デハゴザラヌレカラバヨウ会得スルヤウニ弁別
イタサウみる八る洲さくニ類トイハレタハゲニ尤ヂヤガ
そとるガ別ヂヤトイフハイカイ惑レヤウヂヤそとるモヤハリ
同ジコデトモニ断止ト連躰ト兼ヌル詞ヂヤモノヲ何トテ
カヤウナ説ヲイハレタコトヂヤカヤウニ義門師ガマドハレ

⊠良行カクアリ
サリナガラ四段ト格ト同ジ
カラザルトコロハ断止ノ辞ノサマ
カ達デム名ナレモ断止
ト断止トコロト同ジカラズシ
ラ有トイフ詞トモハラ同ジ
キユヱ断止ト辞ノ辞ノサマト
ガモハラ同ジキハ名良行

又種トイフモノハ此ツヾキノ文ニあれバぞ古今集またてれ
ぞれどもとよめる哥見ゆこはそてま類ひてあるむあれ
とふべきまどゞ莫有みるぐひてなるゆちも居有とハ
いつるなるべし上ニサコレデシレマス此古今集ニこそそれ
どもトイフテアルヲ見テノマドヒヂヤあそれハ莫有ヂヤ
ガそれハ居ヂヤ居有ノ義デハナイモノヲ何トイフ心得
又ガヒゾヤ
モヒトツ心得ネバナラヌコガ此良行四段ノ格ノ活用詞ハ
前ニ申ス通リニ此アリさスガ有ト侍ハ此段隣リノ活用詞
ヂヤガ居ハ此段ノ五ノ音ヨリ又⑤㋷③③㋹トウツリテハタラキ
マス詞デ四段ノ活用ト同ジ格ヂヤ⊠サルヲ義門師ガ居ハ

居有ノツヾマリヂヤトノ二思フテ居ラレタカラカノ山口栞
ニ漢籍讀ニなをり居之とよめるやうの處をとりくてえ
これ雅文にも云へるやまあるにトイハレマシタガアカヌコ
ヂヤイデ其徴ヲアゲテ示サウ中務集ニ三条の女御なと
しに合しぬふ迄あしらぬぬをれる涙の道のるぞしこ
ハ千世をやいろも引ハそふらむトムヂヤコレガスナハチ
居有デ立看ト同ジ格デムコレカルヲ峯門師ハ此をれるハ
折有ヂヤトイハレタガアマリナコトヂヤ田鶴ガドウシテ撫子ノ
花ヲ折マレヤウゾ代物デモアリハスマイノニ又長明ノ方丈記
ニ故郷ハ既にあれて新都はいまだならずありとし
ある人ハ皆うきくもの思ひをなせり本よりこの所ニ居る

ものハ地をうしなひて愁ひ居てトアリマス是デヲガ定
メ申スノヂヤ峯門師ノソレルノヂヤナイ道ノタメヂヤカラ
申スノデム
ツイデノヂヤニ依テ居ルト居ルトノ論弁ヲイタサウ先ヅ居ルハ
和行段ノ活解デ居ル居ル居れトハタラキマス引居ル居ルなど
イフハ前ニモ申ストほり轉ト云トイフノデヰガ風行ノ引ニ合り
マレタノヂヤ居ルトイフ詞ハ居ルトイフホドノ意ヂヤガ元ヨリ
別ニ出来タ詞ヂヤ其差別トイフハ居ルトイフ詞ハチヨツ
ト居ルニモ長ウ居ルニモツカウ詞ヂヤガ居ルトイフ詞ハ
長ウ居ルコトニノミツカウテチヨツト居ルコトニハ変テツカハヌ
詞ヂヤヨウ会得シメサレ

長唄無名抄
井堤『』といふところは
まうりて一首つらう
まつりたる事侍るを
実乃ありさま井堤
川流是なるさい能
おもしろく侍らむ

ら ら ら ら

顕昭陳状 故人乃申されしハ筆のすさび頃がよみ残したる
歌の中有りけるに匡房卿敦隆道因『』など叱
読加へたるよし侍まするを吐頃がわろきぞデ
あしだて 此ヲ因ト解スヿ四段ノ歌ノ才中ナシヤウ

紫式部日記 暁より人々はけさうしこころばへひきつくろひ
ちあれぬ御座ハ西のかいるれバこゑく叱れいの
やゝまさがらう吭 あしだて

大鏡五ノ九代 ころをさへまことに人ゆるうる給ふそうと『』もとおぼ
つのる『』よくもれば吭延侍らむ『』ナイ

六百番歌合 元明 判云 左方も申さる『』をぞおぼけるハ右方とがめ申
申『』もさへ侍らむ『』ナイ

ら ら

連続き徴
榮花木綿四で おとらしも光顕きこゆるのりあてふし給ふる一乃
官おもしましておとらしやし起久声馬をせむ『』とおもし
なうせ給へバられデあも あしだて カク おきあがり給ひ
てうぞひしてのせをうち給ひてなうこちう給へバ

兼好法師集 世乃中あらしおもデ あらだて カク らめりてありて
なれ見し人もなくなるりいくさきを我

サテ此良行四段ノ格ノ連続ノ俗意ハ外ノ活解ト八遠ヒテ
[ナク]ト解セネバナラヌコトデム其故ハコノあら『』ハ意ノ下ヘツヅキ
マス故デム是ヨリ已下ノ五格 四段五ノ音ヨリウツル格 志くしき下一音ヨリ移ル格 等ノツヅク『』
ハ同格デヤホドニオナジレク[ナク]ト解セネバナラヌコトデムヨウ

⑤

合点シメサレ　コノ条改正本ハ[illegible]ノ上ノ所ニアリ

長明無名抄 井出山吹ノ条　ちかき藤のいふかひなく侍るなるそかく
名あるきことて事もおきき侍る刈田つくる
事ハ草いれゐるかようにいでくるとやて侍る程も
なく刈文侍し程ぞふ今ハ跡もるゝしなきむ
なりて侍る　改正本ナシ

良行四段ノ一格ナル詞
ドモハ皆あげる おせる 知ル 知ル
ヲ如此たドノ知ル知ル
此ノ紛ヲあげる おせる ヲ
セトナリタルモノナリサ
レバあげる おせる ヲ
トモハあげる おせる
知ル知ルトモ云トハ許モ
意味ノ差別ナシ 但
シコヽノあげ おせる
トヤウニ也ノ辞ヲ紛ル
タル即チ言リ四段ノ一格
トナレバ他ノ辞ヲ受ル
ト活語ト如クモ氏
あげる おせる 知ル 知ル
知ルトヤウニたるトニ云
辞ヲ附ルトハたるが
辞ノ性末ノ但ニエ上活
語ヲ通リ他ノ辞ヲ
受ルコトノミハ大ニ
良行四段一格トたる

⑤

四段の五の音よりうつる格

サテ是ラデ良行四段一格ノ活用ナル一ノ音ヲ知ト学テ断続トノ徴ハ心得ラレタデアラウ是ヨリハ又四段ノ活用ノ五ノ音ヨリウツル格ノ一ノ音ナル⑤ヲ知ト学テ断止徴ヲ申マシヤウガ（是ヨリ改正本ナシ）コヽニトクト心得オカネバナラヌコトガムト其訳ト申スハ此ノ活用ハ四段ノ五ノ音 ㋘㋝㋢㋬㋱㋹ ヨリウツリ来ル格ヂヤニ依テソノ ㋘㋝㋢㋬㋱㋹ ノ意ヲヨウ心得ネバナラヌコデムマヅ あげ（飽キテ） おせ（押シテ） らて（打チテ） おもへ（思ヒテ） すめ（住ミテ） つれ（釣リテ） カヤウニ心得ネバナラヌコヂヤタドレ 希求詞ニカヤスヘ方抔デガゴザラヌ希求詞ノ俗意（別ノ俗意ハ）五ノ音ノ講釈デ申マシヤウコデ申スト混雑イタス故ニ 但シ[おそ]ノムスビ詞トナリテキルハ下ト希求言トナリテ断止ノ下ノ俗意ハ又別意デゴザルゾヨ

源氏螢　思おまするはづきまうぐてさうしにみ

トムフ辞ヲツヾクルトノ差別ナリ

⑤

まそかゝろかなしぬ　あはれとつくしえせ

てあほうたまはいつきおもへ（らで）』

伊勢物語 類従本 二日『とつふおにまてあらむ』といふ女をといとあ

もじ『とも おもへ（らぞ）』

サラ是等デ四段五ノ音ヨリウツル格ノ一ツ音ナル⑤ヲ刻

ト覚デ断止徴且又（らで）若ニ「ナイ」ト解シマスコヲ会得シ

メサレ是ヨリ連續ノ徴ヲ申マシヤウコノ俗意ハ（らむ）ガ

「ナクテ」トナリマス

⑤

枕草紙 四 春曙本 いと住乃花人乃なをいろ『ゐできてうけたまわり

てやり戸乃もと『なとよそばよせて見えくて

（らで）へいろまく『などうりうしろをして袖う

ちなきせてゝろゝるさうちとうしるれ』

黒河先生曰ク なりにも如ト同ジク空句ヲカケタルハ ナラデハ カニヤカヤトトユフ

コニテ其カニヤカヤトトユフモノハ上文ニ既ニアルコナリトユレキ

⑤

栄花物語 後悔大将 僧坊より火いでありけり』そこちの人々火

をあつしともおもへ⑤ぞ などへだてや 异ナリ

くしき 志くしき の二の音よりうつる格

又云 立有ハ立テ有 靡有ハ靡テ有ヲ約ナリ こそうるひ トイフナルベシ

サテ是デ連続詞ノ徴且又俗意ヲモガテンシレメサレ
コレヨリ又くしき 志くしき ノ澁解ノ二ノ音ヨリウツル格ノ
⑤ヲ説ト受テ断止徴且又俗意ヲ申マシヤウガ 已上略ナシ ココニヒトツ
心得オカネバナラヌ訳ガム良行 前条ル 四段ノ五ノ音ヨリウツル格ハ
萬葉集ナドニ立有 靡有ナド書テアレド 立有 靡有
ノ約言デハゴザラヌ又其意味ガ出来タ詞ヂヤ コ丶ノくしき

モシ立有ノ約言ナランニハ立有トナラネバナラヌ丁ヂヤ意ハ立有ノ意ヂヤガ約言デ
ハナイ轉言デ一ツノ活用ト成シ詞ヂヤ美イくしき 志くしきの二ノ音ヨリウツル格ナル
[illegible]

已下段ニ左ノ如ク細書

志くしき ノ二ノ音ヨリ有ヘウツリテ 浅からず 深からむ
恋しからずて 悲しからむ ナドイヘル詞ハ全ク浅ク有ラズ
深ク有ラム 恋シク有ラズ 悲シク有ラム 等ノくしき 志ノ二音
ガカトハ約リテ出来タ詞ヂヤコレヲヨウ合点シレメサレイ
ソレヂヤニ依テ俗意ガ[クナイ]トナリマスワケデム

⑤ 古今集序 いましくみちなきをも数まる人よむ
人おほから(ぬ)

⑤ 千載集序 勅撰ノたまへてえらぶるところ金葉
詞花のふたつの集なりといへども部
類ひろ(か)らず

⑤ 徒然草上 あやしき枝なるに志ぶしくうち延へるを

此ノおさまりノ〔同〕ハ実ハ清音ナレドモおさまりト濁音ニ云ヒ習ヒテ有ルナリヤ忌マヽシナドモ云ヒ習ヒタルヤ くれておくれ ナド等ノ活用言ハ元テ濁音ニアラザレドモ其詞ニヨリテ上代ヨリ濁音ニ云ヒナラハシテ有ル詞ガ乙ヾ捨手レイナルハくれ てこそくれておくれノ講談ノ時申サウデム

(5)

〔おもての注解〕ツイデナガラニ依テ申マスガ此歌ハ〔も〕〔し〕〔の〕〔徒〕等ノ続辞〔か〕〔何〕〔9〕トナリテノキル、定ダヤ本居翁ノ玉の緒ノ粗論萩原廣道トヰテ人ノてにをは係辞弁ノ奥説ハ草枕ノ講義ニ申サウ

もてこがめぐるけふをひろわのやのなかにして
こゝろぐていふ人あまたバそこそあけそころ
せげるやり戸よりぞ入るぬる雨乃
さまゝもいろくさまゝまじ（あるまで）

萬葉 四 吾屋戸之草上白久置露乃壽母不有
惜 いろちもおし（のるまで）妹爾不相有
者

サテコレ等デ此 くしき しくき ノ二ノ音ヨリ山ツル格ノ一ノ音ナル(5)ヲ まで ト覚テ斷止徴且又俗意ヲモ得ラレタデゴザラウ是ヨリ又同ジ一ノ音ナル(5)ヲ まで ト覚テ連續徴且又俗意ハ〔ク ナク〕ト解レテ解セラルヽ徴ヲ

(5) (5)

申サウ

狭衣 一ノ上 大殿宮などもろくひろひはんぜし（てふ）ひ
ながらこの庭をハさそバさてもあまきもよき
まこの世務をし世の人のきておもちむてるも
ゆのしげるくけし（のるまで）もあるべき
これて

此 けしうをそ 又 けしう ナドイフ けノ意ヲ鑿朗主ガ雅語釈解ニトキツコネテ けしハ〔キウた〕異風るす故けしうハあるまでハ〔ワルウモナイ〕といふるそナドヽ解シレタガヤガ左様ナヤナイ けハ異トナフデゴザイウ ノ義ハ別ニ申マシヤウ

新拾遺 哀傷 こよひきみおもひさつめれあまく（あるまで）

君にちぎりのあるなりけり」
善光寺紀行 酉の刻の斜なるに御堂にまうで侍る夜
日ぐらしは引導する人ありて内陣に通夜
せし刹本尊の瑠璃壇をめぐりき」誠に
多劫の宿縁なるからおぼえて歓
喜の涙せきあへず」

方丈記 此京はじめをきけば嵯峨天皇の御とき
都とさだまりにけるより後すでに数百歳
をへたる」ことなくてたやすくあらたまる
べくもあらねば是を世の人安からず
愁あへる様ことわりにもすぎたり」

源氏帚木 うちよみもしらずきらいもくつまおとてつき口
つきられたなびくしからずといふ侍りき」

水鏡 上 文徳天皇よりのちつかうまつる人はからぞ中ちき
たるもしろけれなる」

サテ是デ十種ノ活用ノ一ノ音ヲ受ケ紐ノ断止続連続続倚意等マ
デヨウ心得ラル、ガヨロシイサテケ様ニ続ヲ定メタニ依テ紐ヲ一階ノ辞ハ
ト定メテ詞ノ躰ノ面ニ顕レタノデム
サテ是デ紐ノ講尺ハスンダデムガツイデヂヤニ依テ紐ノハタラキヲア
ラ〳〵申サウ先ヅ指辞ガ上ニ有テ も も の 唯 が 何 其結辞ト

ナリテ断止ノずデ是ヲ断止ノずトモ云フ又指辞ハ上ニアレドモ夫ニハカヽハ
ラズシテ躰言用言等ヘツヾクずデ是ヲ連続ノずトモ云フ此ノ二様ノず
ヨロハ今論弁致シタノヂヤ扨コノずデガぬトナルハ上ニ指辞ノ ぞ
や か の 何 が 唯 等ガ有テ結辞トナルすヂヤ 人のこゝろぞ風もふきあへぬ
なきうしともおもひぞもてぬ 此類ヂヤ又躰言ヘツヾクモ此ノぬヂヤ ちらぬ桜 ともぬ人
此類ヂヤ又ねトナルハ上ニ指辞 こそ ガ有テ其結辞トナルすヂヤ
人こそしらね いろこそ見えね 此類ヂヤ但シ こそ ガナケレバ だ ど ども ヘツヾクヂヤ
見えねば きのふねぞ 此類ヂヤ是ヲずぬねノ通解トモ云ヒマス
右ノぬね其外ずで等ノ論弁ハ辭ノ栞講義ニ申シマシヤウ
デハ先今晩ハ是迄ヂヤ

む

サテ是迄ハナガヾヽト ずノ俗意ヲ弁ジマシタガ只今カラハ又

む』ノ俗意ヲ弁ジマシヤウデムあゆひ抄ニむ』ノ里言ハ［う］といふ
ト解カレタハ至極ヨロシイガマダ少シ粗クテ益ニタチマセヌ
ヂヤ何故ニ粗イトイフニ全躰むハ［も］［も］［の］［徒］［が］［何］ノ
結詞トナルガヒトツアリテスデム。（コレヲ軽ノむト云）又［で］［や］［か］［の］結詞トナルガ
ヒトツアリテスサル（コレヲ重ノむト云）故ニ意モフタツ有ルワケテデムヂヤ［そ］［も］［の］［徒］
［徒］［何］ノ結詞トナル方ハ専断止むヂヤコレハあゆひ抄ノ説
ノトホリ［う］ト解シテヨロシイガ北邊成章主ハ［で］［や］［の］ヲ
結ブむノ事ハ更ニイハレズシテむニ軽重ガアルト説レタガ
是ハサスガノ学匠モむノ俗意ヲ解シ得ラレナンダユヘ左様
ナ僻説ヲイハレタモノト見エマスヂヤ［で］［や］［の］ヲ結ブむハ
一段重ウムゆ故ニ俗意モ［ウデアラウ］トナリマスヂヤ体言へ

ツヾリ寸モ此俗意ヂヤカヘスガヘスモヨウ心得ベキ事デム
先ツ四段ノ活用ヨリ次ニ申マシヤウ［も］［も］［の］［徒］［が］［何］
等ノ結詞トナルむ』ハ軽ク断止む』デム故ニ北邊主ノあゆひ
抄ノ説ノ通リ［う］ト解シテヨロシイデム

㋕古今春下
駒なべていざ見にゆかむ』ふるさとは雪
とのみこそ花はちるらめ』

㋕古今雑一
鏡山いざ立よりて見てゆかむ』年へぬる
身もおいやしぬると』

㋕古事記中
夜麻登能多加佐士怒袁那那由久袁
登賣杼母多禮袁志摩加牟』くれを
（助辞）むる』此ノたれハ軽ノ［何］ヂヤヨクヨク味ヒメサレ

比歌ナドニテ何ノ輕イト重イトアルコトヲヨク合点シメサレ

(さ) 古今 春上 鶯の笠にぬふてふ梅の花折てかざさむおいかくるやと

(さ) 古今 春上 山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさむ

(さ) 山家集 上 今さらに春をわするる花もあらじやすくまちつつけふもくらさむ

(さ) 方丈記 いかが用なき楽をのべてむなしくあたら時をすぐさむ

(た) 萬葉 十一 淺茅原刈標刺而空事文所縁之君之辭鴛鴦將待 ことをしまたむ

(た) 古今 物名 我宿の花ふみしだく鳥うたむ野はなければやここにしもくる

(た) 續後拾遺 雜下 うきことはなかなかにてはまさるなぞらへバ身のゆく末を輕よそにこそ見め

(た) 円光大師行状絵詞 法然上人傳 廿六 若われ造像起塔をもて本願とせば貧窮困乏のたぐひさだめて往生のぞみをたたむ

(た) 新後拾遺 羇旅 あらち山さかゆく駒もゆきくれぬ矢田の野の草に枕むすばむ

(た) 源氏 處女 御心のうちをこそもまゐりくるにおもひいでてもまうでてこそいとまも

新撰六帖 つむぎ 春もすぎゆくもあるらし野にまでつくるぬきにとるをさそふなり 何ハ輕也

（む）太平記 十五 正月廿七日合戦条 切岸乃面に二王立に立て名乗りけるハ
先年三井寺合戦乃張本に召れて越後国へ
流されたりし妙観院乃高因幡今村といふ
ものなり我をなき城中乃人々此矢ひとつ進ら
せよと云々』

（ま）古今 雑上 ちはやふるを輌まつまつ『うごろもくもと
ゆくらみてていますしと』
此歌ノ何ハ軽何ヂヤ何ニ軽ト重トアルヲ此歌ナドニテ
ヨウ合点セメサレ

（ま）続後拾 恋二 まどろまぬわが身の夢はなぶれるを
しきうばなふもくのもうむ』

陀石ナシ

（ま）古事記 中 美都美都斯久米能古良賀阿波布
爾波賀美良比登母登曽泥賀母登曽
泥米都那藝弖宇知弖志夜麻牟
うちてしやまむ』
此歌ヲフルクヨリ賀美良比登母登曽泥賀母登曽
泥米都那藝弖トヨミテアリマス 古事記伝ナドニモ左
様ニ訓テ説タテラレタガアカヌコデム

（ら）千載集 誹諧 おちまきと『うくろばうくもと女郎花
このひハ花乃落りやどるむ』

（ら）萬葉 十八 於伎都之麻伊由伎和多里弖可豆具
知布安波妣多麻毛我『都々美弖夜

良年つてぞてやる咲一

濱松物語一（改正ナシ） いまふとこう差しだのつきさ志のびあつまで

あぼしくりしけしきもらくくげなき

しなどおもひいづるまもしいめちらくく延そ

なくむゆきまつりこのほどのくろみとく

をすりいので見え咲延くそてまつる咲一

一段斷止勢ノ徵

サテコヽニヒトツ心得オカネバナラヌヿガ厶ソレハ何ヂヤト

イフニ此一段ノ活用中二段ノ活用ハ四段トオナジ俗意デ

ハ今ノ世ノ人ニハチト耳遠テ厶三四百年已前迄ハ勢ヲ

［ろ］ト俗言ニイフタヿデアリシヿヂヤガ今ノ世ノ人ハ左様

ニハ此一段中二段ノ両段ハイハヌヿエヱ［ヤウ］ト解セネバナ

ラヌヿデ厶ヂヤ猿楽ノ詞ニ見勢ヲ見勢ルトイヒ見勢ざる

ヲ見ざるナドイヒテアルヲ見レバ猿楽ノ詞ツクリシ

頃迄ハ常ニヨウ聞トレシヿニテアリシナラシサレド今ノ人

ノ耳ニハチトウトクナリマシタソレ故ニ［ヤウ］ト解レマスノ

デ厶

㋖ 萬葉 十五 由布佐礼婆安伎可是左牟思和伎母故我等

伎安良比其呂母由伎弖波也伎牟 ゆきて

はやき咲

㋖ 拾遺 雑上 ちぎりし人ハいふとも咲りてき咲 わがもと

まうりさきつきをさぎぬ

(き) 万代集 七 ちはやぶる神ハよそ白ゆふ川まバあさようハあけ
みこころも我けどころもすき哉 為治按けころもハ褧衣ニテけハ常ノ意ダ

(き) 山家集 下 なやひするさてめみこゝ哀きぬすき哉な
みぐみるをとしみぎりてすり

(こ) 古事記 下 於是為煮大御羹 あつものを(こ)哉

そして

(み) 萬葉 四 外闇者路多豆多頭四月待而行吾背子
重復 其間爾毎将見 そのまにもみん哉

(み) 俵草紙 四 そこらいもであるじあのゝも喰えてしがなねハ
あまねども見きこころゝ哉 試ハ前条ニモ申ス通リ麻行一段ダ本デヤ麻行
中二段ハ轉言デムグヨウ合点レ申レヤ

(ひ)

(み) 後拾遺 哀傷 陰ナシ
立のぼるけぶりにつけておもふかな いつまた
我を人のかく見ん

(み) 源氏明石 秋乃夜の月毛乃駒よわがこふるくもゐ
をかけれ時乃間も見ん

(み) 萬葉 四 夕闇者路多豆多頭四月待而行吾背子其
間尓母将見 そのまにも見ん

(み) 萬葉 十八 物能乃布能夜蘇氏人毛與之努河多由流
許等奈久都可倍追通見牟 つかへつゝ
見ん

(み) 千五百番歌合 ナシ いくかへりおひそふ松乃みどりをも見ん ますや
の山の春のさかえなり

(み) 竹取物語 ふきのしきもの見」とすべてにかぐや姫
べりまかれば

(み) 奥儀鈔 神風之条 八 天照太神倭姫命にをしへてのたまはく
神風伊勢国この国を(み)見」とおもふ」

ゐ ゐ

萬葉 七 山際尓渡秋沙乃往将居 ゆきてゐ鴨 其河

ナシ

瀬尓浪立勿湯目

拾玉集 三 たゞ今はいさ鴨のをまうくりける鴨 山田の

ナシ

いなの秋の中ふくなき

き ち

中務治部斷卜徴

夫木鈔 廿六 ちはやぶるぬなはゝ里の名もつゝし むかし

おもてさがり鴨 玉江井の

(ひ)

古今　戀一　山たかみしたゆく水のしたにのみながれてこ
ひむこひはしぬとも

(み)

古今　春下　花ちらす風のやどりはたれかしるわれに
をしへよゆきてうらみむ

(み)

後撰　戀四　何ふとてふのこゝろしるべもえさしのみあ
さきをゆきてうらみむ

(み)

源氏浮舟　あけとてば河のくゝをもちやりつゝもつゝ
れあゆをよりもみどなきにてもちすゆきかいい

こじきてるものゝ結つり今さゝ人や見む
「しのぶこの浦をさぐまおもしろまもあかず」
「のゝをぶにろも世乃中みをめずばいづこを」
「君をとろゝみ慰」との

扨爰ニアゲタル慰トニフ詞ハ[み]ノ轉言ノ処デ申シタ通リ慰ハ心ノ見ナレバ一段ノ活用ガ本ヂヤ中二段ノ活用ハ轉言ノ活用ヂヤ然レドモ往古ヨリ轉言ノ方ヲノミ用テ本ノ方ハ用フコハ稀デ有ル故ニ慰ハ中二段ニアゲマシタノヂヤサリトテ古今六帖ニ書トニフ題ニろちよするおやゝらむ深きまゝのよそし許おもゝみどなきとト有ルハ一段ノ活用デム 是ハ本ノ方ヂヤ 又前条ニアゲタル一段活用ノ徴證ヂヤ

紙

試ハ本ヂヤ試ハ轉言ヂヤガ此試ハ本ノ方ノミタタク用テ轉言ノ方ハ稀デムサリトテ公事根源石清水臨時祭ノ条ニ試楽ハ調楽ともいへりまづ音楽をとゝのへならしむるなり ト有ルハ轉言ノ方ナリ左様ニ心得ラル、ガヨロシイ 爰ニハ稀ナル方ノ徴ヲアゲテ示シマス

又後見ハ一段活用ガ本ヂヤ故ニ後見ト有ルベキヲ此詞ハタタク云ヒ居テ躰言トナシテ後見トノミ云ヘドモ稀ニハ轉言ノ活用ノ方ニテモ用フコヂヤ 狭衣 こゝろしろむる人あらむむまうハトアルヂヤ トニフ方ガオホイデム 但シ一段活用ノ後見 又垣間見ハ一段活用ガ本ヂヤ故ニ垣間見ト有ルヘキヲ夫ハ見アタリマセヌヂヤ 扨垣間見てけりト伊勢物語ニ見エテ有リマス猶又大和物語ニ ゐさしくいのざませバつましくてたてりけるをさてかいまめでト見エ更科日記ニたちぎきかいまむ人のけはひしてト麻行四段ニ活用

テ有ルハ是転言ノ活用ヂヤ然ユヱニ垣間見せさせよナド云居
テ躰言ナル時ハ麻行一段ヂヤガ垣間見てけり垣間見ける
をナド用言ニ云フハ皆麻行四段活用ナルコヲヨクヽヽ会得シメ
サレ

下二段活用断止む徴

此段ノむハ四段同様ニムト解シテ随分ヨロシイヂヤサリナ
ガラ詞ニ依テヤウト解セネバ俗意ノハキトセヌ詞モアル
此義タヨウ心得メサレ但シ俗意ハウト解シテモヤウト解
シテモ同意ヂヤ

円光大師行状繪詞廿九　檀那慈鎮和尚ふさぬ諷誦文云佛子上人存
日乃あひだまふし法文を談し常に唱導
をもちふ結縁乃たもひたのきらるゝ済度の
願ふかきかなしこゑまつりて今七七の忌
辰にあたりていさゝか三敬の諷誦を修す
法衣をぬぎて往生乃家にむかふる解脱乃

衣これなり法食とまうけて化城の門に
いたりて禅悦の食いまなり然則聖霊
八この平生の願ひにこたへてかならず上品の
蓮臺に生じ佛子八ちの真實の恩によりて
はやく家幼の引接をえ給〕此文ハ為鎮和尚ノ諷誦文ヂヤ

(え) 秋乃夜長物語 十七
からがいまえにこそよぶ川ぼまつなほつゞやく
のけだりをくゝし〔罪あるをとがやより
こやうにいまこえ給〕なきをバあくようぜんに
おもむこのしめ給ふ

(け) 萬葉 六 指進乃栗栖乃小野之芽花散落時爾之
行而手向六 ゆきてたむけ給〕

(け) 萬葉 十七長歌上略 布利佐氣見都々余呂豆餘能可多良比
具佐等伊末太見奴比等爾母都氣牟
ひともつげ給〕

(け) 夫木鈔 廿六 みくふさろみなうそむこのもてむきむあげ
給〕うきかたらきをきゝし井の水
此歌ハ萬葉巻九三栗乃中爾向有曝井之トアル哥ニ
ヨリテヨマレタルナルベシ三栗ヲみくるすトヨマレタハ讀ソコネ
ヂヤ なかの〕ハ武蔵ノ郡名ヂヤ

(せ) 萬葉 十八 敷多我美能夜麻爾許母礼流保等登
藝須伊麻母奈加奴香〔聞〕伎美爾伎可勢牟
きみきこせ給〕

(せ) 新古今 雜中 たく山乃をどろ乃したにもふみわけて道ある世ぞと人にしらせむ」

(せ) 十訓抄 十之十 醍醐乃桜會に童舞おもしろき年ありけり「深遠」といふ僧そのとき少将公『とてみめもきよげなりよく舞もかなでければ見物乃人をと宇治乃宗順あざりみて思あまりけるにや『あくる日少将公乃もとへいひやりける『昨日見しすがたの池に袖ぬれてしぼりかねぬと』いかでしらせむ」

(て) 萬葉 十八 枳棘原苅除曽氣倉將立くらたてむ」屎遠麻礼『櫛造刀自

(て) 大祓詞 許々太久乃罪出武 ここだくのつみいでむ」

(て) 円光大師行状絵図卅三 難者もし天台真言乃祖師によらば華厳をすなはち天台真言乃方便とするべし「いかが宗義をたてむ」

(て) 千載 恋一 あまりなるふかたのまるつり舟こぞでむ」人を見るめのしるしそとめてはびぬるで」

(て) 萬葉 十五 安伎左良婆和我布祢波弖牟 わがふねはてむ」和須礼我比與世伎弖於家礼 えてむ」桴里世麻之乎

(ね) 大和物語 世をそむくも昔乃ものにはいとくらべもとくへつべし わぶるとし「いざふたりねむ」

(ね) 古今 離別 君がゆくこしのしら山しらねども
まに〳〵あとはたづねむ

(ね) 新古今 恋五 今ぞしるおもひはちかき野中なる水の
ながれはゆきてしらねど

(ね) 拾遺愚草 上 空は雪庭をば月のひかりとていづくよ花
のありかしらねど

(ね) 新後撰 釈教 なほき衣のやみぢにまよふ身なりともね
がひきるをたのむ君をこそね

(へ) 古今 誹諧 なにはなるながらの橋もつくるなり今はわが身
をなにゝたとへむ

(へ) 玉葉 雑上 やゝふくるわが世ほどの面影と雲居
の月よはのかなしさ

(へ) 後撰 恋三 なき名ぞと人にはいひてありぬべしこゝろ
のとはゞいかゞこたへむ

(へ) 和泉式部続集 ありやともとはまほしくおもへども
うき世の中にあるもある身ぞ

(へ) 月清集 上 おもひでのねに庭のをぎはらしをれてや
なる霧をとふでまはなぞへ

日本紀 安康巻 於明麻弊島摩弊輸區塗餓詞耶杜
加礪詞區多智豫羅泥阿梅多知夜梅
雨たちやめむ

(め) 萬葉 十八 夜岐多知乎刀奈美能勢伎爾安須欲里

波毛利斯夜里蘇倍伎美乎等登米牟
きみをとゞめむ』

(め) 風雅 雜上 長き夜乃暮乃うちまて見るゆめを
いづちうつゝと『このかさくらむ』

(め) 源氏葵 雨となりしくるゝ空乃うき雲をいづれ
の『方とわきてなかめむ』

(匹) 萬葉十六 賀雨落歌一首 和我保里之安米波布里伎奴可久之安良婆許登安氣世受杼母登
思波佐可延牟 としはさかえむ』

(ま) 萬葉四 吾念如此而不有者玉二毛我眞毛妹之手
二所纏牟 いもかてにまかれむ』

聴聞中ヨリ一人問テイハク此哥ノ二ノ句ニ「あらずば」ト
云ヘル意ハ何ナル意ニテ侍ゾ答是ハ四段講釈ノ寸匹ニ
「いもざて」又「玉を匹ぐなくてならずて」ト説マシタト同格デこのくて
あらずば ト云フ義デム一ノ音ニテカヤウニ「ム」ヲハブキテイフ

ハ四段ト良行四段一格ノ詞ト云フ詞ニカギルテデム

（き）新後撰 恋二 こひしなぬこのこゝろを山乃つまできくも いつまで人

（き）はまか川てよつるはむ

（こ）玉葉 雑一 秋草乃枯葉がうへのきりぎりす いづれまで

あけて人をまたむ

（こ）空穂國譲下 かくるをさりこれを坊りまゐらせむ となむ

（こ）なもいな女ハ世りる紀ものすもあるぞ

内宮年中行事 六月十七日 謡歌 伊許保良禮倉波知須波和禮

宇恵牟 ききすをいまうるこむ

（こ）月詣第二 端書 ら こむてあつらをこえてはさまたるバこと

（こ）

加行変格

サテ是ラデ断止むノ徴ハヨロシカロウデゴザル コレヨクハ又加行佐行奈行等ノ三変格ノ一ノ音ナル こ せ な ヲ覚ルむノ断止徴且マタ俗意等ヲモ弁ジマシヤウガ先 こ むノ俗意 こ むト俗ニイフ人モアリ又 こ むトイフ人モアルバナヤサレド こ むトイフ方ガ俗ニ通ジヤスイニ依テ加行変格ノ一ノ音ヲ覚ルむハ ヤウ ト釈シマス故ドナタモ左様心得メサレイ

萬葉 四 板蓋之黒木乃屋根者山近之明日取而持将

參來 もちてまゐるこむ』

（こ）古今 離別 たちわかれいなばの山のみねにおふるまつ
『としきかばいまかへりこむ』

（こ）萬葉 十五 於保非奈波麻多母和礼許牟まそ吃わを
こむ』伊射遊賀武於伎都志保左為多
可久多知伎奴』

（こ）千載 秋上 あすもこむ』野ぢの玉川萩こえて
いろなる波に月やどりけり』

佐行変格断止むる徴

（せ）萬葉 十八 波里夫久路己礼波多婆利奴須理夫久路
伊麻波衣天之可於吉奈佐備勢牟

おきなさびせむ』

（せ）古事記 上 言誰來我國而忍忍如此言然欲爲力
競 ちからくらべせむ』

（せ）源氏橋姫 あじろのけはひちかくみゝかしかまし
き川のわたりにてしづかなるおもひもあ
まうなきぬことゝもあまたゞ『いかゞはせむ』

（せ）玉葉 雜四 あればさし『へど』『とても又いかゞはせむ』あめの
下よりほかのなければ

（せ）増鏡 一 海をや『いかに世継ハ隆信朝臣の後鳥羽院
の御くらゐの頃までをとゞめしるしてせむ』
後しせむ』その後のことはおぼつかなく

爰ノおもせむハ俗ニ御坐ラウトエフガ如シ御坐ラバサウトハ意異ナリ味ヒヌカシ

㊦せ ㊦な ㊦な ㊦な

なりまゐり『おぼゆほどつつむ所しまでものこさま』

こよひ『これもはなさせウむ』

空穂忠社 月まてこびこ君乃くあま八講し給ふ『その

うちまいてむものおもさせウむ』

奈行変格断止むノ徴

拾遺愚草 上 よしさらば今はしのぶがてこひしなウむ』おもふ

まおけし名まゝさそて』

新千載 恋二 淺乃世乃みかなしてきひしなウむ』

いまそまつゞき契なるぞば

落久保 四 北乃かたいのでこれしなウむ』まくみあしき

あのゝの給へバ罪もあらむ『その給ふり

扨爰ニ云ハネバナラヌヿガ㐧夫ハ何ヂヤト云フニ加行変格ノ㊁ウむ『ト觧シマシタハ東國ノ人ノ俗意ニ通ゼサセンガ爲ヂヤ京ヤ西國ノ人ノ俗意ニ通セサセントナラバ㊁ウむ『ト觧シテヨロシイ（御て来ラナドナヒマス）心得オクベキヿヂヤ

いなむ

いなむ

古今 雜下 わびぬれば身をうき草乃根をたえてさそふ

水あらば いな ウむ『とぞおもふ』

大鏡 七 道長 出傳 ましてものまねびたるこころなどいふならむ

『さらむところにひとりいなウむや』とおそせら

れける

サテコレ等デ三変格ノ一ノ音ナル㊁㊦せ㊦な ヲ受ルむ』ノ断止

徴ヲヨウ心得ラレタデアラウ又指辭ニ（サシコトバ） 軽 [こ][も][の][徒][が][何]

等カ上ニアリテ下ガむ』ハ結ニナルすハ其むハ軽むヂヤト云フ

ヲウルサイ程ヂヤガヨウ会得シメサレ是ガむ』ノ軽重ヲワケル

ニ眼ノツケ處デム

サテ是ヨリ良行四段ノ格又四段ノ五ノ音ヨリウツル格又

聴聞ノ中ヨリアル一人ガ問テ云ク此哥ノ『もだ』ト『もとる』ハヒトツ詞ニテ候カ答然リ『もだ』ト『もとる』モ黙止ノ義デヤ エ『もとる』ハ黙止ノ義デム猶コノ下ニモ此詞ノ意ヲヨクホシマ

(ら) (ら) (ら) (ら)

くしきちくしちきノ二ノ音ヨリウツル格等ノ三種ノ『む』ノ
徴且マタ俗意ヲモ弁ジマシヤウ

萬葉 四 吾欲『常云者将強哉』吾背『菅根之念乱
而戀管母将有 『こひつゝもあらむ』

萬葉 四 足引之山橘乃色丹出而語言継而相事毛
将有 『ことゝひつきてあふこともあらむ』

萬葉 十二 心乎之君爾奉『跡念有者縦比來者戀
乍将有 『こひつゝもあらむ』

萬葉 十七 佐家理『等母之良受之安良波婆母太毛
安良牟 『もだもあらむ』己能夜萬知
吉乎美勢追都母等奈 因云『もだ』ト云同モ 此モ同ジ同ジヤ

多ナドニテヨウ合点レメサレナホダらくニ
徴ヲ挙テ申シマシヤウ

(ら) (ら)

萬葉 七 石上振之早田乎雖不秀『縄谷延與守乍
将居 『もりつゝをらむ』

萬葉 十 事更爾衣者不摺『佳人部為咲野之芽
子爾丹穂日而将居 『にほひてをらむ』

聴聞ノ中ノ一人ガイハク『をらむ』ノ意ハ『をらむ』ト解ス
御説ニテ会得イタシマシタガ『にほひてをらむ』トイヘル
『にほひ』ノ意ハイカニ解シテヨロシイヤラム答『にほひ』ト
云ハ花テ艶ヲ申ス事ヂヤガコヽノ『にほひ』ハ心ノ艶デ情
ヲアラハス事デム サラバ此哥ヲ解シテキカセマシヤウ 殊更
ニ衣ハ萩ノ花デモテ摺マイゾ 咲野トニ云野ノ萩ヲ見テ

心情ヲ發シテ愛シテ居ラウトイフコヂヤ心情ヲ發スノ
ガ則チ「にほひ」ト云フコヂヤ全躰萩ノ花摺ナド云ハ萩ノ
ノ花ヲ愛翫ノアマリカラ起シコデム是モ心得テオカ
ネバナラヌヂヤ　サテハナシガチト横道ニナルガ序ヂヤカラ
申マシヤウ萬葉十六ニすみのえのきしぬのはりに
にほふれどにほはぬわれやにほひてをらむトアル
哥ヲ本居翁ノ説ニにほふれどハ「にほそまでて」を納め
こゝろくトイハレタヂヤ是ハゲニ左様ニテム扱ソコデ「にほふを」
トアルハカノ萩ヲ見テ心情ヲ發サムトオモヘド發ラヌ我
身ト云也左様ニ面白キ萩ヲ見テモ心情ノ發ラヌ我身
モ君ニハ「にほひてをらむ」ナリ見合セラルーガヨロシイデム

「にほひ」ト云詞ハ廣クツカフ詞ヂヤガ凡テツヤ(艶)ト心得テ
タガヘマセヌデム

⑤ 伊勢物語　君があたり見つゝををらむ生駒山雲な
かくしそ雨はふるとも

⑤ 水鏡　上　修行して所々をありけむものがたりの
めでたきも口よもすがら「にほひ」

⑤ 枕草帋　一　香嘆物　あなあし「さるものみな」「いみじきまでバ」
さり「ともつひにくるまもすぐるにほひ」さふ
ともちかくさせ給ひしも「にほふなり」

⑤ 濱松物語　后宮のあるは海母ののにまじめふやうにも
「にほひ」母よりも勝ふ人を目耳すがお

⑤

同

あすらむ』

ふるさとをみるあそびはとふかたづね

まことにてつるとてはりつつ返りはきいな

き事すれ『ども耳すづらふあならぬもてわろり

はらむ』

はらむへら

四段ノ五ノ音ヨリウツル格ノ断止むノ徴

サテコヽニチツト心得ネバナラヌコトガアルソレハ前条ノむ『ノ講釈デ

申タ通リ四段ノ五ノ音ノ⑪⑫⑬⑭⑮⑯ノ意ヲ心得

テオカネバナラヌデアル譬ヘバ餞（アテテ）ヲ押（オシテ）射（ウチテ）思（オモヒテ）住（スミテ）ヲ飲（ノミテ）ンナドヲカヤウニ心得オ

キテヨロシイデアル元テ四段ノ五ノ音ニハ俗意ガ三ツアル何

故三ツノ俗意ガアルトイフニ先㋙ノ結詞（ムスビコトバ）トナルナガ一ツ

〔重〕〔ヨ〕〔ト〕〔住〕 月

大鏡四　師輔公伝

げにつらふてもいとたびびとえるさせ給ぞ宣しうちよせてまさしぬあとま⑤はさやうみゆ御まりてもぞ気呼まおらせ給へ⑤む』

コノだにナシト云ヘノ所疑レヨク考フベシ
圏点ノ所ナレコレナキ方ヨロシカラント思フ

ノ結詞トナリテ希求（ゲグ）ノ意トナリテ断止（キルル）トキガ一ツ又一ツ

ハ此段ニウツルナデアル「知りけり」ニツヾクナモ則此段ニ

ウツルト同様ノ俗意デアル猶委レイコトハ五ノ音ノ講釈

ノナ申マシヤウコトノ俗意ハ⑤む（アラウ）ト解（ゲ）レテヨロシイ

⑤

源氏賢木　かくこもりみ給へ⑤む『ともおぼしもうけずて』

爰ノ給へらむハ普通ノ本ニハ給つらむト有レド是ハへトつトノ字躰

ガ似テ有ル故写レ誤リデアル

同

まして朝おほもねえまさせ給へ⑤む（ミテアラウ）『』ことおも

ひやるもたゞならぬぞ』

くしきくしきノ二ノ音ヨリ字ル格ノ断止むノ徴

八雲口傳　重句乃事詮なきのら也』かさね句さらくある

べのうそて』

千載　恋二　『いのぞありおもふ』とあくてつらから也』あさま

浅乃いろをみせたや』

円光大師行状
絵詞十八　志の事を持戒乃ものハすくなく破戒の

もの乃ハ甚多し『[illegible]除の諸行にまてる准して

志るずし其の諸行等をもて本願とせバ

往生をうるものハすくなく往生せざる

ものハおゝかるへき也』

くしき
くしきくしき一格

サテ是デ良行四段ノ三種ノ活用モ年ジツクレタヂヤ

是ヨリハ『くしき一格 くしきくしき一格』ノ二ノ音ナル(け)(け)ヲ

受ルむノ断止徴ヲ申且又俗意ヲモ申マシヤウ先俗意ハ

此段モオナジク(四)ト解シテヨロシイガ浅げ 深げ 恋しげ

悪しげナドノげしげヲ心得オカネバナリマセヌヂヤ全

躰コノ浅げむハ浅く解むト云フ程ノ詞ヂヤガサリトテ

其浅く有むト云詞ガツヾマリテ出来タ詞デハムヌ根元ヨリ

形状言ノ一ツデムサルヲ浅く有むノ約言ヂヤト説ク人モ

アルガソレハ至テ粗説デムサラバ[illegible]等ニツヾキテ

浅けなむ』又浅けむ』ナドモイハネバナラヌコヂヤガ左様

ニイフタコハ更ニゴザラヌ又約言トイフモ非論ヂヤ浅く有む

古今雑四
しらまぬ人の命で たし我乃山下あさをそ いづまもやけむ

（け）　（け）　（け）

ハ浅けむトハツヾマラヌヿヂヤサ是デ別ナルヿヲドナメ
モ合点レメサレイサテ俗意ハヤハリ浅ケラウけむ 意ケラウけむ
ト解シテヨロシイデム

くしきとくしとつき一格むノ断止徴

伊勢物語下 我せをバりふかきあきて「とまれ」うむの涙か
くもゐ「とびきま高けむ」
古今 恋四 あつきうひきまつづらすきつあり我
おもふ人にこその繁けむ」
続紀宣命 猶心争改天直久浄久在波天地毛憎多豚
「君毛捨不給天福毛争蒙身毛安家牟」
やすけむ」

万葉
今よりは城山乃道ハさびしけむ乃 こひかなむとおもひしものを

連体乃む

催馬楽 我家 わいへんハ とばりちやうもたれたるを
おほきみきませ「むこにせむ」みさかなに何よけむ「あはび
よけむ「あはびさだえかかせよけむ」
さたえうかせよけむ」
此哥ナル「何ノ結ノよけむ」ハヨクアラウト云ニテ軽ギヤ何ノ
結ノよけむハヨカラウデアラウトイフニテ重ギヤヨウ聞ケ
メサレ
サテ是デ十種ノ活用 四段 一段 中二段 下二段 加行変格 左行変格
奈行変格 良行四段一格 四段ノ五ノ音ヨリウツル格
くしきさき二ノ音ヨリウツル格
等ノ一ノ音ヲむト受テ断止徴且又形状言
ナル くしきとくしき一格 等ノ一ノ音ノけヲ受ルむモ十種ノ活用
ナル一階ノむト同意ナル「俗意モ押並テウト解スベキ

ヿ其中ニ詞ニヨッテハ[ヤウ]トヤ」ヲ添テ解(ゲ)シテノ[ウ]ト同意ナル
ヿ等ヲ会得シメサレタデアラウ是(コノ)む」ヲ名ヅケテ軽(カロイ)む」ト予
ガ申スノダヤ 其軽(カロイ)トイフ目的(メアテ)ハ指辞(サレコトバ)ノ[も]—[も]—[の]—[徒]—[於]
[何]等ヲ繋(ツナグ)む」ダヤニ依ヲダヤコレガ則軽(カロイ)目的(メアテ)デム

扨是迄ハ断止ノむ」又ノ名ハ軽ノむ」ノ講談ヲ長ノ〳〵ト致シマシタ
ガ是ヨリハ又連躰ノむ」又ノ名ハ重ノむ」ノ講談ヲ致シマシヤウデム先
ヅ此ノむ」トイフ辞(テニヲハ)ニ軽重ノ有ルコヲ先達モ知ラレザルニハ有ルマジケ
レドモ其軽重ノ有ルゾヨト云ハレタ先生ハ独モナイデム此様ニ申
セバ先達ヲ謗ニ似タレド変シテ左様ヂヤムラヌ我年来ノ苦学
ノ欝情ヲハラサンガ為且ハ道ニ耽ルノ餘リヂヤカラ荒言ハ耳ニト
メラレヌガヨロシイ但シ軽重ノ俗意ガアレクバ何レニモ改メテタマハレ其
儀ハ遠慮ムラヌヿヂヤ然シナガラむ」エ軽重ノ有ル論ハ動クマジキ
説ト存ゼラル丶デム然ルヲサズガノ本居翁デスラ紐鏡玉の緒
等ノ書ニ[そ][も][徒]ノ繋ノむ」モ[ぞ][め][や][何]ノ繋ノむ」モ一
ツ意ナリト思ハシレカラ二ツ圏(カコミ)ノウチニ入シラレテアルハ何ナルヿゾヤ

サラバ指辞ノ[も][も][徒]モ[ぞ][の][や][何]モ其結辞ノむハ
ヒトツ意ニナリ申サンカヒトツ意ニナリ申サバ三勸ノ大經ノ甲斐
ナキ事ニ成申ベシト存ゼラレマス此様ニ申スノハ尊霊ヘ對シテイ
トモ〳〵カレコレドモ翁ガ玉勝間(本居翁随筆)ニ云ハレタ御詞ニ我アヤ
マチヲ改ムルハ我学ヲ助ルナリト仰ラレタル御詞ニ依テ此様ニ申
スノデゴザル 義門法師ガ和語説畧図又友鏡其外諸大人ノ著ハサレタル図ニ[も][も][徒]ノむモ[ぞ][の][や][何]ノむモ一ツ圏ニ入レテレタハ皆本居翁ノ意ニナラハレタルナレバ更ニ論ズルモモタラヌ事故別段ニ申シマスマイ
扨又云ハネバナラヌ事ガゴザル重ノむハ何等ノ故デ重イト云フニ前
條ニモ少々申シオキタル通リ[ぞ]―[や]―[か]―[の](重)等ノ繋辞トナルむ
ヂヤ 本居翁ノ紐鏡詞の玉緒ナドニ[ぞ][の][や][何]ト一ツ連ニ挙ラレタルハ委シカラズ[何]ハ別ヂヤ然ル故ニ詞の栞ノ図ニモ別ニ离シテ出シテゴザ
ヤ又[か]ヲ入レラレザリシモ死念ノ事デゴザル猶委シイ事ハ先ヅむノ徴ヲ挙
草枕ノ講談ノ寸合点ノユクヤウニ申サウ

連躰ノむノ前云

俗意ヲアテヽ示シマシヤウ其俗意ハ[ウデアラウ]ト解シテヨロシイ
扨是ヨリハ躰言ヘツヾクむノ徴ヲアゲ俗意ヲモ弁ジマシヤウ是ヲ連躰ノむト云フ重ノむト同意 同語ヂヤ
先ヅ躰言ヘツヾクト云フハ ゆのむ人(佐言) あをむ日(佐言) 己むため(佐言)
こひもかも 此かむハ二様アリ指辞ノ[か]ニテ云ヒトヾメテ歎ノむヲ添ルガ一ツアリ又数ト同意ノかむガ共ニ躰言ヘツヾクト同格ヂヤ其外
指辞ノ[も][も][が][ぞ][や][こそ]等ヘツヾクノモ躰言ヘツヾクト同格ヂヤ又第四階ノ辞ヘツヾクノモ同格ヂヤ是ガ則チ連躰ノ格デゴザルカラヨク〳〵心得メサレ
此様ニツヾク事デゴザル躰言ヘツヾクノモ指辞(サレコソバ)ヘツヾクノモ第四階ノ辞(ナレバ)ヘツヾ
クモ同格デゴザルホドニ皆オシ込テ連躰ノむト申シマス全躰此ノむハ
重ノむヂヤホドニ俗意モ[ウデアラウ]ト解シテヨロシイ
改正本ニハぞや何ノ結びノむヲ躰言ヘツヾクむト分テアリ先ぞや何ノ
結ノむヲアゲ後ニコノ一条ヲ前ニオキテ躰言ヘツヾクむヲアゲタリ

四段活用斷續む之徵

日本紀 齊明 伊磨紀那屢、乎武例我禹杯爾、倶謨

娜尼母旨屢倶之多多婆。那爾柯那

皚柯武。なにかなけむ「うたなむ」

同紀 瀰儺度能、于之裒能倶娜利、于那倶娜

梨、于之廬母倶例尼、飫岐底舸庾舸

武。おきてかゆかむ「うたなむ」

萬葉 十三長哥麿 我念妹毛有跡謂者社國爾毛家爾毛由

可米。誰故可將行。こそゆかめ「うたなむ」

夫木鈔 廿六 九重乃浮ぐの菖蒲ねを深きなぐくや

ひとのうたむ 律乃みやつこ

同 五月やとまどふかゝるの我せざらばをこそおとそぞ「」

まこのうた 衛乃とねり

夫木鈔 廿 くはつせ山乃峰のへ乃桜花さくのむ春

達能 べハ君をおもはまし

此一首ノ哥デ縣ト縣ガ会得セラレマレヤウデム さうむ

ハ体云ヘヅキテ重デム おもはむハ囝ノ結トナリテ縣

むテム

太平記 十七 なかなかにつらくひとのむ くれなゐ 鐙を

達符 ぬきかけて腸捕 大わらんずまで

白木の弓乃 ど 六六

孫四郎ガ体 ヲイヘル所ダヤ

古今六帖 誹諧 五 いそぐ思の人 むよしるをかりとなり

連歌 ろくまあるもひぬこのま

新古今 春上 思ふ人 おもふ人 春霞立田乃山乃初

達貼 桜花

夫木 廿 雑二 身ハ 鹿 給康やる同

續千載 恋三 何 ね こぬ夜

の床よ

新葉 哀傷 うゑおかぶ昔の下まもみ

沈 花や

萬葉 十 相思 本名 菅根之長春日乎念晩

あひおもはぬ 春の根乃 ながき

春日を

聴聞申ス一人ガ聞ケテ リセ奇ノ結句かきし きもの」ト知ル語 意ヲ云ハイカナル故ニテ候ブ 答此歌ハ後撰集恋三ニ せうそこ ... 乃文を人にまつつかはしけるに ... 書ノ丹歌ヂヤ ... ガ よろしきもの」トイフ意ヂヤ ... セネバナラヌコトヂヤ

牧前条ニモ云々申 さ
ス通リ「… ノ」 …
ハ佐行四段活用テ其意 ハ「…」ト云フホド ノ意デ佐行変格ノ「…」 ナルコトヲドナタモ会得 セ〔…〕ノ 御坐アソバサウデアラウ」ノ意佐行変格ノ「…せむ」ハ「御坐ラウテアラウ」ト云フ意デム

⊗ 詞格對照 此ニハ用心ノアフタレ又ハ書ナルヲ 真ニ又々愚意ヲ加ヘタ答ヂヤ 二万葉集ニ 妹があたり つぎても見むに大和なる大島の嶺に家をらまし ... ナルヲ同格ヂヤホド見合セテルガヨシ 御ノ ... 四階ノ講尺ノ才申サウ

萬葉集中ニアル「もとな」ト云詞ハモダシ無ナリ、モダシ無
トイフ意ヂヤ、ナホリハレクハ「くしき」ノ活用ノ講釈ノ才申サウ

後撰 恋三 松山のまつらきなからも波こさむ」ことはさすが
そかるしきもぬを」

大嘗祭詞 天都御食乃長御食能遠御食「登皇御
孫命乃大嘗聞食牟 きこしめさむ」為故

祈

儀州子 三 七間四面ノ寝殿ノ南面ニ御簾ノ所々破中ニ
何宮ナド申テ御座サむ」ニ恭シテ中門廊
ヨリ入テ寝殿ノ階間ニ参テ啓言談事ハ
此哥也云々

さ た た た

濵松物語 一 「そのかみひとゝころをとゞめハよかりけるを」
みをつくしめて待まバいとのさしくちかけ
めさむ」人をばあはるゝしさへちすれつとおもえし
まづらめ」

萬葉 十三 久堅之王都乎置而草枕羈往君乎何時
時可将待 いつ」とかまたむ」

拾遺集外 上 くちなしにいそてねおもふ秋の物を
なへしよやいろをとあはくさむ」

萬葉 十五 多可思吉能多麻毛奈婢可之己藝而奈牟
君我美布禰乎伊都等可麻多牟
おみあきとつ川」とうきくさむ」 竹敷ハ地名ヂヤ

(た)

萬葉 十五 安知麻野尓屋杼礼流君我可反里許武等

伎能牟可倍尓伊都等可麻多武 いつ『ぞ』哉

まちむ『ウ』 アチマ野ハ地名ナリヤ

伊勢物語 今ぞしる『くるしきものと』ひとまたむさとを

ばかれずとふべかりけり

古事記 上 那迦士『登波』那波伊布『登母』夜麻登能比

登母登須須岐宇那加夫斯那賀那加

佐麻久『阿佐阿米能疑理迩多々牟

叙 あさあめのきりにたたむ『ぞ』和加久

佐能都麻能美許登

水鏡 中 此三川きみの王子をまれまちなすべかりて

(と)

連歌 住吉仲皇子のちかく[illegible]ひとをか[illegible]

風雅集 十五 立[illegible]まてまさるあし

古今 春上 年のうちに春はきにけりひととせをこぞとやいはむことしとやいはむ

續古今 [illegible] [illegible]や

新續古今 十四 [illegible]を後の世の[illegible]

○源氏大女

(も) うつゝに又やとふとも詣(ウデアラウ)

(も) 続後拾遺 夏 郭公おもの寐覚をとひおぼつかなし川のうらひ しねとゝの声乃を詣(ウデアラウ)

(も) 夫木 連歌 巻廿 萬代ハながむる山のながめへてつきおぼてまふむ

(も) 萬葉 連歌 十二 朝霞(アサガスミ)鬱(タダヨ)峠(タヲ)乎越(コエ)而(テ)去者(ユケバ)乱(ミダレ)波(ナミ)将(マサニ)戀(コヒ)奈(ナム)至(アフヒ)干 詣(ウデアラウ)みつぎこそ乃かゐ 指(ユビ)日(ニ) あを詣日までに(ウデアラウ) 此あそむ日まで(ヨヲ)あゆひ抄ニ 卜(ウラ)日(ヒ)まで(トミ)下(シタ)饌(ケ)カレタ(チヤ)以(モチ)得(エ)チガヒラム

(も) 方丈記 連歌 抑一期乃月影かくぶるまで餘算山乃端に ちかし 忽三途乃関にむかふ詣(ウデアラウ)时

(も) 蓮生陳状 連歌 ・霞乃衣ハ古今集より出くる物なれバ今もそう 用ひ川ま詣を注あるべきにはあらねど

後

(も) 増鏡 連歌 一 さらぬ今のたまも詣事をも又このきさきなりして その昔乃れもまげにもとしあづむ詣をらう(ウデアラウ)穴をおすゝめきこえて

(ら) 新拾遺 夏 世もしき詣入まし山の深くまばあけても この子道やたどる詣(ウデアラウ)

(ら) 萬葉 十三 世間(ヨノナカ)乎(ヲ)儚(ウシ)跡(ト)思(オモヒ)而(テ)家(イヘ)出(デ)為(セシ)吾哉(ワレヤ)難(ナニヽ)加(カ)還(カヘリ)而(テ)将成(ナラム) わまや何まふうつりてなら詣(ウデアラウ)

(ら) 後撰 秋下 ちりくもてまちひのぶてふ花るまバ千代乃秋 まぞ強ハちげら詣(ウデアラウ)

(ら) 古今 秋上 たなもくまかしつる糸乃打ちて年ちを なみく恋やこくら詣(ウデアラウ)

マヅくハ是ラデ軽(カロ)詣ハアサクオレ量(ガン)ナ重(オモ)詣ハ深(フカ)クオレ量(ガン)ナ

チオ序
いそまり遠る
ときまりかくも年ひ
さしくいまゆくさき
もちるろよとどま(ら)む
このみ集を名づけて
千載和哥集『と』いふ

(ら) (ら) (ら)

ヲヨウ合点レメサレ猶ツギリしも徴ヲアゲテ申サウ
続紀宣命 朕雖拙弱 親王始而王臣等乃相穴奈比奉利
相扶奉牟 あひうなひまつらむ『と』云事尓
依而 志 此之貝賜 授賜食國天下之政者
兼盛集 たうなくもけふハ山路ふくらけてこの都『こそ』かへらむ
ほどりし花やちる『こそ』て
拾遺 一 はちうりめでたき御才をもろもろ都ゝやしまろ
けぶりなりぞふ『こそ』おぼしこゝろまもるまゝに
ふくましきや『さ』るふハこころけぶりるゝくずまるみひ
さつくせるそまつりつる『を』もおよびなくいとのなきむ
たようまて『まで』あがしわづるふまりあらず

前

聴聞ノ中ヨリ一人ガ云ク
うまし『こそ』ト『む』ヲ受ルラ
詞の栞ノ図面ニハ受ノ處ニ
元キハ如何ニ答詞の栞ノ
図ニ元キハ此ヲ『こそ』『み』
ヲ肆言ニ云ヒ居タルガ
故ニ『こそ』ト受ルニシテ用言ヲ

(ま) (ま) (ま) (ま) (ま)

新葉集 巻三 つれなき命『こそ』人ハいとふ『こそ』もあふまでのこ『ば』
まことやきりしま『む』
新拾遺 春上 雲まもりそあもたてるよし野山いづのくさうふ春『こそ』たのま『む』
現存六帖 芦 沖つなるふかきこそ芦乃根を頼くるきたつ
えどろ世をや『を』いまし『む』
新撰六帖 魚 ろきくぐるたのきすきあ乃水るあまりありきり
ましき世をやたのま『む』
拾遺風草 中 いはてこし春ハ冬野ゆこそるまでもとのちぎ
つまをとなるやたのま『む』
萬葉 十 不念丹到者妹之歡三跡咲牟ろれしみ『こそ』

リ受ル例ナケレバ挙ゲザルノデム其例ハ春の霞『』ト又タ『』匠ぬるげき『』ナドト同例デム『星ノ』ハ何モ四段ノ『』ゲヤホドニ在ル心得テ居ラレ猶委シイコトハ『』活用ニテ［illegible］用ノ処デ申サウ

先ヅ是等ニテ軽ノむト浅ク推量ト重ノむハ深ク推量トヲヨク合点シテシ又軽ノむノ俗意ヲ重ナむニテハ其歌ヤ文ノ意ハウツリ解シ得ラレマセヌゲヤ又重ノむノ俗意ヲ軽ノむニテハ其歌ヤ文ノ意ハウツリ解シ得ラレマセヌデムヨク味ヒメサレ猶ツギツギモ徴ヲアゲテホシマシヤウ此様ナ訳ガ有ル故ニあゆひ鈔ノ説ハヤクニ立ヌト申スノデゴザル

連体 ［illegible］所思鴨』

六百番歌合 戀 君乃面影常乃習ひハ［illegible］棒

連体 ［illegible］あの『むすびて』［illegible］

くもりなき世『』などぞ詠まるひゞる』

隆祐集

連体 そあまはるあけ乃こゝろも乃色 ［illegible］『月』あぐま

むかし春乃やよひす戀

和歌庭訓 此むひハゆゝしき大事までも『稽古』よく許

連体 歌あるべきところ『道』をもしなきむ人

いかにぞめるも執せる心あくて等閑ニよみ

捨るゝなるべからず』

一段活用断続むノ徴

萬葉 七 「［illegible］澤邊之真葛原何時鴨絹而我衣に将服」いつのもくるまでわがきぬまきむ』

此歌ノむナドニテモ重ノむノ意ヲヨクワキマヘラレヨ。ダガヨイ真葛原ヲ我衣ニ絡テ着むトスルハ歌ノ表デ実ハ我思フ女ヲ得ムト思フナレバいつのもくりてきぬまきむトイヘル歌ノ意ハいつのくりてきぬまき着むト軽ノむノ俗意ニ解シテハ歌ノ真意ハ解シ得ラレヌデムゾ夫ヲいつ時［illegible］ホドニヨクヨク味ヒ見ベキナデム

雅亮装束鈔 下 六位乃志ん『などハいうかなるまをきるまさしぬき』

なども着む 生らう 院乃ひくち人 非蔵人 などまなる』

てきるなり

新撰六帖 五 きむ人乃かのかうふきまのひとくろまなるぞやつ

ひきつゝみずさむ』

今昔物語 十五第五 其乃殿を菓子院乃うちのくり ［illegible］

ナシ
もとおもふ人ありてその弥をとはむ」が為り

(ひ)
古今 物名 なにの名いづるかくゞる見え咲ぬ濃さも咲きひむ」
連歌 咲や咲そらそしら里む」

(み)
濱松物語一 かくやうくさむのきさき今ひとつびそそてすみらむ』でおんじあふ寛すきるの傍』でおぼゆるをいみじうけうくふとげまさをぞきて』ひとめくらやふく花』世まふさ子おる程きやの思ひ」

(み)
後拾遺 羈旅 旅のそらおそのけぶり』でおぼりなぞはあ士おもしかなくく』とやみ花』

(み)
拾遺 賀 うごきなきいそかのはても君なてみ花』をとあ我袖のなでつくさるで』

（み）

玉葉　春下　霞『たなひく雲』ふりしく山ざくらいつまでと花

（み）

拾遺　賀　色かへぬ松『竹』のすゑの世をいつまでと

『ろいろ』何も見えむ『君のみ見』

（み）

更科日記　くいられまる人をよせめけりきのとや

（み）

萬葉　五

見『ゆる』秋の月

由許能伊呂遊有波比豆佐家流有米能波奈伊麻左加利奈利『彌年乃登母我聞』

（み）

見『ゆる』人も『』

連歌

近来風躰抄　新古今ておもしろき集をなし初心の人はわろし『心得らむ人は此集を』

連歌

輕のみの十五首よみの所に入へし

（み）

見『ゆ』てしいまであしらふべき』

連歌

空穂俊蔭　あしたまちて夕おそなるほどにまへ紅の滝をおとすにたえされるとどまら道へ

見『ゆ』をなかくき道に出けり』

（み）

十訓抄　七段　可然人お習『して心をとりつ見』ゆるめて

連歌

何事をもあつかふせざらせおきて』

（ゐ）

景行紀　日本武尊曰『吾得善射者欲與行』とゆみ（ゐ）むひ

連歌

ととえくはのうむ『とおもふ』

（ゐ）

月詣　三　連歌

うそつ（ゐ）むわやのちりこそ山ざくら花ちらぬまのあたならめ』

萬葉　七

山際爾渡秋沙乃往將居あきさのゆきて（ゐ）む』

其河瀬爾浪立勿湯目　此哥ノ句ハ重ノ句デム又秋沙ハ鳥ノ名デム

(ゐ) ゐ ゐ

このよりゐ『む』なやらちりこそ山さくら花

ちらぬまであはれなりけらし

大鏡 八 時平おとゞをバうらみきこえたまひし日

連歌 なかりきめ『ともちゐむにあまらせたまへり『と申』

雅亮装束抄上 いまやらむ人にかくせゐ』ちらひとつのむくらむ人もつくろひ

連歌 しておくべし』すふハすうハ往来言ナヤ

中二段断続む之徴

元真集 いひ明ゐはわき浅乃つき『む』ゐるこころもまのゐ心

のつきおぎつきし

宇津保 國譲下 うして大宮もおとゞへ渡りまして翁のおてぶして

またまふ『大将いみドうまづらひぬへきバゆぐし

(き) (き)

やちちむ『そちもふこそゆかしかれ』

萬葉 四 相見者須臾戀者奈木六とひハなぎむ『登』

連歌 戀念弥益来』

空穂俊蔭 其ゆゑハ父母仏まうり給ひし白天稚子く

連歌 どうまして三年なれる谷に天女下りおんしやう

がくをして極しまゐり『まして すれハち天女の

さまらく『さ末阿修羅乃一万劫のつみなこのハ

つきむ世の山より西よりくる枝られむ
もろぶ」

円光大師行状絵図廿三　善導和尚ハ極楽へまいらむ『を心ざして

連歌

多くもすくも念仏申さむ人の命つきむ時
ハ阿弥陀仏聖衆『と共に来りて迎へぬふ
べし』と侍へバ

散木集七　いそくる滝のしらいとハみだる『ともそゞろきおちむほど

連歌　ハた逗せど」

聴聞ノ中ヨリアル一人ガイハク萬葉集十巻ニ九月白露路負而足日木乃
山辺将黄葉見幕下吉トアルもみぢむモ爰ノ活用ナルニヤ又もみぢむ
もみぢしもよしトツヾケルモ如何ナル故ニテ候ゾ荅もみぢハ古ハ多ク四
段ノ活用ヂヤ中昔已後ハ中二段ノ活用ヂヤ愚父ノ云ハレタルニもみぢハ
萬葉集ヲツラヽヽ考フルニもみづもみぢハ皆四段ノ活用ニテ中二段ナルハ
ヲサヽヽアラズタヾ一ツヘ假字ニハもみづるモ見エレドツハ後ノサカシラニテ実
ハ猶四段ニヨムベキナリ扨古今集ヨリコナタハ又中二段ノミニテ四段アルコナ
シ已上ト云ハレマシタ然ル訳ヂヤニ依テ右ノ将黄葉もみぢむトヨマネバナラ
ヌコヂヤ又萬葉集巻八ニ吾屋戸爾黄変蝦手ト訓ムベキヲもみづるかへで

トヨンダハヨロシクナイデム此様ナル訳ヂヤニ依テ徴ニ挙マセヌノヂヤ心得メ
サレ中昔已後ハ「もミぢ」モ中ニ段ヂヤホドニ是モ心得オキメサレ又山之将
黄葉見幕下吉トツヾケルハ「やまのもミぢむ〔ハ〕みまくしもよし」ト云
ヘルニテノ実ハ〔モ〕文字ニツヾキテ夫ヨリ「みまくしもよし」ト云ヘルノヂヤ
「む」トニフ辞ハ軽重共ニ用言ヘツヾク事ハ決テナイ事ナルヲ此様ニツヾキテア
ルハ中間ノ〔ハ〕ヲ省キテ在ガ如クニ聞クスルガ定例デム連躰言ナレバ躰言
ヘツヾクガ定例ナルヲ左ハ死クシテ用言ヘツヾケリト見ユル中間ニハ〔ハ〕〔モ〕〔ヨ〕
ノ三辞ガ何カナクテハアラヌ事ヂヤ此様ニ云ハ係リコマヤカニ過タリト云フ人モ
有リマシヤウガ委細ニ云ハネバナラヌ事ヂヤ「月見るらむ〔モ〕見ゆ」「浪乃よる〔モ〕見
ゆ」「梅乃花のちる〔ヨ〕みえバ」「梢乃つのちるらむ〔ヨ〕みれど」ナドノ類ヂヤ
ホドニヨク合点シメサレ猶又四ノ音ノ講釈ノ寸申サウ

(ち)

萬葉十　霍公鳥来居裳鳴香「吾屋前乃花橘乃地二落六見
牟」つちにおちむ〔ヨ〕みむ　此歌モ前条ニ申シタ通リノ
格ヂヤ又つちにおちむノむトみむノむト其軽重ヲ味
ヒメサレ此ヤウニ一首ノウチニむガニツアリテ殊ニ軽重ガ判ワ
ケテ有ル故ニ味ヒヤスクム
扨咄ハ少々横道ヂヤガツイデヂヤニ依テ申シマシヤウ義門師ガ山口栞中
巻〔六一〕は文字して受るまをて詞をていふとつゞくまてと又はかく
ならでも此別あるさゞトニヘル条ニ古今ヨ「古へよありきならず」ば
志らねども」又「とめんとめども」ば」これらハ截るて詞乃くゝとなるを
又同集「志るしらぬ何かあやなく」又「まけるさろざる花乃見ゆ
らむ」これらハつゞく詞をはなれてけりはなれく詞を躰言をとれる

とうろそめし似るめるつゝむざかせるものなりいつもも用語国より
るゞら躰言乃ともすなゑてのゑそといふべきすやてる月乃流るゝ
るまバ天川（土佐日記）なども然りしこそ上記ト云ハレタハカク許（ばかり）リノ学者ニ
シテカク許（ばかり）ノ説モ不審ヂヤ何（なにゆゑ）ト云フニ土佐日記ナルてる月乃流るゝそれ
むトアルハてる月乃流るゝ㋾それだト云ヘルニテ実ハ㋾文字ニツヾケ
ルヿ前条ニ云ヘルガ如クヂヤ又古今集ナルいすしへよありきあらず
ハあらねどもハあるき（体言 詞一 辞）あらず（体言 詞一 辞）ハニテ辞（ジ）トモニ躰言ニ居（すゑ）タルモノヂヤ又同
集ノとめむとめどもハモとめむとめ（体言）ハニテ是モ辞（ジ）トモニ居（すゑ）テ躰言ト
シタルモノデム又同集ナルあるしらぬ何のあやるゝわきていふむト云ヘル
ハある㋲あらぬ㋲なやるゝ何のわきていふむト云ヘルナレバ前条ニ申シ
タ萬葉十ノ二首ノ歌ノ格ト同格デ㋩㋲㋾ノ意ヲ含メテ詞ハ省リ格

デム　あやなく何のわきていふむト云フ意ナルヲ　何のあやるゝわきていふむ　又同集
ト云ヘルハ詞ノアヤニ云ハンガタメデム
ニさけるさかざる花乃そはちむトアルハさける花さかざる花乃そはちむ
ト云フベキヲ花ノ字ヲ省キテ下ノ花ヘ云ヒツヾケタルモノナレバ是ハ論モ无キ
詞ヅカヒナルヲヤ　是ハ常ノ連躰言ナリ　然レバ前ニ申シタ二首ハ用言ヲ躰言ニ居（すゑ）タル
ノヂヤ中ニ申シタ一首ハ㋩㋲㋾ヲ省リ格ヂヤ後デ申シタ一首ハ常ノ
連躰言デヤ此様ニ詞ノ理（ことわり）ガ明白ニワカリテアルモノヲ義門師ガこれら
ハつゞく詞をそへてみゆるいつゞく詞を躰言を招けるところ
まるのしく似るあるつゝひざるせるものなトイトモしくアヤレヂニ云ハ
レタルハ何タル心惑ヂヤ　旧本日クタク㋩㋲㋾ヲ含ムルヲ今含格ト云ヒ助辞ニテハ四バンメノ辞ニ限リ詞ニテモ四バンメノ連躰言ニ限ル云々
新古今　雑下　このことし我るでらの苔の玉るとりいつすりる⑤
むな名つるそをしれ

爰ニドナタモヨク心得オカネバナラヌイガ厶咄ハ横道ヂヤガいつーくト
云フ措辞ノ可文字もいつーくト連続スレバ軽クナリコスヂヤ夫故ニ
いつーくもちむ名こそをしんモトツヾキテ厶ヂヤ山家集ニ春こいと
思ひもあへぬ朝戸出よいつーくすむる羽山哉トアルト同意ヂヤ
然レバいつーくハ軽ノ何ヂヤホドニヨク心得メサレ草枕ノ講釈ノ寸證ヲ
挙テ猶ヨク示シマシヤウ

一万十五
伊都迩可母見牟（い）
等於毛比師安波之
麻乎與曽奈世故（い）
非無由久與思乎（い）
紀美
万十五廿九
いつ…（い）
しあてあるをよろし
やらひ…
とある

（い）

軽何ヂヤ故よく心得メサレ 左ニ引クハ草釈ノ講釈ノ寸 其證ヲ挙テ申サウ

萬葉 十七 夜良等理飯安伎太知伊奈婆於久礼多流
礼也可奈之伎多妣爾由久伎美可母孤悲無
たびよけく君のこひむ
古今 恋五 我のみやよをうぐひすとなきこらびむいつーくちらちる
乃ちなきてちりるらば
六代勝事記 連歌 汝をころすずや男ハ二つのしたのら殺し女をば
やつきそし神社仏寺ちりもいつーくちるり名将乃
みしとさろ畠のきとのまま東南乃仏法なをのばすして
ほろび…
萬葉 十一 今谷毛月莫令遠不相見而将恋 あひみまで

(ひ) (ひ) (み) (み) (み) (み)

連辭

萬葉 七 こひ〻年月〻家〻寡〻郷〻輪〻登〻止輕引龍田山船出將爲日者吾戀わ

連辭 まこひ〻香毛〻

曽丹集 かくこひ〻もなをしらせば 連辭

山家集 上 いらくともあらばいはゞ何のなつひまにの身ならで

しらでくさとうらみ〻

新千載 神祇 こまはかるふくびてきて月日をもおもひ

さらぬをと神やうらみ〻

大和物語 あさかはの池の水くまぬをもなを何うら

み〻さかのつきさ

新 六四 なをぞあふあるゝを見きてうは類や

(り) (み) (み)

十二 みぞとも何うらみ〻

大和物語 これをゝぬをともおもひしこふまばうらみ〻

連辭 ことなきわびしき〻

小町集 みるめあふうらみ〻や〻海士とりて浮びて

連辭 まくま〻くこうとのまも

円光大師行状 巻十六

連斯

うろ修行者をよびよせてこのよしをかたら
前兆をとく坐起あり人を方〱にはりうち流さるの八
して喧嘩せられ高野中をたづねさせらるゝ有
つゐにゆきがたをしらざりけり

連斯

催馬楽 飲酒 左加介乎太宇戸天太戸恵宇天太布止己利牟
多ぶとこてこ乱曽宇万宇天久鼻与呂保比曽末
宇天久留

△己下改正左ノ如シ
則チ轉言ヂヤ其轉言ノ思ふてヲ思ひて■トイフハ往来言ヂヤ左様ニ心得メサレ(波行三ノ音ト和行三ノ音トノ往来デ)

聴聞ノ中ヨリ一人ガ曰ク此耳ノ太戸恵宇天トイヘル詞ツヾキ如何ニ聞エ侯ハモレ解耳ニテ侯カ 答イナ、レカニハアラズサレドコ、ニ心得ベキコガゴ■ 縮ふハ波行四段ノ活用ニテノゴザレバ思ひて■トイフベキヲ思ふて■トこハ△同ツヾキガ無理ヂヤ夫故ニ思ふてヲ思ひてトス轉言デハイフノヂヤ思ひてイヘバ詞ツヾキガ自ナダラカニ聞ユルヂヤ文章詞ノ思ひ思ふヲ思ひ思ふトイフモ此格デ心得メサレ

下二段活用断續むノ徴

續紀宣命 朕又念前聖武天皇乃皇太子定賜比天日嗣高御座乃坐尓昇賜物乎伊何爾可恐久
私ハ父母兄弟尓及事得牟 いのちのかしこく

わくしおちもちろがふすおよぶこそえ訛

萬葉 十五 於毛波受母麻許等安里衣牟 海をあり

連聲 え訛也 左奴流欲能伊米爾毛伊母我美

延射良奈久爾 此ノ也ハ歎ハ指辞ノ切ダヤホドモ体言ヘツゞクト同格ナル

和哥爲萬葉集序 連聲

聊八箇条をもて粗第乃要を舉む 一には

和哥縁起 二には種々名体 三には避病次第 四には

詠作旨趣 五には撰抄時代 六には名誉歌仙 七

には通用名言 八には難歌会釈なり 是は和哥色

葉制作乃手本なり 是をまなびをさむるなむ心

詞をえ訛着乳

淨土和讃 佛慧功德をほめしめて十方乃有縁にきかし

連聲 め訛 信心すでにえ訛ひとはつねに佛恩報ず

べし

住吉物語 連聲

そのゝち女御前せうしやうどのにまゐりてやえ訛

るにはあまたゞく待候へどいまぞ一段御文を給り

て

壬生二品集 さびしさをまた延ぬ柴屋の夕けぶりなくらん

あさ乃玉やをけ訛

定家卿和歌式 あだし世くぐりし人のこゝろたとへてみれば

連聲 おほよそことばもいやしくなりゆくいやも

ちかき世の人は口におもひえてろ風情を三十一字

まゝに思ひつけ訛てをまもらして

今昔物語 蟹満寺ノ縁下 その後蛇の苦をまぬかれ多くの蟹の
連騈 罪報を助け給けり（タマヘリケラク）が為に其地を掘りて其蛇の屍
骸を埋みて其上に寺を立て

空穂俊蔭 今もまさに人の身をうけ給（タマヘラク）をこのよにて
連騈 深山に入りて仏菩薩を頼み懈怠邪
見の輩に忍辱の心を起（お）こさしむる処

四光大師行状 絵詞十九 佛の御のりあひがたく蓮のうてなこの世の
連騈 いぶせきもあるけども に過去の因縁をもかへり
おもひみ未来の化導をもたすけ給（タマヘラク）事こそ
返しも

新後撰 雑上 苗代の春のなど囲りせく水のみちあるかに

萬葉十一 ますらをやまのせ給（タマヘラク）
人毛無古郷爾有人乎愍久也君之恋爾令死
めぐしや君がこひに志なせ給（タマヘラク）
聴聞ノ中ヨリ一人ガトヒケラク人モ無トイフヨリ古トツヾキテハ同
ノ意味イカヾニヤ侍ラム答 なきハ連騈言テムユヱニ郷ヘツヾ
キテ人モ無郷ト見テヨロシイデ心なくトイヘバ連用言ヂヤ
ホドニ志づ心なく花のちるらむト云モ志づ心なくちる
らむト用言カラ用言ヘツヾク定リヂヤ合点シメサレ

今物語 其夜をなりてこの女さいろちおでうちしめりて
うしろむきてねたりけるを男いとゞ恨て
けふはいつまでかなくもことにまうさせ給（ウテラク）

（せ）　（せ）　（て）

洞風抄　同「白拂」ハ何乃用までトやらむ「山居」小庵をつくる

連歌　人座居をさせむ たちよりても同じ「座居」とハ何

やらむ「居」もいへる庵をまづなづけて木も竹もなき

廣き野まで露をところせきまでしらむ時白拂まで

顔をなづまハむ川うしがる時やらしさぶしといふ

せばあがる

濱松物語一　その世の人いろいろのまぎらはしなどやせまりけむ

連歌　ともかくもさるべの給ふせむまさる「中納言」

ところきびしく中納言とみきてのうちりしめしいる

いのちをまうさむともなぶ

新古今　恋一　なまえ人いのちなる逢ふまでのくちもせて「」あふこと

（て）　（て）

なみたり身をつくして

聴聞ノ中ヨリ一人ガイハク難波人トハ我身ヲ難波人ニ比

シタルニヤ答左ニ非ズ何ニデモナイ身卑下シタ詞デム　ト云フヿヲ難波ノ

なにニカケテ摂政殿ノオヨミアソバレタノヂヤ　レカルヲ美濃

の家裏ニ難波人のくちもつるといふ詞いろすぞやトアル

ハキコエヌ辞ヂム

新拾遺　春四　つねまでいろせよのくちもせて「」山さへ

水乃あさきちぎりハ

萬葉　十一　若草乃新手枕乎巻始而夜哉将間　在常

一　へだて「」二八十一不在國

此文モ[ハ][モ][ヨ]ヲ首ケル格ゾヤ前（て）（て）条ヲ見合セテル、ガヨロシイ

（て）

詞瑟徴講義巻二

下二段活用断続むノ徴

萬葉　六　山岐之葉尓不知世経月乃将出　いさよふ月

連歌　乃いで[テ]「常我待君之夜者更降寛」

源氏橋姫　こころをうつハもちなすくまのほりふかうつ

なき池すもきみぬべきをいとうくおそれき

連歌　くさをつえきて[テ]うしろめぐきだうらまなん

延ひくみちまうちともうつぬ

大祓詞　安國止平氣久所知食武國中尓成出武天之

連歌　益人等我　くさなるこなりそむあめろまて

(ね)(ね)(ね)(ね)

くらげ 邇杷家 雑雑罪事波天津罪止

畔放

萬葉 十三 衣手丹山下吹而寒夜乎君不来者獨鴨

寢 ひとりのもねむ

萬葉 一 見吉野乃山下風之寒久爾為當也今夜毛我獨宿牟 もろやこよひもわがひとり

ねむ 申サウ　ねむトヽ云フ辞ノテハ第三階第四階ノ講ノすくハレノ

源氏夕顔 君もうちとけてねなくあめてまひのくまなくいつこをとちり このわきもたづねむ

源氏常夏 なでしこのとこなつかしきいろをえてもとの垣ねをひとやたづねむ

(ね)

扨爰ニ云ハネバナラヌコトガ〻前条〈此ノ助言ヘツヾクむノ講義ノハジメニ申シタか もノ系述ニ申ク通リか もトかもト二ツ〻一ツハ回ノ指辞デ指ツメテ語勢ノ切レタル処へ歎息ノもヲ添ヘタルモノチヤ又一ツハ哉ト後ニハ云フ辞ヲ吉クハかもト云ヘルノヂヤ爰ノかもハ哉ト同意ノかもデハ〻ニテスたらちねのそくそとこあまてまをともきも旅ののりぬかやさくねむかむト解セネバナラヌ又アヂカヲアヂヤ是ヲやさくねむこもト解（ね）

(ね)

新撰六帖 薄 ふゆかれのをばなふきこすかぜもやまがちる 庭のつゆのもねむ

萬葉 廿 多良知祢乃波波乎和加例弖麻許等和例 多非乃加里保爾夜須美加奈牟加母 やさく ねむかも

連歌

長明無名鈔上 いまはいのぎりなくなかしきこころとるこゝのちふわりなくなきうらぬよしをよみ八合ふえて花を恋しみ宗祇をわすれて紅葉をとく川 ねむごろくそのよめにんぶれしを

連歌

法然上人傳 土 忽ちに五趣乃古今をまなまむ ふうくよもつきを

レテハ大キナ心得チガヒニナルホドニヨクヨク会得シメサレ

（ね）

（へ）

（へ）

爰ノ方丈記ノ文中ニ「こそ」ト云ヒテめるト有ルハ実ハ田舎をこそたのめるト有ルベキヲたのめるト云ヘルハるヲるニスベラカレテるノ辞ヘツヾケタルモノナリ此ノスベラカス格ノコトハ草枕ノ講尺ノ寸善レシ申マシヤウ（へ）

（へ）

連歌

諸行をこのねがひや「コソ」

旧本今昔物語 浜笠置寺条 連歌

後の世をこそ頼むれ注しるべき房の居給へ

了蘭笠を脱て置て返りぬ

拾遺集 春

千とせまでこそ限る松けふよりは君にひかれ

てよろづ代やへむ「コソ」

新拾遺 賀

かげ清き池のかゞみにてる月のくもらぬ

なく万代やへむ「コソ」

方丈記

京のならひなにわざにつけてもみなもとは田舎

をこそたのめるに絶てのぼるものなければさ

のみやはみさをもつくりあへむ「コソ」

草根集 一

たむけして行ゆ旅のを見つ垣の外しく月や

聴聞ノ中ヨリ一人ガ問テ云ハク謡徳ト先生ノ訓レタルヲ思ヘバ謡ト訓ヨリハテ云フ其文字ハ助辞ナルニヤ答然リ爰ハ謡ゾかれ心ト詞ヲ前後ニツカヘルモノナリ夕暮ヲたそかれ時ト云フモ実ハ謡徳時ナレド此詞ハ中昔已後出来タル詞デ詞ノ清濁モ転倒シテアレド夫ハ中昔ノ人ノ云ヒ出シタ詞デヤホドニヤハリたそかれ時ト云フガヨロシイデ（へ）たそかれ時ト云フハ徳ハ謡ゾト見ワケガタキ時ト云フ事デ又問レカラ

拾遺愚草 中

三代まつのへむ「コソ」

大内山の松のちとせは人のまゝに

君ぞうかべむ「コソ」

万葉 十

謡徳登問者将答 ときはこそへむ「コソ」

無君之使乎還鶴鴨 之使乎

連歌

水鏡 中

みかどききつけしておほせらるゝやうはさる人

をもちてぞぬるましるをへむ「コソ」をかいつへよりつる

連歌

とるをなせども

十訓抄 八 三段

高陽院の姫君鳥羽院の御むすめ美

福門院の御腹也此宮の御とりがにくく甚御光

をとがみ給ふ事も（を）なくつくりさせ給ひける「コソ」

バ誰トイフハ誰トノミ云ヒテモヨロシキニヤ合多論アリ古事記赤猪子ガ歌ニ美母呂尓都久夜多麻加岐都岐阿麻斯多尓加母余良牟加微能美夜比登此歌ノ多尓加母余良牟ハたれによらむト同義ヲ記トイヒ誰ヲ誰トスル同義デ會得シメサし

（め）（め）

宮のうちの花をたとへ『むすぼ』なのりその山かざし

此夜の千集なりけるよ

新葉集 恋五 さらでもはくよそにならでやいひそめ『むす』ありし

『もと』だよわすれてなが

風雅集 雑下 『あらそ』たる夕の雲りまじらなみあはれ

『こそ』うハわきてなほ『め』

新拾遺 恋一 うき中ハちぎりし人の夕ぐれ我もあはれ

『そこ』やハとうめ『むす』

六代勝事記 當時弓馬の藝譲りして累代勲功の跡たえな

『むかし』若佛神のたすけにあるまじくバいのでも山

徒ら川まちふをとまづめ『むす』

（め）（め）（め）（め）

寂然法師集 あかぬめ『こそ』やどにそふかりのよびもなき山の

とふきてけいもやとがめ『むす』

源氏橋姫 おぼしそてはいもとげまかりしうさつ路のまでも

連跡 えゆつも人もなくてのふしとどめ『むす』といみじく

おぼしわびて年月もふきバおのつから

およげまかりあふ

長秋詠藻 うらなきなきて山いろりおまき川『めぐさめ『むす』

連跡 こ代ハ神のまもく

濱松物語 一 女ハこのよふまいら『このみせん』とたのもしわびて

連跡 五年がほどつくしにまかりしてなをとどめ『むす』

をこなしくおぼえけまバ家みのつまうとまお

（匠）　（匠）　（匠）　（匠）

わくろるうを申し

萬葉 十三 玉鉾之劔巻寝志妹乎月毛不経置而八将越 つき

もへ越ておきてやこ匠 山岫

新葉 叢 ゑのみけるすめぐみの色もそひてみ法の花

いにしへさる匠

増鏡 一 ふる書などおきおきてる物のかへそへるにを

そのかりあへるゆへその「」といつをさげをる

くちちにゑみそいふでかきこ匠

同 おのふたとぞもまへならへ路ふまもなる

てそゝのなるこゝろやこ匠 まけてこゝみふる

まさすがくまくちのおよまで

聴聞ノ中ヨリ一人ガ
云ハク世ナラヌトモトモト云
ヘルト世ナラヌトモトモト云ヘ
ルトモトモハ別ナルニヤ
答別ナリ ナラヌトモ（匠）
ハ断止ヲ受テ連続ノ
トモナレバ第三階ノトモニシ
テ別ニ子細モ无イガ ナラヌ
トモトモト云ヘル方ハ子細ガ△
其子細ハ全躰 ナラヌト
云フ詞ハ躰言ヘモ用言
ヘモ指辞ヘモツヅク
（サリナガラ語意ハ用言ヘノ三通ニ分タ定例）（匠）
世ナラヌ トモトモ 世ナラヌ
用言 ある トモトモ ノ義ヂヤ 訓
ノアルト云フ詞ヲ中ヘ含メテ云フ意也 サレバ
第四階ノトモテ△（循奇シ）
くしき活用云フでもを遍
ノ譏尺ノ寸甲サウ（匠）

新続古今 賀 蔭高きこのきの松のみ匠をけり 一 千代まも

連躰 こ匠 きみがり末

定家卿和哥式 今の世まのうとをなりぶるとものがくかく世

連躰 なくてもきのふを匠りを匠るいできるる歌ハ

一句もその人のよみうつしを匠事をうる

ちぞてま海ほしおもゐのへ侍るなり

源氏處女 いのまう人で以前なのう心味を あきなく物し路ける

連躰 をしらでまさうくなみゆしまでみひけるこれ

ころてまうつてきのれのまそ「てほめのこぞもちを

まいなみ路りしきこ匠うくなし

萬葉 四 愛常吾念情速河之雖塞々友猶哉将崩

（匠）

九

（生）（生）（生）（生）（生）

崩 なるやくりまと』

續後拾遺 雑中 名にし河のなる瀬まのあしまわけて才ろられ

木乃くらまつるまと』

新勅撰 恋三 みよし野乃ちくまの花をすうすぐれてぬれ

うしやおもむしぐれ』

萬葉 十九 伊波世野爾秋芽子之努藝馬並始鷹獵

太爾不為哉將別 せでやわかれむ』

續後撰 雑上 長月乃なごつまよむ『てひるこすりつの

我身乃秋にわのまと』

空穂俊蔭 志つ河のはへ春のくなり出つことをはぬのを

連歌 きくめすくらまくて木のそうらふきまり

つきむノ条 空穂

あれむものぞ

空穂俊蔭 此木阿修羅の万劫

ろつみなくのむ

つきむ世ま山よ（生）

西まりくろ秋

ら（生）むものぞ』

宇治拾遺七 此馬京よみく（生）

ろ待たらむよ見

志つきたうくある

て淀をうろの『なぞ

いと（生）むもよなし』

（忘）

て年ごろ老せるちてまてよ琴乃声をきものせ

てまいのちよ『なまきむ』といふきまよ

源氏處女 つれづれよおぼされむと唯男わくしくも

連歌 ろともよたのしび『やどし給へ』

十訓抄十 五十三ヶ條 国司大よ腹立て重春国民の身すまでかくれど

連歌 の僻事をし出づる』公家に背き宰吏になり

づりて其科まで謀反よわくる』財を奉れば

『えてなぐめいきむよ男乃聞召ま淀』その恐

出家』

方丈記 此身乃ありさまともなふべき人もなくたのむべきやつこもなし『たよひひろく作まり』ともこれを

ゐやどしそれをうちちる玉

聴聞ノ中ヨリ一人ガ問ケラクたまをゐやどしトイヘルゐノ指辞ハ何処ニテ
結ベルニヤ待ラム答是ノゐ文字ハ下ノむニテ結ベルニテたまをゐやどしす
ゐむトスヘル心バヘデムゐ文字ヲ二ツ置ケルハ文章ノアヤデム此様ニ辞ヲ用
フハ文章ノミナラズ歌ニモ古ヨリ有ルコトヂヤ萬葉集巻一雄略天皇御製ニ
虚見津山跡乃国者押奈戸手吾許曽居師告名倍手吾己曽
座トアルハ此方丈記ノ文ノアヤト同ジコトデそらみつやまとの国はおしなべて
告るべてわれこそ居り居れトスヘルコトヂヤ　但シ居らしハ居ノ延言デム
左様ニ會得シレメサレ

今云ハさびしさもゆゑん
トスヲ古クハさびしみや
さんトモレテアリ

（二）　（二）　（二）　（二）

加行変格断続むノ徴

萬葉　十二　霞立春長日乎奥香無不知山道乎恋乍
可将来　こひつゝゐこ玉

拾玉集　四　ゐ草をわけてくれゐふゞねこ玉山ざとさびし
さみしさのこころ

空穂忠社　かれ北のかくまいけむねまでかくきこ返
つれバ今ころしまやこ玉今ころへまや申て
ころ玉での絶てまできこ返つれバ

扨コノころしまやこむトアルハ侘むトイヘルト同ジコトヂヤ此
事ハ愚父ノ書レタ往来問答ヲ見テサトラル、ガヨロシイ

山家集　下　雪ふりのいそりのつまをさししてつくゝとめて

（二）連躰『古今秋上 こよひこむ人にハあはじたなばたのひさしきほどにまちもこそすれ』

（二）連躰 まつらむ『萬葉十五 安治麻野爾屋抒礼流君我可反里許武等伎能牟可倍乎伊都等可麻多武』条下

（二）

連躰

同 こむ『人をとゞめむ』梅がえの我こそまづ種おきて見む こむ

連躰 人まつあとしのぶこむ』

『新古今春上 世の中こむ人こむ人すぐ『春霞たつ山のかの山の

連躰 のこころ

増鏡 一 なす』むちつくなまあつくころあふむ』と

連躰 見ゆまちのくようていづくより帰りて来るぞ』

あらまし人のこころこむ』かそほまぐせむハいかに

『なにいつを

淀松物語 一 世のことまいでこむとも思ふぞ』 連躰

左行変格断續ノ徴

（せ）新勅撰 恋一 おのづからゆきあひもやせむとたのめり

（せ）こし人見ゆ叩やいかにおぼつかなせむ』

（せ）拾玉集 四 つもりゆくうらの雪もき叫やせむ』この世の佛

を打ちかえり（とりかえ一本）

（せ）山家集 下 うかれいづるこころハ身にもかなはねばいかなりとてもいかにかハせむ』

（せ）正像末和讃 蛇蝎奸詐のこころにて自力修善ハかなふまじ 如来の廻向をたのまでハ無慚無愧にてはてぞせむ』

せむ』

（せ）萬葉 十 霍公鳥厭時無菖蒲蘰将為 あやめぐさかづらにせむ 日此従鳴度礼』

連躰 うづらにせむ』

萬葉 廿 迦蘇久爾波那爾波爾都度比布奈可射里安我世武比呂乎美毛比等母我母』ふな

連歌 かぎりあらせむ日ろをとらんむひとゝも

和哥初学集序 月を詠せむすはつきのあとのことゆる

連歌 こゝろをとめひつゞけてせうしくとなして

十訓抄十巻 然則史書全経をとも学びえたる詞花翰堂をも あしなみて舊記によくらべても古き跡も恥ても して君道をもおもひ身徳』をもせむ事實乃 至要也

淀松物語一 さぶらはゆきこのてまなぶこのうらむ』をせむ事あ

連歌 しくならなむこの』てあるふり

水鏡 垂仁 我位はつきながら此世をもおさせむ程は世の中を清くのよまうせとてまつる』

連歌

空穂藤原君 さるはおきてみせらせむ我をもで』おぼえきなる 家なり我世のかぎりもかくてすみぬく』をへ

連歌 おさせむ我子をあらむて』をきて呪ひて

源氏處女 おとどのほんのいとつらけれはさぶれあるひや みなむ』てたもつして忘しうおさせむこそわり なのとおもふて』

落久保 一下 うへのあやしうおさせむはまいのをは児君 めきんぐちさへまつのふきこ匹のそざめるこそ

連歌 いとさつらつきなむ』

奈行変格断続ノ徴

拾遺愚草　みかくてあきこの野里乃くびまくらおきてや
いなむ』秋乃白露

萬葉　九　於久礼居而吾者哉将恋稲見野乃秋芽子
連俳　見都津歟武　なきまどろみていなむ』
故爾

萬葉　十一　恋死　こひしなむ』後何為吾命生日社見
連俳　幕欲為礼』　一首ノウチニむノ軽重ガ[illegible]

拾遺　恋一　あはまし』もまさぬいまはこひわびてきなむ』命
連俳　もれをしのちなくさ』

拾玉集　一　海してある』たとへバ西よきる』もきなむ』命恋

連俳　このなしのぞし』

水鏡　允恭　その使庭に宿をおして七日までつやゝくで』むかしなむ』
連俳　をくらをぐりしを使乃いふにひなく
をのあまりしさまをと見あらたへまゐりなひよ
きこのどもろこび給ふすかぎりなくて

良行四段一格断続ノ徴

萬葉　十四　伊可爾思氐古非波可伊毛爾武蔵野乃宇家良我波奈乃伊呂爾代受安良年　いこよ
しておもひむの妹よもよしぬ乃そけらの花乃
いろまでおてあら』

中務内侍日記　初瀬詣　くまのの』いふとさるをさぐるまで

堰　[illegible]

（5）　（5）　（5）

吔あら郭公旅宿にそむくみてきくらん」

狭衣　一ノ上

ひとりかへやきふみゝちもしはさもろまて

ほとゝぎすへまをしきほ才なとかもろきし吔

とくひあら郭公世まふ今も昔もなきひなく

ぞもろしぬひるる」

近来風躰抄　鳫乃ちかひ羽　定家卿云　いふよろし」や

さしのぼむや　あら郭公」

萬葉　五　麻都良我多佐欲比賣能故何比列布利斯

夜麻能名乃美夜伎々都々遠良武」　山乃名

のみやきゝつゝをらん」

此歌ハ山上憶良又レガ旅行ノ我佐ニナラスマヲナゲイテ

神皇一
此環々拝ミヨキ初めつ
ろゝハ迦葉ト云佛乃
出給ひたる時よや為ら
ひ給ふ（む）二人あるは（ら）
普賢のときこの（し）
佛ハいで給ひたりとぞ

聴聞ノ中ヨリ一人ガ問テ
ラク此歌ノミナラズ萬葉
集中ニ男物トイヘルア
（鹿兒自物　鶏自物
騎自物　ナド類）
ハ何ナル義ニテ候ゾ答
是ハ形状言ノ男シキ
物トニテ辭言ニ云居
テ男シ物トムヘル
ノゾヤ永ゝし夜（ら）
友耳子島ナドノ
類デム先哲モ此ノ詞
ハヨク解シ得ラレザリシ
ナ故カマノ説（ら）
ヲ云ハレタコデ有
レ氏詞ノ理ヲヨク心ウレバ
ナモナク解セラルヽ詞デ
ム

ヨマレタ歌デムゾヨクヽ味ヒテむノ意ヲ知ルベキ歌デム

萬葉　十一　面形之忘戸在者小豆鳴男士物屋戀乍将

居　おもかたのわすれてあらばあぢきなくをのこしものやこひつゝをら」

聴聞ノ中ヨリ一人ゲイハク男士物トイヘルハ何ナル義ニテ候ゾ

答是ハ形状言ヲ辭云ニイヒ居タルモノナリ男シキ物トイヘルヽ

先哲モ此詞ハヨク解シ得ザリシナリ詞ノ理ヲヨク心ウレバナモ

ナク解セラルヽ詞デム

続日本後記八　於岐那度天和飛喨波遠良無久左母乏

毛散可由留登岐尓伊天弖萬田天牟

古今六帖　五　ゆきもきえかあをもうれひきおきていなだ

ちぬ吔やくるゝわれこひをらむ」

聴聞ノ中ヨリアル（ら）
一人ガ問テ云ク源氏物語處女ノ巻ニ
ナルふかくへだておもふたまふるト有ルハ、おもふハ連辭言ナルヲ用言ヘツヾキテおもふたまふるト云ヘル、此頃ノモノニハ常ニ見エテアリマスガ何ナル訳ニテ候ヤラム、答不審尤ナルコトデム（ら）
是ハおもひたまふるトモスベキ詞ヲおもふたまふるト轉言ニ申スノヂヤシカル故ニヤハリおもひたまふるト同意デム（ら）
又おもふ居ヲおもひ居トモ云ヒマスモ皆此例ト同例ヂヤホドニヨク會得シメサレ
又一人ガ問ケラク増鏡ノ今先生ガ御引キナサレタル文ニ〔ごとに〕なくおもひ出てト有ルおもひ出てハおもふ出てト同意ニ候ヤ答左様デム此詞ハおもひ出ヲおもふ出トオトラレテなくおもふ出てトアルモ同例デム〔孟津鈔ニおぼしてハ〕ヂヤ源氏物語桐壺ニいふかひなくあさましき乃よおもほしてトアルハ至ツテヨクナシ左様心得メサレ

源氏處女 ふかうへだてておもふたまふることはいとのこそ侍れ（ら連辭）
増鏡 一 かのうしろみをもかくしる人ハなくらのとしごろもおぼしなげきたるにおほぼれてあまの子きまつの侍ら（連辭）
増鏡 おどろのした 天暦乃しこのうし御代までも一条攝政疑謙徳公と申す人乃少将にまかりける和哥亦乃別当にといやまてなしつぎの五人にあそばせられて後撰集ハあつめられけるにぞおもひこのぶて（連辭）まいや侍ら（連辭）
定家卿和歌式 こ乃人このおもむきを言とくまことをこそあらくれる

〔一言芳談〕三四丁
あらむかぎりハ遁房ハ發心ある人にをえたでまつる学問してまたく無用なりとかおもたまへけるにもあらずもハ後世の心もかぎもぬずいしうらうかあらむもやうハとてこそ学問をたしかへとて遁世すれとるこ

（ら）（ら）（ら）（ら）

定家卿和哥式ハ和哥六部鈔ノウチヂヤ 言ハこのきも世にも思ふおよびてや侍ら（連辭）いくよ
萬葉 十一 天飛也輕之社之齋槻幾世及将有 ますであらむ（連辭） 隠嬬其毛
増鏡 一 うち人をあひそてまつるまも者のするべき御ちぎりあるぞ（連辭）物ぞて「あぞておくらくぶ」
萬葉 十五 比等久爾尓伎美乎伊麻勢弖伊都麻弖可安我故非乎良牟 いつまでのたのがうひをたゝ（連辭）等伎乃之良奈久（卯ノ指辭ハ結句ノ如クニテ結べり卯ハ如ノ延言ヂヤ）
顯昭陳状 又順が自筆に点したる本を見ぞとて申達ハこそハ于今難傳ともはらめ又順か自筆のもも世に侍ら（連辭）もあるうちも村上乃時年紀不

閑居友下　たとひ後の世をおもはずともたゞこの世一ろ

巻二　ちらをあそばせて結らぬもあしからじの

を

四段五ノ音ヨリウツル格ノ断續ヲ徴

萬葉十七　長歌上畧　多麻伎波流伊乃知乎之家騰世牟

須辨乃多騰伎乎之良爾加苦思底也安良志

乎須良爾奈氣枳布勢良武　かくしてやあら

し男すらになげきふせらむ

聴聞ノ中ヨリアル一人ガ問テ云ク　あらじものを　トドヨリ駢言ノ
辭ナルものヘツヾケルハ如何ナル故ゾ答夫ハ辭ノドト共ニ駢言ニ云ヒ居エ
タルモノヂヤ然ル故ニ第四階ノ辭ナルものヘツヾクノヂヤ古今集雜下ニ
いく世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもにおもひみだ
るゝトアルモ　いくよしも　あらじ　わが身　ト心得テヨロシイ
どものを　ト同格デゴ又問義門法師ガ和語説畧図ニドハ連用言
截斷言連駢言ノ三ツヲ兼テアルト図シテアルヲ見レバ爰ノ　あら
じものを　トアル　ドもの　ハ則チ駢言ヘツヾケルニテ連駢言ノ格ニハ候
ハズヤ答ドノ説ハ義門師ガ云ハレタルハ悉ク採ルニ足ラズ餘リノ僻
説ナリ其僻説ナルヲ弁ゼマシヤウ先ドノ連用言ナル事トテ活語指
南上巻ニ引レタル證ヲ見レバ新古今十三　わすれじ乃ゆく末まで

ハろくろれバけふをかぎりの命ともがれトアル歌ヲ引レテ連用
言ノ格ヂヤト云レタレド大キナ心得チガヒヂヤ云居テ軆言ニナル詞ニ定
格ガムガ其定格ヲ義門師ハイマダ知ラレナンダ故此様ナ解説モ出
來ルヿヂヤ詞ニテ云居ル処ハ第二の音連用言ヂヤ 春霞 わびずまひ 辭ニテ云居ル
処ハ断止言ヂヤ わぎもこの[ ]のゆくさゑまでハ あらそがほすてつきるのらむ ナドイフ類デモ詞ノ格ト辭ノ
格トヲ知ラレズシテ混同シテ居ラルヽ故ニ惑ハレタノヂヤ又いすまどの[ ]
ト撥辭ノの[ ]ヘツヾイテアルモノヲ何デ連用言トハ云ハレタリケン実ニ突止
ヂヤ 但シ詞ヲ省イテ云居ル時モアルヂヤ あらましうぢの秋の夕ぐれ 此類ヂヤ是ハあらましおバかのらましトアルベキ定格ノ詞ヲ省ケルニテヤハリ断止言ニテ云
居ル格ヂヤ猶委シイ事ハ辭の栞講義ニ申サウ
又同書右ノ歌ノ傍書ニかく軆言ヲ云ひるーしての[ ]と受るハ諸活
用云皆 思ひの[ ]まに君がゆき けるがーのるる 其本連用言なるをるを之上

トテ云ハレタルヲ思フニ是ハ諸活用言ノウヘデモ辭ハ此格トハ別ナルヲ知ラ
レナンダノヂヤ
又同書ニ[ ]ヲ連軆言ナリト云ヘル證歌ニ後撰集十五 白川乃瀧乃
いと見まほしけれどみだりに人をよせじものをや トテ云ル歌ヲ挙
ラレタレドモ此ノよせじものをやハ よせじものをや[ ]ニテ[ ]ノ辭ハ共
ニ軆言ニ云居タルモノナルヲ何連軆言トハ云ハレタリケン是ヲ若シ連軆
言トイハヾ四段ヨリハジメテ凡テノ二の音ヲ軆言ニ云居タルヲハ皆連軆
言ト名目ヲ附ケネバナラヌヿヂヤ猶辭の栞講義ニ申サウ

四段の五乃音よりうつる格

萬葉 十七

長歌上略 多麻伎波流伊乃知乎之家騰世牟須辨
能多騰伎乎之良爾加苦思底世安良志乎須
良爾奈氣只布勢良武 かくしてやあらしをす
らになげきふせ（ら）む

千載集序 わかの世の風俗『てすみもてあそべハ名を
連辭 代々のむかしこ年をとをまなびつゝすかさかるハ
おもてをかきまして立て（らむ）かこそ（し）

寂蓮法師集 いまし一乃このまのころぶ待間內乃いはけ（らむ）
連辭 あかつきのおもかげ（し）

悅目抄 深き『をていふ題をえてぬ（し）『てよのあ（らむ）四
連辭 心のかよふべし

方丈記 おそろしき山なれどもふくろうの声をあハ

(5)　(5)　(5)

連斛

れむりつけても山中乃京氣をとりまつけてこそ
るをなし「いそもや「そのくおもひふすくしまらむ
人乃たゆるハたえしもつあどさうらむて」
此格ノ俗意ハクドイヤウヂヤガヨウ味ヒラルヽガヨロシイ

くしき志くしき二ノ音ヨリウツル格ノ断続むノ徴

後拾遺　雑三
なよのそ乃すのいのりもあけうら竸」ころ
を深き山ふすてませよ」

新千載　恋一
関守乃すどろむ夜もあまこあまでこそ
乃うよふ道やなうら竸」

金葉　夏
里ちとふくひなのたてきまきてなり「こころ

(5)　(5)　(5)

乃とまるやどやなうら竸」

狭衣　一ノ上
入ぬる磯乃なのくなまふ心をつくさん人をた
うましもおもくまるもさ海くふをのつのふいので
「うハなうら竸」

源氏橋姫
連斛
さうしくつまくなるなぐさめまいので
味のしうら竸」ちごもが頸「とやぞとまく
笑しの絡ける「り

水鏡　上
修行者乃卅四五「などふやなうらむ」で見咲し
が頸をいとたくとくらむあり「あくいろちの
連斛
なくれバいのなる人乃いづこより來頸つるぞ」
住頸などのうけ頸をうまそしのふ竸すはふぶ

五十一 よきりこゝろもまるとも
あまのつかのつてき
いつれの人のをの
ちげゝむ」

（け）　（け）　（ら）　（ら）

手をらむ
是ノをらむハむノ転ノむデムデ味ヒメサレ

和泉式部集 続 つくづらむ後乃人を思ふなどハあるまじきのせてある

連躰 べきありとぞ」

千載 恋二 なかなからむこころもしらず」こころのうちみだれまて

連躰 今朝ハそのまとこそあらめ」

くしき くしらき 一格 断續む之徴

夫木 十七 小夜千鳥波や高けむ」風をやのゝらの沖に

ねちちむなくなりし」

萬葉 九 海若之何神乎祈者歟往方毛来方毛船之

早兼 わたつみのいづれの神をいのらばか ゆく

さもくさもふねのはやけむ」

萬葉 十一 摺衣著有『跡夢見津』寤者孰人之言可

将繁 いつれ乃人のをの ちげ（之）む」

聴聞ノ中ヨリ一人ガ問テ云ク萬葉集十一ナル摺衣著有跡夢見津トア

トアルハ古點ニハきけり」ト訓デムガ先生ノ訓ヲウケタマハレバ著有ト訓セラレ

候ハ如何答夫ハ尤ナル事ヂヤ全躰此哥ヲ本居翁ハ著有ト訓セラ

レタヂヤサリナガラ著有ト云フ詞ハナイデム 橘千蔭ガ萬葉畧解ニモ著有ト訓デアルモ本居翁ノ訓ニナラヘ

レタルモノデゴザル 此様ニ本居翁ガ訓ゼラレタハ著ト云フ詞ヨリ惑ハレタル事ニ相

違ナイデム此著ト云フ詞ハ著ノ轉言ナル事ヲ一の巻［却の轉言］ノ条

下デ辨別致シタ通リデム 著ハ著ノ轉言ナルヲ著む著著著ト活用ト思ハレタルハ本居翁ノ心得チガヒデゴザル

又古點ニ著有ト訓デアルモ快クナイデム著有ト書テアルハきたりト

訓センガ爲ヂヤヨク會得サレメサレ

聴聞ノ中ヨリアル一人ガ進出テ一枚ノ紙ニ書ツラネテ問テ云ハク

		俗語
四段	なまめのなげ(の)む	クデアラウ
一段	今ひと目まそまやそ(み)む	ルデアラウ
中二段	いつのまま涙乃つ(き)む	ルデアラウ
下二段	およのぶを(え)む	ルデアラウ
加変	こむつの(こ)む	クルデアラウ
佐変	いはずでは(せ)む	スルデアラウ
奈変	おきてやい(な)む	イクデアラウ
良四一	いろよいですあ(ら)む	ルデアラウ
くしきくしきく二の音ヲウツス格	やとやな(のら)む	クデアラウ
同一格	ふねのまや(れ)む	カルデアラウ

以下連續むモ俗語同ジケレバ畧ス

右ニ御アテナサレ候俗語歟カウデアラウ見ヤウデアラウろぞ常ニハ申スヿ兼リ及バズ候ヘバ兎角申ス人出來致スマジキ氏申ガタシ矢張歟クデアラウ見ルデアラウトナサレテハイカヾ答尓ラズ歟クデアラウ見ルデアラウト解シテハ歟くらむ見るらむノ俗意トナリマスダヤノ疑ダヤ なげくらむ なげくらむ 見るらむハ断止言 見むハ将然言ノ疑テゴ コマヤカニ味ヒメサレ又歟カウデアラウ見ヤウデアラウトモフ俗言ノ世間ニ見イテハゴラヌ 但レ俗間ニハ歟ノデアラウト歟カウデアラウト相混シテ用フヂヤガ夫ハ俗言故ダヤ歌ヤ文ノウヘデハヨク味ヒテ用フベキヿデゴ

扨コノむヲながヘト論弁イタレ且又證歌證文ヲ沢山アゲテ講釈イタレタノモ先哲達ガむノ軽重ヲ更ニ云ハレナンダ故ニ委シク申スノデゴ詞の玉

緒又紐鏡ナドニ[も][も][徒]ノむ|モ[ぞ][の][や][何]ノむ|モ共ニ三ツ繋辞ハ
ヂヤト定ラレテムガコノ論ノ粗ナルコハ前條ニ申シタ通リデム軽ノむ|
ハ[そ][も][の][徒][が][何]等ノ結辞トナリ重ノむ|ハ[ぞ][や][ろ][の]
等ノ結辞トナルガ定例デム又[が][の][何]等ハ決シテむ|ニテハ結ヒマセ
ヌコデムカラ是モヨク心得テ居ラルヽガヨロシイサテカヤウニ予ガ論弁
イタスノモ其根元ハ本居翁ノ詞の玉緒ノオカゲヂヤ其オカゲデ玉の緒
ノ粗論モ弁別イタサルヽハ物モヽアリガタイコデム

くしき　きくしき　一格連躰格

続紀宣命　是以今由久前仁緩怠事無久諸勉努　もろく
おをちな(け)む|人等毛教
仁徳紀　知破椰臂苔手泥能和多利珥佐烏刀利珥破椰
鶏務もや(け)む|臂苔辞和餓毛胡珥虚務|因云
手泥ハ手ダト假字ヲ附ベキヂヤガ古ヘヨリ如ウ知ノ字音
ハ混同ニツカフテ有ル五十書分ケレヌ故吾分ケマセヌノヂ
ヤ皇國ノ韻ハイトモ正シキコデアレモ奴ヲトツカフ文字ヅカヒ
ガ往來ノヂヤ伊ヰ以エ衣ナドモ同ジク吾分ケラレヌコヂヤ委
シクハ月草ニ
萬葉　三　梓弓引豊國之鏡山不見久有者恋敷牟鴨　なく
むし(け)む|かも

萬葉　十七長歌上畧　之良久毛能多奈妣久夜麻乎伊波祢布美古要弊奈利奈婆孤悲之家久氣乃奈我氣牟け

のなごけむ曽

正徹物語　上　なげのなさけハそ『てしたるなさけなり』『くまなむ

なげの花ろうげうもハなけむや『くれたまで『とてな

なこるべき花ろ『といふこころなり』　なけむやノやハ

指辞ノやデゴザル

扨むノ講釈ヲナガノハト致シタガ是デむトいフ辞（テニヲハ）ノ二ツ有ル訳ヲ一ツハ軽ノむ一ツハ重ノむ但シ連辞ノむハヤハリ重ノむデ別ノむデハゴザラヌ夫故ニ二ツデゴザルワスレメサルナヨクヽ會得セラルヽガヨロシイ

扨是ヨリハむノ運用ヲアラヽ申シマシヤウ此ノむガ指辞ノこそノ

結辞トナル寸ハめトナリマス　かまこそハ見め　こまこそとも　め　コノ類ヂヤ是ノめモ上ニ

指辞ノこそガ无ケレバどどもヘツヾキマス　あひ見めど　ゆうめども　ノ類ヂヤ是ヲ

むめノ運用ト云ヒマス　又むノ轉言ノめガゴザルコレヲこそノ結辞ノ

めト混同シテハナラヌめヂヤ　あそうこうらめを　たづこひよあらめ　ノ類ヂヤ是ヲむノ轉

言ノめト云ヒマス

又まハむノ意ナガラ一種ノモノヂヤ用言ヘツヾキテ躰言ヘハツヾキマセヌ

ヂヤ　きこまほし　みまほし　ノ類デゴザル

又まくハむノ延言ヂヤサレド延言ハ本言ノむトハ聊カ意ノ異ナル訳ガ

ゴザリ其訳ハ辞の栞ノ講義ニ申サウ　ぬヲるくト延テ云フモ同義ヂヤ

又まくしト云フ辞ハ前條ニ申タまくニしノ文字ノ添ハリタノデアルガ是ハ一

種ヂヤ ませむ―― まし―― ましかト運用マス然ルヲ詞の玉緒巻一ニ［まし］是ハもとらぬ辞まで上の四十三段の辞のごとくに三つとも二つとも轄るゝことなし故ニ紐鏡乃外なり已上ト云ハレタハ粗論デム義門法師ガ玉緒操分の巻ニ此ノまし――ヲ論セル丁アレド聊(イササ)カ心エカヌ丁ガム是等ハ辞の栞講義ニ申サウ扨大キニ労(ツカ)レマシタニ依テ今晩ハ是迄ト致サウ

なむ

サテ又是ヨリハなむ――ト云辞(テニヲハ)ノ一ノ音ヲ発(ハブキ)タル歟且又俗意ヲ申シマシヤウガ此なむ――ハ願(ネガヒ)ノなむ――又誂(アツラヘ)ノなむ――トモ云ナラハシテムなむ――ヂヤ扨コノなむ――ノ俗意ヲ北辺主ノあゆひ抄ニ［てくれよ］トアテラレタガ意ハ随分ヨロシイヤウヂヤガ是ハヤクニタヽヌデム扨又同書ノオナジツヾキノ文ニ世ニこれを［我のなん］とひつれど我よりあて只そとあつらふる詞也ちらばちらなむといへる詞をもおもふべしトゴザルヂヤガサラバ其なむ――ヲ［てくれよ］ノ意ニアテヽ見ルトちらばちら［なむ］(テクレヨ)トナリマス何ト是デ意ガ解(ゲ)セマシヤウカソコデヨンド所ナクちらばちら［なむ］(チリテクレヨ)ト詞カラシテ俗意ニ解(ゲ)セネバワカラヌ丁ニナリ行マスヂヤ是ハ実ノなむ――ノ

俗意デハゴザラヌ只大方ヲ解スノミノヿヂヤ凡テ歌ニ依テ
北辺主ハ俗意ヲツケラレタ故「死ぬる命いきもやすると
こゝろみに玉乃をばかりあはんといはなむ旨ナドモツケラレテ
更ニ一定リガゴザラヌ是デハ初学ノ者ハマドヒマスヂヤ実ニハ
俗意ヲ解シ得ラレヌ故ヂヤ何カニトイフニ未然言ハ其意デ解
セネバナラヌヿデ一ノ音ナルいをヲ［イフテ］ト解レ又［イヒテ］ナド解
シテハ意ガ違フ訳デム ソコデニヿガアツル俗意ハ［ウナラヨイ］ト
アラマス是デなむノ俗意ヲ會得セラルヽガヨロシイ
サテ是ヨリ四段ノ活用カラツギハ申マシヤウガコヽモヒトツ心
得オカネバナラヌヿガゴザル此ノなむハ断止バカリデ連続コトハ
更ニゴザラヌ夫故［ま］［む］［の］［随］ 等ノ縦緯トナルノミデム

(か) (か) (か) (か) (か)

四段ノなむノ徴

古今 恋四 わすれぐさかれもやするとつれなき人乃
こゝろにしもはおかなむ

後拾 秋下 秋かぜにさそはれわたる雁がねは物おもふ
人乃やどをよかなむ

古今 恋四 まてといはゞねてもゆかなむしひてゆく駒乃
足をれまへ乃棚橋

万葉 八 妹が見て後もなかなむほとゝぎす花橘
をつちにちらしつ

万葉 八 我やどにまきしなでしこいつしかも花にさか

（なむ）よそへて見む
コヽノ〱ハ軽〔何〕ナルヿ前条ニモ弁ぜり見合スベシ
（さ）後拾 雑三 いそ乃かみ旅寝をせバいとさむし昔の
ころもをかまし あさ（なむ）
（さ）源氏夕顔 めもくれまどひてなきまどふうなしとおぼせ
バなりをてむさ海をえむとおぼせどもや御
馬まて二条の院へおもしゆるさ（なむ）人さわぎ
くなりまどひぬほどしるとて右近をそへてのせ
れバ
（さ）続千載 賀 くもりなき月日のかげも君が代乃久しかる
べききさためてらさ（なむ）

（さ）玉葉 恋五 いとふとも猶など世をかけゆきさ（なむ）あら
てかそまも猶もひやるべく
（た）拾遺 雑秋 小倉山ミねのもみぢばこころあらバ今ひと
たびのみゆきまた（なむ）
（た）金葉集 雑 君乃程ハ馬乃あしなども本當脇のこゑりそ
なんぎなるべきよの中とて本當脇川あらし
まさ近てゆく浪のとゞこほるまをたのしまち
（た）後拾 秋上 七夕乃うつるあしたの天の川舟もかはぬ浪
もた（なむ）
（た）古今 恋二 しぬる命いきもやするとこゝろみに玉の緒を

ぞうりあをなむといをなむ

(も) 源氏浮舟　のちにまたあひ見むことをおもへばなむ　この世乃

かぎりにちるまではで

(も) 草根集　一　宮ぞしら神乃さぞめし五百年わのちのさこ近

まめくりあをなむ

(も) 古今　恋四　あだなる道ハつきもまではなむ　人ぞとふとも

わきのとちもをむ

(ま) 新葉集　春　春日山をの一の雪も清すぎり過ぬるとの聲べ乃

わのなつまなむ

(ま) 拾遺　別　ちる花ハ返る近ぬまでうづまなむ　わのるて

人もたちやとまると

(ま) 奥義鈔　こゝろをもとときえなるをバたのまなむ　松ハ

見えうし種てハちるらやと

(ま) 頼政集　わだにもあせまよしよしまなむ　いらバ

ちぐらわ山乃その月

(ら) 古今　恋二　あのめつてあをで年ふるいつもりまこりぬ

人をも人ハちらなむ

(ら) 津守國基集　なきを深なゆハのをもあひありて朝ぼら汐

わこ川とちるなむ

(ら) 古今　春下　さくら花ちらバちらなむ　ちらでともふるさと

人乃来てもえなくに

(ら) 続後拾　恋五　なきを女があしひ乃そぶりこつとえむら

(き)　(よ)

一段ノなむノ徴

きふしぞまもゆと志ろなむ

(ひ)　(み)

(き)　(き)　(き)　(き)

中二段なむ徵

空穗菊宴　山づとにみえてべき人ハなけれどもわがをる枝よ

風もよきなむ

同吹上ノ上　花ちらぬ風もこゝろあり路なあてぞみる里

急は志ぞしよきなむ

同　ゆく春をとゞむべき方もなかりけり今宵ならぬ

まし代ハさぞきなむ

後拾　恋三　つきもせぬうきをの系乃ちぶさのをちやくあ

(ゐ)　(い)

(ち)

ちしの风もふきなむ

(ひ)

(み)

(いと)

(り)

(え)

下二段ノなむノ徴

万十二上ホ三丁
あらたへ乃袖まうちぬるぬぞくまのこよひもまやもあけなむあけなん

(け) 古今 巻一 春たてばきゆる氷乃のこりなく君がこころハ
わ(れ)にとけなむ

(け) 古今 哀傷 なき人乃やどにかよはゞほとゝぎすかけてね
にのみなくとつげなむ

(け) 風雅 雑下 立かへる雲井の田鶴にことつてむひとりさはべに
ねのみなくとつげなむ

(せ) 後撰 巻六 立のぼる雲のけしきも山もさごえてぞ思ふうらも
風ハよせなむ

(せ) 興風集 笛ふくとき人乃おもひ乃まこの世なむ見てハ心乃
なぐさまむものを

(せ) 儀草紙 四 たのみてハひさしくなりぬすみよしのまつ

（て）（て）（て）

後撰　離別

このたびのたびしらせ〔なむ〕

このくさもまをまをすぎぬるものならバちらちらなむ

たびよりなむいで〔なむ〕

後葉集　春上

山ざくら雨ふるあくる里ハちる雲風をバよそに

くちへざりて〔なむ〕

大和　上

右京のうみのかとよそんないろぞとハなほも

逢ねどもこひしきれハときまつけてなほもいで

〔なむ〕

聴聞ノ中ヨリアル一人ガ問テ云リ爰ノこのもれトアルハ

木ノ花ノコニヤ答愚按ニハこそ乃もハノ字誤ナルベク思

ハルデム木ノ花ハ梅ナルベシレド古説 大和物語 ニ見エレド甘

（ね）

心シガタク存ゼラレマス

（へ）（へ）（へ）

古今　除之

いざここにわが世ハへ〔なむ〕菅原やふしみの里乃

あれまくもをし

後撰　賀

年乃うちにつもなむとすなるおもなほハいとこ

づけをそりもそへ〔なむ〕

源氏横笛

笛竹乃ふきよる風乃ことならバすゑのよながき

ねにつたへ〔なむ〕

示饒咏七ノ上
年をへて流れのよるふるみのかげもとめなむ
谷のうくひす

まかせし 四ナハテウ
あまをば あまたかく
てたかし山まちちの
つゝひの先に匠
なむ

(め)　(め)　(め)　(匠)　(匠)　(匠)

後拾遺 夏 夏の夜の月はほどなくいりぬとも やどれる
水に影はとめ（なむ）
清輔朝臣家歌合 仙人はをのゝくさしとどめ（なむ） 谷
のうぐひす初音なくなり
栄花 鳥辺野 年をへてゆきかふ坂のしるしありてちとせの
影をせきもとめ（なむ）
古今 雑下 人しれずおもふこころは春霞あらはれいでゝ君が
目にも見え（なむ）
後撰 恋一 あふ事はさもこそ人めかたからめこゝろばかりは
とけて見え（なむ）
曾丹集 影みえし天のこゝろをちかふ言の葉のまにまに

[illegible]

(匠)　(匠)　(匠)　(急)　(急)

伊勢集 [illegible]

後撰 恋六 [illegible]高砂の尾上の
こまつ川きてもいはなむ
拾遺 恋五 わするなのいそくは見えずもわすれ（なむ） ひとよ
しのぶにてころとならば
新撰万葉 上 下春年者暮歟 としはくれ（なむ） 散花緒
惜哉許々良鶯之鳴
夫木 まれにきて見るはつきぬよいそぎゆく人をおさ
への関もとめ（なむ）
拾遺愚草 上 なかくもるあふくま河の雪みれままあまを
ばやらぬ関もすゑ（なむ）

（こ）（こ）（こ）（せ）

加行変格ノなむノ徴

源氏須磨　山がつ乃いほりにたけるしばしばもこととひこなむこふるさと人

玉葉　あかつきにこととひこなむさ夜ちどり須まのうきねのそのあけぼのやと

相摸集　立波ハよるとまるともふきこなむ山乃中ゆくまつうらしぬ

佐行変格ノなむノ徴

伊勢物語　あふみなるつくまのまつりとくせなむつれ

（せ）（廿）（せ）

なき人乃鍋乃数見む

後拾遺　春上　基長中納言東山に花見侍けるにぬのころも着る法師して誰とも知らせでつかはせ侍ける　加賀左衛門　ちる事ハ旅称をせなむ木のもとにまかつるを花乃名こそてあるまし

落久保　三　今すこしつの絲まつらむとおもふりいとをかし　ごうまおもせなむと念し給ふ

源氏　ことをつくしあやしうねぢけたるわざなるやまもおもせなむとおもふあるりまハ心もとなくておもと乃ほかにくらしくなむ

コレハ明石ノ上ノ御腹ヘ姫君ノ出来タルコヲ源氏ノ君ガ

紫ノ上ヘオハナレアツバス詞ヂヤ

(な)

奈行変格ノなむノ徴

(ら)

良行四段一格ノなむノ徴

後拾遺 春上 高砂乃をのへのさくら咲にけり外山乃霞たゝずもあらなむ

万十一 こゝろしもおもはくあらなむ

(ら) 狭衣 一ノ上 しらぬまのあやめはそれと見えずともよもぎがかどはすぎずもあらなむ

(ら) 後撰 恋五 笛竹のもとのふるねはかはるともおのがよゝには ならずもあらなむ

(ら) 萬葉 九 吾妹兒者久志呂爾有奈武 くしろにあらなむ 左手乃吾奥手爾纏而去麻師乎

(ら) 源氏橋姫 かゝるついでしも侍らずかし又侍りともあすをも ほどしらぬ露の命のうちむべきまゝも侍らぬを さらばかゝるふるものゝ世に侍りけりとばかり しろしめされ侍らなむ

四段ノ五ノ音ヨリツヾク格ノなむノ論

サテ爰ニイハネバナラヌヿカヽヿノなむハ四段ノ五音ナルあ餘
げヨリ此段乃(ら)(り)(る)(れ)等ニウツリテ活用詞ヂヤガコノ一
ノ音ナル将然言ノ(ら)ヨリなむト受タルヿハ更ニ見アタラヌ
ヿデムソコデ飽有なむ押有なむ立有なむナドイフ詞ヲ
フルなむハ此段ニハナキコト、思ヒサダメタデム夫故ニ詞乃
栞ノ図ニモコノなむヲ除イタノデム先達モ此ノなむニハ
氣ガ付レナンダエヱ良行四段一格トヒトツニオモハレテ居ラレ
タノヂヤ此格ハ予ガ見ヒライテ立タ格デム

しき きし 二ノ音ヨリウツル格ノなむノ徴

兼盛集 秋もきぬらみてをなのすむ秋乃白こよひ乃
宮よ雲なるのら なむ

後撰 恋一 まどろまぬかべにもへをとつるこのなまよし
みら なむ 春乃夜乃なな
拾遺 恋五 数ならぬ身ハこゝろだになからなむ あるむ
しらずてばうらうらえく
人丸集 なをそ乃あをてらまそ月のおけのとより あこよひま
ようて秋なごのから なむ
此哥ハ萬葉巻七ニ明日之夕将照月夜者片因爾今夜爾
因而夜長有 秋もこのら なむ トアル歌ヂヤ

サテ誂ノなむヲナガクヽト年ゴレマレタガドナタニモ其格ト俗
意トヲヨク會得セサセタイタメヂヤ

萬葉巻廿先太上天皇御製霍公鳥歌トアル其御歌ハ霍公鳥ヲ聞テ先帝ヲ恋キリニ御慕ヒアソバス御歌ヂヤ富等登藝須奈保毛奈賀那牟なけもなきの〔なくむ〕母等都比等可氣都都母等奈安乎祢之奈久母トアル八先帝ヲ繋止ナク心ニカケテオモハスル霍公鳥ヂヤホドニ猶モ鳴ウナラヨイトオヘル御製ヂヤサルヲ加茂翁ノ説ハナホザリニ鳴ウナラヨイト解レタハワロイヂヤ此御製ノ御呂ヲ尼妙觀ガ申上タ歌ニテモレラルヽヿデム

サテ此ヿニ心得テオカネバナラヌヿガム上古ハ此ノなむト云フ辭ハナイヿデム タド如トノミイフタヿヂヤ萬葉集ナドニモ至ラスクナイデム巻十詠蟬默然毛將有時毛鳴奈武もどもあらむ時曰もなかなむ 日晩乃物念時爾鳴管本名ナド見エ メテアルヂヤ なむトノミイヒテ誂フルヿハ萬葉集ハ云ニモオヨバズ上古ヨリアルヿヂヤ日本書記安康巻於明摩擲鳥摩擲輸區塗銭訶那杜加礙訶區多智豫羅泥 かげろふら〔な〕 阿梅多知豫梅牟ナドムヂヤ猶委レイフヿハ辭の栞ノ講釈ノ寸申サウ なの條下ニオイテヿダイハネバナラヌヿガム上古なむトイフ辭ハナイトイフヿニ附テノハナシヂヤガ古事記中巻日本武尊ノ宮簀媛

ノ衣ノ裾ニ月水ノツイタヲ御ランジテオヨミアソバレタ歌ニ那賀祁勢流意須比能須蘇爾都紀多知邇祁理トオヨミナサレタハ宮簀媛ヲ見ソメテ後東夷征討ニヒマイリテ月日ガタツタトイフヿヲ月ノサハリニホノメカレテオヨミアソバレタ哥ヂヤソコデ宮簀媛ノ御コタヘ哥ニ多迦比迦流比能美古夜須美斯志和賀意富岐美阿良多麻能登斯賀岐布禮婆阿良多麻能都紀波岐閉由久宇倍那宇倍那岐美麻知賀多爾和賀祁勢流意須比能須蘇爾都紀多多那牟余カヤウニオコタヘナサレタノヲ多多那牟余トヨンダ故ニ此哥ノ意ガヨウ解セナンダヂヤ此辭ヲ古事記傳廿八都紀多多那牟余ハ月將立なり契冲後乃點なるバ多知那牟余とよみし

と云つり後すは多々那牟とてハ竢てよかしと希ふ意
子なるを古ハ多知那牟乃意にかくも云けるなるべし逆べき
ことを云むがごとし上比ナドヽイハレタヂヤ又辭格考トイフ書
ニ此なむヲトリ出テ名月ヲ希求ノなむト名ヅケ二階ノ辭ノ
徃むノなむヲ去ノなむトナヅケテサテソレヲイハレタヿニ希
求ノなむモ去ノなむモ上古差別ハナクテアリシ辭ヂヤ後
世ニオヨビテノ希求ト去トツカヒワクルヤウニナリシモノヂヤト云
テ此宮簀媛ノ御歌都紀多々那牟余ヲ引合ニ出サレテ此哥
ハ「タチナム」ヨトイフベキナルヲヤト論ゼラレタルハアカスヿヂヤ
予ガ前條ニモ申ストホリ上古ハ詠ル辭ニハなトイヒテ務なト等なト
禁な禁なアリシヲヤヽ後ニ至リテなむヲツヘテなむトモイフヿニナ

為冶按 ウノ論アルベシ

リレナラサルヲ一階ノ詠ノなむモ二階ノ徃ノなむモ一
ツナリトハイフニモタラヌヿデムカ様ニ辭格考ニムダ骨ヲ折
テ論ジタモ古事記傳ニ本居翁ガ山ウタガハレタモ實ハ文字
ノヨミ様ガ粗ナルノヂヤ多知ノ字ハ拗音チヤアト直音タアト單音
ナレバ拗音チヤノ知ノ音ヲ用ヒタモノヂヤ 猶カヤウノ論弁ハ萬葉ノ講釈ノ寸妄
レク申サウ 此御歌ヲ熱田大神縁起ニ宇知倍那宇知倍那志母
夜知何祁勢流意須比乃宇閇爾阿佐都紀乃其止久
都紀多知祁爾祁流トアリマスケア是デドナタモヨウ會得セ
ラルヽガヨロシイ
サテホモヒトツ心得テオカネバナラヌヿガムソレハ何ヂヤトイフト
マヅ前條ニ申タトホリ此詠ノなむハ 輕 え 同 も 同 の 同 徒 等ノ繼

春海云
いつまでもまつといひぬる人忘れずてわがおもふをぞ神やしるらむ
トイへり

辭(コトバ)トナルノミデゴザルカルタ正保板ノ哥仙哥集、貫之集上巻
ニいつまでもまつといふぬべふ人忘れずてわがおもふをぞ神や志
らなむカヤウニやノ結辭トナリテアリマスツコデ不審ヂヤ故
群書類従ノ貫之集ヲ出シテ見ルト此歌ハヌケテナイヂヤ
サルユヱニ校合ノ仕様ガナイガ全體此歌ヲ考見ルニ是ハ
人しれずわがおもふをぞ神やしりなむトアリシナルベシ
知リト知ト字体ガ混ハシレイユヱオホクハ誤寫デゴザラウ元ノ
マヽニテハ第一歌ノ意ガワカラヌコデゴザル扨又同ジ歌仙哥集
ノウチ興風集正保板あづさしくゐゆく春をたちあらば今年
ばかりの秋をよらなむデアルウタヲ群書類従本ノ方ニハ
あまずしてゐゆく春りしあまりのふことしぶかりぬやど

やあらなむトゾヂヤサテオノレツラ〳〵案ズルニ正保板ノ方
ハ誤字多クシテ歌ノ意モサダカナラネバ類従本ノ方ヲ正シ
トスベシサリナガラやどやあらなむトやノ結辭(コトバ)ニなむヲ用(ヒラレ)ツ
ルハ違格ナリツコデ考見ルニ原本ハやどりかるらなむト
トアリシニウタガヒナイヂヤツレハ加ト也ト上代風ノ假字
ハ至テ混ジヤスイ字體ヂヤニ依テ寫シ誤ニ相違ナイヂヤ
今ニモヨイ古鈔本ガ世ニアラハレ出タナラバ必サヤウニ有ルベキ
コデゴザラウサテ左様ニ心得ナホシテあまずしてゐゆく
春をたちあらば今年ばかりの秋やどりかるらなむトイフ
シテ見レバ歌ノ意モヨウ聞エマスデゴザル扨又續後拾遺集
十七巻雑下權中納言公雄卿ノ哥ニ空よかくまうきつをた

なかきぬるき世をいとひて後呼あかきさす（なむ）ト見エテ
ムガ是モ加ト引ト字体ガ近イ故ニ誤字デムコノ歌ヲ本
居翁モ詞の玉緒六ノ巻ニ論ゼラレテイハレタコトバニ此歌上ヨ
ぞといひて志らなんと移るべきを、ぞととぢめたるはおそくした
とひ上の句は、なくてもなかりし志らなんといふべきをかくあらず
もしいまで世をいとひもぬさきまに事をおしたとりつる意なら
バしりなんとの意にもしは加は団を写し誤まりやトイハレ
マレタゲヤ又義門法師モ玉乃緒掃分巻四ニ其の落句ハうつ
なくおもひしりなんの写誤なるべしトイハレテアルゲヤ此
テカヤウニ弁別スルウヘハ誂ノなむ又願ノ（加なむトモ）ニハ〔で〕〔や〕〔う〕〔の〕（留）
〔何〕〔何〕（重軽）〔ぞ〕〔が〕〔が〕〔の〕（重軽軽重）等ノ継ハナクテ〔も〕〔も〕〔の〕〔後〕（静同同同）

等ノ繋辞（ムスビコトバ）ナルコトヲヨクノ々合点セラル丶ガヨロシイ
催馬楽妹之門伊毛可加度世奈可加止由支須支可称天也和可由可波
比知可左乃比知可左乃安女毛也不良奈牟云々トアル此文字ハ字アヒ
ナレバサマダゲナレ此歌ハ萬葉巻十一妹が門ゆきすぎかねつひさかたの雨も（なむ）
もふらぬかそをよしにせむトアルヲ土代トシタ歌ヂヤコノ意ハ雨もふらなむ
ト心得テヨイコトヂヤツイデヤ文字ハ字アヒト甲スノヂヤ先ヅ催馬楽ニハコノ
字アヒガ多クゴザルホドニ見合セテサトラル丶ガヨロシイ但シ一本ニハ假字ガ
キニテ雨もふらなんトムヂヤ扨ハ殊更論モナイコトヂヤ　此一段本上層
ニアクレヲ挟キヲイトヒテノコ丶ニ記ス為ヂ
サテモ爰ニ採出タル貫之集 寳凮集 續後拾遺集等ナル
三首ノ歌ヂヤガ其歌ニイサヽカ誤字ガ有リテしりなむヲ
しらなむト書タガヘやとりつらなむヲやどやうらなむト書タガヘ
タバカリデ其歌ノ意モ聞ユルト聞エヌトノケヂメガアルコトデ実
ニ言霊ノ幸フ國デ誂（アツラヘ）ノなむ一階ノ辞 徃（イニシヘ）ノなむ二階ノ辞ト上代ヨリ
方今（イマ）ニイタルマデ更ニクカハルコトハナイコトデムサルヲ辞格考

ニ上古(イニシヘ)ハ右ニイフ二ツノ「なむ」ハ混ジテ用フタモノヂヤナドイフ
タハ腹立シイヿデ厶只上古ハ「なむ」トイヒ萬葉集ヨリ「なむ」
ト「む」ヲ添テモイフヿニナリソメ古今集ヨリ已来ハ「なむ」トノミ
イヒテ訛(ヨコナマリ)トスルコトハ殊更古調ヲマネブヿトナリテ常ハ「なむ」
トイフヿニナリキタノヂヤコレハ辞(テニヲハ)ノ沿革トイフモノヂヤ上古
ハ哉(カモ)トノミイヒシヲ後ニハ哉(カナ)トノミイヘド又古調ニイハムトスレ
バ後世ノ人モ哉(カモ)トイフト專(モハラ)オナジヿデ厶カヘス〳〵モ上古
ハミダリナルヲ後世ニナリテ規矩ヲサダメタヿヂヤナド、

オロソカニハ思フマジキヿデ厶
サテ只今迄ハ「なむ」ノ論ヲナガ〳〵トイタシタガ是ヨリハ又「む」

ノ論談ヲイタシマシヤウ先「む」トイフ辞(テニヲハ)ガ三ツ有マス第一ガ
コヽノ「む」デ是ヲ将然言ヲ受ル「む」トイヒマス其二ガ五階ノ
「む」ヂヤ是ヲ已然言ヲ受ル「む」トイヒマス其三ハ「む」ト云バ指
辞ノ「む」ヂヤガ此「む」ハ皆清音ナルヿハ勿論ナレド「む」ト文字
ノ下ヘツケテイフ時ハ「む」「む」ト濁音ニ古今オシナベテ左様ニイ
ヒナラハシテ厶ヂヤサテ此三ツヂヤガ「む」「む」ノ事ハ指辞(サシテニヲハ)ヂヤ
ニ依テ是ハ草枕ノ講釈ノ時申マシヤウ又已然言ノ「む」ハ
五階ノ講釈ノ時申マシヤウ先今晩ハ一階ノ「む」ヲドナタニ
モ會得セラルヽヤウニ俗意カラ例ノ通リ申マシヤウあゆひ鈔
巻二ニコヽノ将然言ヲ受ル「む」ヲ釈シテ「らならば」「くらば」なども
いふ又状の往を兼たると同じく「なら」などもいふ此トアリマス

ガカ様ニサマゾ〳〵ノヿヲイヒテハ一向ニヤクニタチマセヌヂヤ
第一初学ノ輩ハ数ガ多イトマドヒマスヂヤ且又ヲカレイ
ヿハ[らなくば]ト解レタ詞ノ下ヘ字ガ附テアルヂヤガ是デハ
字ヲ解レタノヂヤナイデゴザヤハリ字ハ本ノトホリ字デ
居リマスヂヤコレデハ枡オトシトイフ物デ鼠ヲトラントシタ
者ノ其鼠ハ逃テシマウタノニ取オサヘタツモリデ枡ヲシレカト
オサヘテ居ルヤウナモノヂヤ是ハワルリチヂヤガ声ガアツル
俗意ハ[ウナラ]トアテマス是デ古今ヲ貫通イタシマスヂヤ
サテモヒトツ心得オカネバナラヌヿガゴザ此字ハ連続ノミデ
断止トイフヿハカツテナイヂヤ躰言ヘモ用言ヘモ共ニツヾ
キマスヿヂヤ夫故ニ結辞ニハナラヌデゴザヨウ會得シレメ

サレシカルヲ源氏物語須磨ニ源氏ノ君ノ詞ニこそかくおもひ
かけぬつみにあたり侍るもおもふ給へあはする事の一ふし
になむそらおそろしう侍るをしげなき身はなきになし
ても宮（春宮）乃御世にだにことなくおはしまさ字トアル類ハ
イクラモゴザガ字ト受テ継出シタルナレバ断止㋜トモイフ
ベキヤウヂヤガ左様デハナイデゴザ是ハ意ヲ云外ヘイヒノコ
ス格デ春宮の御世にだにことなくおはしまさば我身
ハ（イカニナルモ我身ハヨシ）ドウナリユクトモヨイト云フ意ヲフクメテシカウシテ字ト
受タルノヂヤ心得メサレ
再云云ヒノコス字ノ下ヘハ必ズ[何]ノ類ノ辞ガツクガ定例デ
ゴ源氏夕顔思ひてとのゐへまゐらでとらあやまりて少将もえん

つけてわきなりなりとおもひあきせバ（イカナラム）よりとて
罪ゆるしてむとおふゆんあるぞあいなきりける此ノ如キ
塩梅ザヤ

（か）

四段活用む（ノ）徴

允恭紀　阿摩儾霧箇蟹惋等賣異哆儺伽麼いさなっむ辭臂等資利奴陪瀰幡舍能夜摩能波刀能資哆儺企邇奈句

（か）

神樂歌　早歌　谷加良由加波ゆまかふゆこのむ辭遨加良由加武遨加良由加波をとうらゆこのむ辭多介加良由加武

（か）

拾玉集　二　ゆのこふる君ごすもこむ辭庭乃雪まいくら

（さ）

新羅もとでつこのむ辭つけ

正徹物語　下　但後京極摂政殿ハ三十七まて甍し給ひしが生得乃上手まてたもしまして殊勝乃そ乃どもなのそばしき八十九十までおそしまむ辭いかま重寶ごもあそばさまむむだらむとや倚星し

空穂　吹上　下　松風しのくきほさむ辭ともふ乃ふのきいろをふバまうこもそめなきむ

類従伊勢　ふく風に我身をなさむ辭玉もそぞまひまもとめていらまし身のを

萬葉　廿　安良多末能等之由伎我微理波流多多婆

万十七ニテウ　いかむなし

万十六　なよあきむ辭ほけせう苦望を以てわかろなるも珠乃なをつを

もふたく(む)字 末豆知我夜度爾宇具比須波
奈家

(た) 拾玉集 四 はづきはいくとおなきやものを(い)字 人のみ
こゝろとらせときをみ

(た) 同 六 桜いろのころもを(た)(ば)字 ぬきかへし山ほとゝぎ
さてなきてとがめんよ

(た) 萬葉 十五 安米都知能可未乎許比都都安礼麻
多武波夜伎萬世伎美麻多婆まつる(た)字
久流思母

(も) 万代集 七 たまはるちりをまづはる光ぞとともに(む)字 や
神のいのりこそつむ

一言法談 三ノ十ナ
もげすぞも

(も) 萬葉 三 塩干去者玉藻苅藏家妹之濱裹乞者毛
まつどこは(む)字 何矣示

(え) 袂衣 一ノ上 まづしきはなつきところせき年のななる
しら津ねに名はほふらむとつぶやきあふを母宮
ゆふ路のくるしくればをしほるも(む)字 なるのへ
まゐりあふ

(も) 枕草紙 上 ひちつきをいとすしまよひ秋の世をしと
いま(む)字 くれともしなどのあらしして

(ま) 續世継 星合 つのりまもこひしきことのなくさま(む)字 二なせ
なもそむおぼらすしとよりせ路つる二をじめ八
海ぐしそが世路て猶は皆あろよ世路ふ心な

（ま）（ま）（ら）（ら）（ら）

そでし

落久保 二 からころもきてみむするのつましさをつま

(む)字ウ 袖ぞほころびぬべき

世諺問答 屠蘇の条 大つごもりまつりのうまひとしてこれ

をのまの(む)字ウ そのとしやくをすゐおもふまじき

といつま

古事記 上 阿遠夜麻邇比賀迦久良婆 あを山に日がかく

くら(む)字ウ 奴婆多麻能用波伊傳那牟

萬葉 十 玉手次不懸時無吾恋此具礼志零者 志

ぐましふら(む)字ウ 沾乍毛将行

吉野拾遺 上 そはかなる丹生のやしろにほでちのしいの

（ら）（ら）（き）

ら(ば)字ウ さまよ五月雨のそら

続詞花 戯咲 あやしくも花のあるじはふせるかなをら(む)字ウ

とがむる人やあるとて

砂石集 七 ふら(む)ふきふらばふらでふらでとてぬ

までゆくべき袖ならばこそ

一段活用むノ徴

萬葉 十一 四十九丁ウ くれなゐのこぞめのきぬを下にき(む)人の

みらくににほひいでむかも

萬葉ニ　吾聞之耳尓好似こゞのまゝしみゝよくに
（む）葦若末乃足痛吾勢勤多扶倍思
聽聞ノ中ヨリ一人ガイハクよく似ヲトイヘル切ノ意ハ會得イタレタデムガ此歌ノ結句多扶倍思トイヘルハ何ナル意ニテ候ガ答テイハクソモ〳〵たぶトイフ詞ハ波行四段ノ活用ニテたばむ　たび　たぶ　たべトイフ活用マスヂヤ扨其語意ハ給まふトイフ詞ト同意ヂヤニ依テたまふトイフトコロヲたぶトモイヒマス則コノたぶハたまふニテ勤給ベシトイフ意デム

ツイデヂヤニ依テ此詞ノ自他ノ論弁ヲイタサウたまふモたぶモ前條ニ申ス通リ四段ノ活用ヂヤ又たまふるトたぶるハ下二段ノ活用デムサ是ガ自他ノワカレヂヤサレドコヽニヨウ心意ネバナラヌコトガム　四段たまふ　四段たぶハ敬語デ貴ヲ敬スルハ勿論下ザマヨリ上ヘ物申スニモ物奉ルニモ何クレノ所為ヲ御覧ニイルヽニモ皆敬語ニイヒナラハシテ上代ハ皆四段活用デムサレバ自ノウヘヲモ敬語ニイフコトガイクラモムガ是ハ全躰上ヲ敬ンガ為ニイフノヂヤ大祓詞ニ八百萬神等乎神集集給比神議議給氐云々トアルハ高天原ニテ八百萬ノ神ヲ神漏岐神漏美ノ神ノ御詞ヲ以テ集給フナレバアナタニツケテ敬フナリ又同條ノ詞ニ六月晦日夕日之降乃大祓尓祓給比清給事乎諸

大和物語下新注本
ふゆつき山ふきそて
ふびよもそれみせ
けるをば

聞食止宜(キコシメセトノル)マタ出雲国造神賀詞ニ朝日能豊栄登(アサヒノトヨサカノボリ)ニ伊
波比乃返事能神賀吉詞奏賜登(イハヒノカヘリゴトノカムホギノヨゴトマヲシタマハク)波久奏(マヲス)ナドアル給ハ
皆自(ミヅカラ)ノウヘニツケテイヘルナリサレバ上代ハアナタヘツケテモ労(イタハ)
ヘツケテモ敬語ニ云レタヨク會得シナサレサルヲ給ひ給ふる
ナドト彼行中ニ段ニモ中昔已後ハ活用(ハタラキ)詞トナリマシタヂヤ
ソレモ意ハ同意ヂヤ學(マナビ)ヲ學(マナブ)ルトイヒ偲(シノビ)ヲ偲(シノブ)ルトイフト同
ジコトデム扱中昔ヨリコナ久ハ自(ミヅカラ)ニツケテイフ方ハ彼行下二段
ノ方トワカレテ思給へ思給ふる見給へ見給ふれバナドツカ
フコトトナリマシタヂヤ是ヲ心得テオカネバナラヌコトデム
サルヲ散木集下ニ西山の五節の命婦といふ琴ひきの
もとに人をたのまるべくしてたえしもしらるる道まてとき

もをとる返させ給ふとて帥大納言為ときまて返ぬいつらのまきも
は刑部卿政長乃つけぞとてゆづらましかばみちさそがら
侍もうさいもいたまふまじバトムハまもりさいもい給つまじバ
ノ誤写ニ相違ナイデムマアガ所蔵ノ古鈔本ニハたまへまじバ
トムヂヤ
猶又モヒトツイハネバナラヌコガム貴人ヨリ物ヲ下ダサ
ル、ヲ給るトモ給むるトモイフヂヤサレド是ハ物ヲ
受ル方ニテ申ス敬語デム物給ふナドイフハアナタヘツケ
テノ申ス詞デム
サテ前條ニ申ス通リ給まふ給ぶトモニ同意ニテヒタスラ
ノ敬語(ウヤマヒコトバ)デアツタヂヤサルヲ三代實録十三巻ニハ省院

波 殊留御意天國乃面止作粧賜歟止聞賜ニ云マヽト
ヲリマスヂヤ此頃ヨリ自ニツケテイフ方ヲバ波行下二段ノ
活用ニイヒハジメタコト思ハレマス 此ノ賜ひき賜ふト自他ノ別ヲヨク心得ナサレ 中昔已
後ハカヤウニ活用ザマガ別ニ成マレタガ其中ニモ古格ノマヽ
ニテ自ノ方ヘツケテ集たまふナドイヘルコトナキニハアラズレ左
様ニ心得オカルヽガヨロシイ
サテ又コノ詞ノ根元ハヒトツヂヤガ食物ヲ食酒ナドノム
ヲ食べ 食ぶるト下二段ノ活用デイヒマス是ハ貴キ御アタリ
ヨリ酒アルヒハ食物ナド乞申テ飲食スルガ根元テイヒハジ
メタコトデムサルヲ後世ニ至リテハホレイてヽニ飲食スルヲモ
食べ 食ぶるナドイフヤウニナリマレタモノヂヤヨク心得オカ

為当コヽノ字ノ傍仮名原書ニ知トアレド今改メツ

ネバナラヌデムマタ催馬楽酒飲左介太宇倍天トアルハ留
べてトユトドウジコトデ只引文字ヲ一字ソヘタルモノデム引文
字ヲ添テイフコトハ外ノ詞ニモ例アルコトデム

〔ひ〕

万四二十一テウ
うつせみは?らうも
毛ソえむる?子
うるは妹?たもて
よまきぬ?之図

〔み〕

桐火桶 西行ノ歌 月見むと契おきてし古への人もやこよひ袖ぬらさらむ

（み）
空穂吹上ノ下　風ふき見（む）雲乃うへをし　秋霧を山乃そこ
よりいでむとやみえし

（み）
續千載　くらべみ（む）我身乃うくやまさりなむおなど
泪乃そでのいつのまにか、

（み）
正徹物語　上　我ひとたちなきとおもをよそにみえ（む）なにも
きなみづき袖乃うつろふ

（以）

（ゐ）
萬葉　二　所由無佐太乃岡邊爾反居者かくりゐ（む）島
御橋爾誰加住舞無

（ゐ）
空穂吹上ノ上　春ながら年いくまつ万代をと君とまとゐ
（む）そのもねもをじ

（ゐ）
續千載　羇旅　ふる人乃草乃かよひぢせきもゐ（む）なるを
旅人乃なくさめりせむ

中二段活用む（ム）ノ徴

（き）
重之集　春きき（む）ともの乃とぞおもふべき花もちらぬ
ふるきせなてなむ

〔ち〕

円光大師行状繪詞 二十二

雄俊もし地獄におちば三世の諸佛妄語の
つみにおちなるべしと高聲にさけびかけ

思 念ニ思 嘆ニ思ノ
思ハ休言也

古今ふ十四
いつはりてこひむかはしぬのうけ
はなむさらぬのつらるぞ
ならぬのうみの花のつらるぞ
むなしひ

もちひむ
三代格 もちひ
よニ引ルトコル又
コヽニ引べし

〔ひ〕

萬葉 四
長歌 上略 野干玉之夜晝跡不言念二思吾身者
痩奴嘆丹師袖左倍沾奴許本名四恋
者 かくばかりもこふしとひむ 古郷爾此

〔ひ〕

萬葉 十
月期呂毛有勝益士
藤浪咲春野爾蔓葛下夜之恋者 ちつとよ
しこひむ 久雲在

〔み〕

山家集 下
いひそてうらみむいうまつらうらむおもへたろし
やくろこころを

下二段活用ゑノ徴

常陸風土記 若降恩情得再生者 ふるさといくことを

えた㊟ 奉遣御贄恒貢御膳

続日本紀 卅六 天平神護元年三月条下 其去年不熟之國今年[illegible]稔

とりあることをえ㊟ 始復徴納

三五記鷺　君よつけて心得(む)起てなり霜のつゝそ得

(む)置てなり

伊勢物語　おゝあけ(む)きりにもあなむくくこゝのみ乃

まごころなきてせなをやりつる

頼政集 下　あけ(む)とくおつしなかきむさらぶろも見

こころうる人もなうちき

新勅撰 秋上　あけ(む)きと秋乃なごりをもとめぬべしかゝふ

く月みをしきのみうき

曽丹集　ぬるをふり今しき哉まさりしおまり

たけ(む)見えまをせさし櫂乃なれ

年中行事哥合 宗久　元きまけ(む)をうやまたちしあら駒みを

雄略紀　くちきせ(む)

(せ)

なきぬ袖のおどろきやせむ

五社百首序　文治五年よりおもひたちてよみつゝね侍り

しかどよ住吉乃社賀茂などまでもまゐらせ

せでやみとおもひ文太神宮にまゐらせ(む)とて

五社乃百首をそてよみそへて

(せ)

拾遺　引よせ(む)とぞ三六ふらで春駒乃つなぎきす

るぞなきころとさらく

(せ)

月詣 夏　待つ人にけまてきろせ(む)かとくおすす一こゑる

うとうきしめらまし

(て)

萬葉 九　長哥 上略　毎見恋者鎌益色二山上復有山者いろ

よいで(む)一可知美

万葉六 廿七丁
まての宮 やまとしても

（て）
月詣序 ゑがくれむ人いつゞらまなしまて(む)又云々
てれぶるだらうぞ

（ね）
萬葉 三 在京師荒有家爾一宿者 ひとよね(む)益旅而
可辛苦

（ね）
新古今 羇旅 我ならでまをうつ(ね)(む)たのまを舟人もなぎさ
まろあとこそくつよ

（ね）
伊勢物語 類従 秋乃夜ちよをひとよになぞらへてやちよし

（へ）
源氏須磨 ね(む)やあくよしもあらむ
とのゐすがたをうつて出いるをつれなふるも心
おそろ年月へ(む)かくる人とも近しも有まて
でやはきちらむるで

（へ）
続詞花 恋一 日数へ(む)いふをせよとの我恋のきのふまけふ
いますまふるゝらむ

（へ）
源氏総角 心よりあまなごらへ(む)すとしおも色のどかにて
すゞ近む

（へ）
新古今 雑下 なのごらへ(む)まことのこゝろや志のぞきむろ
しとてしせぞ人は恋しき

（め）
狭衣 三 あくがるゝてこゝがたまし色をつりなむあとふあ

たまもすなどるめ(むね)

日本後紀 延暦十四年之条 以邇之弊能能那何浮流彌知阿良

多米波 あらため(むね) 阿良多麻良武世能

那賀浮流彌知

續日本後紀 嘉祥九年之条 恐波不善事乃若其事乎推究波 おしきため(むね)

多有无事乎

草根集 四 宿いでゝおほくの梅が香をとしめ(むね)あくろ

袖と花もたのまじ

萬葉 四 賀是許面影耳所念者 おもかげのみぞおもほ

匠(むね)何如將為人目繁而

萬葉 九 辭嬬見之然手師繩乎將解八方絶者 と匠

大和物語下 めしよせさせたまひ 匠(国)やてんや

古今 あら衣うちきて(むね)…

上宮帝説 (むね) 繼十方直ニ梱左右ニ

伊加留我乃止美能乎何波乃多叡波 多

匠(むね)許曾和何於保支美乃弥奈和須

良叡米

草根集 一 法乃師乃ちぎりをむすびし都とて於代

むさの匠(むね)寺もさの匠む

挟衣 一ノ上 きつてかくるしとおもきまま(むね)さらにいたく

と栓それらうきを

催馬楽 青馬 安乎乃未波奈礼波 あをのまをなまま(むね) さを

止利川奈介左乎乃万都奈礼波

のまをなまき(むね)止利川奈介

太の部ハ物を引ふ意乃まて指辞のとハ哀ん切で連用ちうつゞく

（き）（ゑ）

大和物語下 いなや「きじ」人よならせるから衣我身よ
ふれ(む)ろき香もぞつく「」

古今 秋下 うゑしうゑ(む)秋なき時やさかざらむ
花こそちらめねさへかれめや

加行変格む之徵

萬葉 十六 奥嶋鴨云船之還来者 かもとふ船乃かへり
こ(む)也良乃埼守早告許曾

皆旨日コノ連字 本ニ脱ス

増補 うちわたす枝の 桜も一枝かざす 本よまする人のこう (む)いをせむ

（こ）（こ）（こ）（こ）（こ）

古今 夏 五月こ(む)なきもふりなんほとゝぎす
まだしきほどのこゑをきかばや

能宜集 山ざくらちよのちぎりくちせじといろさき
まちこ(む)君が見よこ(む)

日本紀 清寧 於弥能姑能耶賦能之摩柯枳始陁騰余
瀰那為我與釐據魔 なゐがよりこ(む)
耶黎夢之磨柯枳

千載 雑上 たのめくもすこしも世にめぐりこ(む)おも
うかりきる山乃はの月

寂蓮集 下帰 まてしもこ(む)まつべきものをこそかへる雁秋
までやいとろちるかあて

一万十二
つねとのあまるの
こころもうらるゝ世(む)
みえしかあやしき
みゆききぬ

風雅旅
ふるさとは恋しくも
ねまちせ(む)こず
うきねをもおもひ
やるらむ

(世)

一上法性
心もし 散漫せ

(世)

(世)

佐行変格之ノ徴

住吉物語 下 海くもこ正しくつゝきく人なきが心合せさうとて
神仏ものろひ給をむすハこゝろためもいと
おそろしきことなり住よしにおきせ(む)させ
おそやさるまじうこれハつ見に何見きも正給
きもむきまいてろやさしくおぼしめせとの
たまへば

枕草紙 上 九月九日雨をつとめてふやみぬれど露ハなほく
いそくぐり
もりてやともせ(む)ふうおちぬめくてことゆてる
いとをかし

続後撰 雑中 君うくて山乃まかうくすまひせ(む)ひとを

(世)

(世)

(世)

源氏玉鬘 うきよはものやなまかむ
いふなるつゝきこえさせてなる世になきてらふ
らむこそうちやすまうく成たまつりとも我
をあいまでとおもふさがおまきてらむ雨みさをそへ
給へもし世にあまきせ(む)許みぬ母給へと

正像末和讃 弥陀仏ハ自然のやうをしらせむれうなり
この道理をこころえつるのちハこの自然のをハ
つねにさたすべきにあらざるなりつねに自然
をさたせ(む)義なきを義とすといふなる
義のあるべし

狭衣 三上 夢かゝる人は見うりに時にてても続つけ侍りて

古今序 [illegible]

(廿)

おほせ(む)いつのまでとかうらみし おほせむトハ おほせざラウラトアルベシ

ト解セシハ おほせばトアルベシ

今昔物語ノ笠置寺ノ条 若シ此ノ示ニ靡セ(む) 山神等我ニ令ヲ

助ケ給ヘ然ラバ此ノ巌ニ弥勒像ヲ刻ミ

奉らむとちかひてかきあへる

(な)

奈行変格む(ぬ)ノ徴

古事記上 伊刀古夜能伊毛能美許等牟良登理能

和賀牟礼伊那婆 むらどりのわがむれいな

(む) 比氣登理能和賀比氣伊那婆 ひけど

りのわがひけいな(む) 那迦士登那波伊

布登母

(な)

萬葉 十 出去者 いでていな(む) 天飛鴈之可泣美且今

日且今日云二年曾経去家類

(な)

萬葉 三 長歌上略 荒狹乃山矣冬木成時敷時跡不見而

往者 ともでていな(む) 益而恋石見

(な)

續詞花 恋上 あかぬをいそぐよゐをいでてなまし な(む) これや

恋とこの君がきこゆまし

(な)

拾遺 むくふまきたな(む) 何うハさもあらばあれ

いきてかひなき物おもふ身ハ

(な)

千載 十二 こちしな(む)ことをゆるしてたのむいでよ

さこそハつらきこころなりとも

聴聞ノ中ヨリアル一人ガイハク むノ意ハ聞エマシタガ こそ

トイヒテ其詞ハ何處ニテ結タル哥ニテ候ゾ答此詞ハ
なりトイヘル所ニテ断タリ此切ハ止ノ意ニテさこそき
つらきこゝろニアルなるまじトイフベキノヂヤ又コヽノ切ハ断止云ヲ
受ル切ヂヤホドニ切トシテミダリ上ヲ解スベキ切デム此切ヘツヾケムガ
為ニなきをヲなりニイヒスベラカシテさそつらきこゝろ
なりともニアリ ミダリカ上モトイヒタモノヂヤ詞の玉の緒五ノ巻ニ此哥ヲ
イダシテ此詞ハなりもニテ結ブ格ヂヤトイハレタノハアカ
ヌコトヂヤ歌ノ意ヲヨクヽヽ味ヒミテサトラルヽガヨロシイス
べテ玉の緒ナ五ノ巻きなきモノ結ノ論定ハ多クヒガコトデム
猶ラハシクハ草枕ノ講談ノ中申サウ

良行四段一格むノ徴

(ら) (ら) (ら) (ら) (ら)

万代集 八 ちたびまでまうでしのぶ志るしたのらむ ウケテ
まなぶる道ノ冥加あらせ給へ 此あらせハ前条ノ通リ令散給ヘト云ナリ
義ヂヤ心得メサレ
住吉物語 命あらむ ウケテ めぐりやあふと津の国のなにはまで
いく田ろも見すはてますかや
萬葉 九 大橋之頭爾家有者つめよいへあらむ ウケテ 心悲
久獨去兒爾屋戸借申尾
續紀宣命 猶心爭改天直久淨久在波 するくきよく
たのらむ ウケテ 天地毛憎麻波受君毛捨給天

（ら）

落久保 二ノ下 牛よるもげに侍らむ 近きほどのなかり侍らじ
かくいふはひきやりて此御車をたてさせて
いつぞ

（ら）

空穂 上 楼ノ上ノ いまもなづさふ人『なども近きをむなは
『ともかくもいづるを侍らむ なること『とおもふ

（ら）

狭衣 一ノ上 なぞその声のきこえむことゝきはむ
べきなりとの給ふを聞えなかりければ人ごとに侍
らむ たどるくもつのりまつるべくこそ

四段五ノ音ヲ第ウツル格ヲノ徴

（ら）

落久保 二 佛これいけらむ あきやらにし給へ

（ら）

拾遺 春 手もかくてもあやなくも花をもちむつるい

萬葉 一ノ十二丁
給ひつらむ
万十八 四十四丁ウ
待ちこせらむ
万十八 三十二丁
おもへつらむ

（ら）

続拾遺 恋二 けらむ 君ちの春もたそあき
おもはばなきをしつれなき人も いけらむ
夜のこのみをこのつり

（ら）

室穂 祭ノ上 しいで給へつらむ いえもうしこまりも近むと
なまこく人にはえせし『となむおもふ『との給ふ
ほどよ

しくしき 二ノ音ヲ第ウツル格ヲノ徴

（ら）

催馬楽 我門 上 和可奈乎之良末久保之加良波 しらまく
ほしうらむ 美曾乃不乃安世女乃己保利
乃大領乃末名年春女止以戸

（ら）

続詞花 雑中 つらかるらむ人にくらむなるの枕のはして

ようこ(む)とほこ(む)

からとつ〜なり論むべし　⑤をまぶ〜ろし〜　又〜〜

〔5〕　〔5〕

一夜ねみきと

萬葉 四　遊有者和備而毛有乎とほら(む)ろむても

たらむを　里近有常聞何不見也為便奈

沙

蜻蛉日記 下　菖蒲やこのまよ志ろしふうら(む)たゞ一云

ようちもとけなむ

くしきさくしき　一格をノ徴

常陸風土記　許智多鶏波　こちこけ(む)　乎婆頭勢夜

麻能伊波歸爾母為弖許母郎奈牟

奈古非叙和支母　郎ハ利ノ誤なるべし

雄畧紀　阿挖羅斯枳偉儺謎能陁倶瀰柯該志

須弥儺皤旨我那稚皆麽　志つのなけ(む)

挖例柯々該武豫ー婀挖羅須瀰儺皤

サテ是迄ニテ〔む〕〔なむ〕〔む〕ノ徴ハ不残会得セラレタ〔ル〕

デムラウカラ此講釈ハ是迄ニ致シテオイテ一階ノ〔む〕ノ

講釈ヲ申サウ夫ニツケテ心得オカネバナラヌコガムマヅ

コノ〔む〕文字ヲ下知ノ〔む〕トモイヒ又希求ノ〔む〕トモイヒテ

又何ガ相当ナ名目ヂヤトイフニ希求トイフ方ガ相当セ

ル名目デム何故希求トイフグ相当ヂヤトイフニコノ如ハ
下ニ對シテイフ辭デハゴザラス上ヘ對シテモイフ辭ヂ
ヤ故ニヒトスヂニ下知トハイハレス辭デム全躰コノ辭ガ
希求九分 下知一分 ノ意デアルヲ古クヨリ下知ト名目ツケタル故後
人モ下知ノコヽロ持ニノミ解ナシテ歌ヲモ文ヲモ其俗意
ニ心得ラルヽハ辭ヲ隔テ痒ヲ搔クトモイフベキモノデム
此希求トイフ名目ハ義門法師ノツケラレタ名目ヂヤガ是ハ至極ナ名目
デムサリナガラ天皇ノ大御言詔告神宜佛語等且又歳合ヲ申シワケメス
時希求ノ其ニナモトハ天皇ノ大御告 回 ト解セネバナラヌヂヤ是カ下
ナレバヨリ心ヴベシ
知ガ一分アルト申スヿチヤ心得ラレサレ
一ノ音ヨリ希求ノ如ヲ受ルハ四段活用奈行変格活用
良行四段一格活用四段の五の音よりうくる格活用くしきの
二の音よりうくる格活用くしき活用

くしき一格活用くしき二格活用等ノ九種ニハ無イヂ
ヤ夫故ニ此九種ハ除テ一段活用中二段活用下二段活用
加行変格活用左行変格活用等ノ徴且又俗意ヲモ弁
ジマシヤウ先ヅあゆひ抄巻ノ一ニ如里ム同トムガ是デハ
論モナク譯モノラストイフモノヂヤソレデハアカヌヿヂヤ
予ガアツル俗意ハ［テクモレ］トアテマス是デ古今貫通イ
タシマス 辭ノ同
扨モヒトツ心得オカネバナラヌヿガム此如ハ［こ］［も］［の］［徒］。
等ノ結辭デム其餘ノ指辭ノ結ニハナリマセヌヂヤ心得
オキメサレ又右等ノ結辭トナリテ断止ノミデ連續ヿ
モサラニナイヂヤ是モ心得オキメサレ

（き）（き）（き）（は）

万十五
わぎもこがしたにもきよとおくりたる衣のひもをあれとかめやも

天武紀下十二年条
衣服者有襴無襴及結紐長紐任意服之　おもふまにまに
きよ

一段活用よノ徴

後撰 羈旅 山里の草葉の露はしげからむみのしろころもぬはずともきよ

雅亮装束抄下 二のやく人はなすびしぬきぬをたのまでもろすいろまでもきませてきるつねのこそあれ五位まではなだふゆあさぎをき
きよ

拾遺 人まねにむすめのとふきをろむかまてやくすみぞめのころもきよ君

（ひ）

古事記中 又如此鹽之盈乾盈乾 みちひよ

（み）

忠こそ
よる昼おもひ侍りし人のつまとなるまで我おそりまたこれをころえ（よ）さうさあやすあり（も）みよなど

拾遺愚草中 けふそのむころのそらいをてらしみよ

（み）武烈紀 ……

（み）後撰集 ……

（み）……

（み）宇治拾遺 十五 ……

（み）……

みもちそ川りやどる月ゞげ

古今 春上 かすか野のとぶ火乃野守いでて（よ）今いくか有てわかなつみてむ

新撰六帖 なかむればこの山の端にみえもせで のへよ方をまとも見ん（よ）

和泉式部集 こゝろみ（よ）きみがこゝろもこゝろみ詠心 さ都へときてさそふ（よ）

続後撰 賀 二条よりろふをまつといひのるともひきし きかどもくらべてもこ（よ）

古今 離別 近そしらぬ今ちゝろこ（よ）今ならバ我やすて くや問ぬて

（み）宇治拾遺 ……

（ゐ）……

（ゐ）後拾遺 ……

宇治拾遺 五 府生いふやうちのこなたにそ千万乃ちいぞ くあるともいまみ（よ）といひて

源平盛衰記 武者をぞ匠射で一されバ拙矢まちそあれ とおもほいなんまバ只以（よ）といふものあり し

続紀宣命 先仁掛畏岐良比賜天遠祖我兄鑑焼乎皇 位仁定止云天官印乎押天天下乃諸國仁 散志知復云他令乃勅乎差用與いま 乃ことのりをうけもちゐ（よ） 先仁詐天勅止 称天在事乎差用流己 不得止云天諸人乃 心乎惑亂

落久保一
あきつきみハとく
なき(よ)まぐくら
なむすきのつむ

（ゐ）法然上人行狀繪詞二十二　内外明闇をえらばずたゞ眞實をも
ちゐ(よ)　内典ノ教ヘハ則チ佛語ナリ

中二段活用よノ徴

（き）新和歌集八哀傷　なきものゝこゝろみにしのぶさくら花ちらでまれ(く)
さそ(よ)春の山風

（き）神樂　酒殿哥　さゝなみハうけろとなきぬなりちき(よ)ちき(よ)
けふかとよこのひとよづまくもちそ見えき

（ち）古今　天津風雲のかよひ路ふきとぢ(よ)をとめのす
がたしばしとゞめむ

（ち）軍防令第十七　凡邊城門晩開早閉（とくとぢ(よ)）

（ひ）類聚三代格一　應令伊勢太神宮司檢納神郡田租事　上略　其當國神稅ハ毎

東京ナドニテ詞ノ下ニ神トニアヲツヘ北越ノ人ナドモ下ノのしトニヒ尊大ナル人ノ如ヲトニテナドハ皆他人ヲ指テ尊ミイフ詞也ぞ
でありしナトニテ知シ但シコレハ割トニテ字ニ出せん詞ヨリ出タル也

（ひ）年ニ儲置若不得已必可用先申後用ヨ（やまつ
まちしてのちもちひ(よ)　もちひよハ轉云ノ活用ヂヤ

（ひ）空穗藏開中　みハ酒ちそまやせ此樽ハ酒をゐきてハなに
せむとのたまひてゐままふ西宮まうしぞなど
なかへどさうごほうくさらバ志ひ(よ)や

堀川百首　蕨　尋　むさし野ををちひ(よ)なはふ乃蕨を牢
のゆかりとおもへど　こゝろハハコトナスとハふと同義ヂヤ　をゐらバト云ハ凡ノ其下ノ詞ニスガリ
テ解スベキ詞ヂヤ下ニおひよなトアラバ生フルナラバ生ヒテタモトト解スル定例ヂヤ

古今　春下　ふく風をなきてうらみ(よ)うぐひすハ我やハ
花に手だにふれてる

壬生二品集上　しづの尾のあのが春日もくまさぬゆふつけ

ゐるよなきてらゝみ〔よ〕テニヲハ

〔い〕

空穂 藤開上 木かくてさびしきうけに客人のまとゐする
までおはい〔よ〕テニヲハ もめ松

〔り〕

貫之集 冬ならに山にかくれてをぢに雪ふるけ
てくだり〔よ〕テニヲハ とぞおもふ

群書一覧ニモアリ
枕草紙終ニ見エ

〔え〕 これには何を書かまし うへの御前には史記といふ文をなんかゝせ給へるとの給はせしを枕にこそはべらめと申ししかばさらば〔よ〕とてたまはせしを

下二段活用よノ徴

童蒙抄一 天 ちゝみやうにうつりきまて溝帝にまうでけるをせ

え〔よ〕

伊八卯下三二
同レ此ノ人ノ
名ノ下ニ刈リ
後世ハ見当ヌ
奈良ノ朝頃
マデ也

（け）続紀宣命　佛（ホトケ）毛（モ）經（キヤウ）仁（ニ）勅（ノリタマ）久（ク）國（クニ）王（ワウ）伊（イ）王（ワウ）位（ヰ）仁（ニ）坐（マス）時（トキ）方（ハ）菩（ボ）薩（サツ）乃

浄（ジヤウ）戒（カイ）乎（ヲ）受（ウケ）止（ヨ）うけ（よ）終と勅（ノリ）天（テ）在（アリ）

（け）落久保　一　篋（オホミカガ）毛とつまうけ（よ）終

（け）蜻蛉日記　上ノ下　火ともしつけ（よ）終

（け）古今　羇旅　わたのはら八十嶋かけてこぎいでぬと人にはつげ

（よ）海士乃釣舟

万四
天地乃神にぬさおけ
（よ）草まくら旅
斎ひ天ゆく家に
いりてまて

（け）玉葉　旅　あさまとて志らぬ山路ハおくまきと人にハつげ

（よ）ありあけ乃月

（け）雅亮装束抄　下　まひ人装束其条下　そろおちひぐりの袖乃ぬをあろう

へ乃うちまあるをもとおつくうしろのさおりよ

りいでのなかのよりひきとめしてさげ（よ）終　まくハ

（せ）後拾遺　羇旅　あさぢりの毛とよりどころよりきせ（よ）終

さらにちぶ佐里乃石おく都なるみやこのをを

（せ）源氏夕良　まきよきこのせ（よ）

めせむ御ちうくしておきくきバ志そくさせて

まゐき随身もつるうちしてこ近むちはづくき

とおふせ（よ）終

（せ）詞花集　夏　こそしぐるまでぞ初声を子規世にハふるさで我に

きこのせ（よ）

（せ）草根集　秋述懐　世ぬうせ（よ）世よもなつしまとどまらぬ秋

乃木乃葉を云のまにまにて

（せ）新後撰　春下　梓弓をる乃山風こころあらバちらさで花乃あ

ゞせ姑往本
女乃あたにかそ
らけとらせ(よ)さ
らぞのまむとひ
けまだかそらけと
らせてしてま
(廿)

宇治拾遺三
あらまほ海に跡
いくとても人にき
たへめみ(よ)ね
くをせ(よ)なし
いひあまんまぶ
考證ハくだすー
(て)

万十
こゝの宮のことこそぶまが
なりなくしころ
花りまきぞで(よ)あ
まる」すむ
(て)

りろ志らせ(よ)

源氏夕顔 こゝろをうんでみる出来てうちまねぐしろ
き扇乃いくろだのしたるをふ也に拾きてまゐ
らせ(よ) ねもまされまげなめる花をとてとらせ
それバ

風雅集 神祇 神路山内外乃宮乃ミやはしら身ハくちぬとも
すゑをバこそて(よ)

正徹物語 上人乃こゝろぶ歎をこすまうなりこち乃
まくしやと思ふをハきゝすまぬなり此
あくしやともおもふ心をこすまをてたら
バただ見えざるやうなる人乃やうなるべし

新古今
郭公名に一聲ハ
おもひぞで(よ)
おいそ乃もりの
よるの声まし
を

(て) (ね) (ね) (ね)

まけまでならバけまでもて(よ)

拾遺愚草下 ふる程乃時雨ほつけてをつて(よ) ひとうてなら
ずちるひやることハ

源氏横笛 世をこの道いるまなむ道ハおくるともおなじ
所を君も尋ね(よ)

寂然法師集 いろせむあと乃なを也ハとをぬともこの道
しく人乃ゆくへこゝづね(よ)

平家物語 巌名勝志十五 主馬八郎左衛門盛久と申者京都
にかくれてゐるを搦捕て只今関東遠に御
て由井ノ濱にて首をきね(よ)『とて参して

廿

（ね）万十 十四丁
足引乃山田つくる
こひてきともる
ちぢよまへ(よ)
もろとしるまゝ(よ)

（へ）忠社
あるゝ毛ハとと
ちゝ造魏千五百
貫とゝうへ(よ)

（へ）新古今 秋下
ちらでまるか
千とせの涯
もいろそへ(よ)

（へ）…やゝ乃山の
嵐乃梢瓜

六帖 ゑも うは玉乃ねくら乃下畑そけてね(よ)我ゐゐ
ましゑハ暮までもこふむ

挾衣 早き瀬乃そこ乃もくずと年ふきとたふぎ
の風よぬきもつゝ(よ)

拾遺愚草 下 道乃へ乃野原乃柳したもえぬあはれ(よ)云
けきのけふりくらべ(よ)

新古今 羇旅 我ぞくまをきづまバあまちふ人を
なぎさ乃あとゝこそ(よ)

山家集 下 月乃夜や友とをなりていづくまもひとしらさ
らむすまうをし(よ)

萬葉 于廻奇志麻乃夜未等能久爾安佐良氣伎

（め）落久保 一ノ下
まこの君につきく
おかしきぐさめ
(よ)

（め）山家下
寺つくるこの我
谷まつちゝ
(よ)君そうゝ
こそ山もつくらめ

（近）一言法談
敬白身上人
念佛よ余味あふ
近(よ)

名乃爾於布等毛能乎己許呂都止米與 こて
ろつとめ(よ)

古今 離別 あふ坂乃せきしまさしきものならバたのうず
こふうて天をとどめ(よ)

続紀宣命 又云久過知於改與 うるらずあらこめ(よ)

伊勢物語 あきくらすこゝろのやをよまどひよき暮らつて
とハきてのひさぐめ(よ)

源氏橋姫 をまあしくまゐつま侍よれまどなおふれしく
おもふをすこしなぐさめてなむかくさふらふ
よしきこ近(よ)いくらめれまゐるうぞども
やゝ近きせむらしとのバまゐりてきこゆ

金葉 いつまでにあふとはみえ㊤まもこそはふくらつま
つらきこころなりとも
落久保 一 我につゝあさましきうけば立ちつりともわを
き㊤ろきさるるきなむ
円光大師行状 絵詞 二十二 ことひ玉王ともなり天上にもうまれ㊤
千載集 恋四 夏衣つゝもなきぞは涙のとこなき㊤うきさ
ぬよそぬ枕なりとも
正徹物語 上 うきものとおもふこころのあともなく我をわす
れ㊤君をうらみじ
源氏處女 よしなし身をかくらふともちさじかく身あるまじ
きをなきど心をやまでいかぬをとどまいる
、うき㊤今のしこはわくし春まても
続古今 恋二 我涙よしのゝ河のよしさらばいも世乃山乃中をな
なかの㊤
順次往生講式 云々多麻乃宇天奈介須万波也美多不加奈良
須須邊与也 かなくずなき㊦や安奈多宇止
同 古久良久乃美多保土介免天多幾知加比遠
和礼多乃年 波知須乃宇邊尓加奈良須須
邊与 かならずすな㊤

加行変格活用よノ徴

サテコノ加行変格ト左行変格トハ ㋙ヲ[キ]ト解シ㋝ヲ[シ]
ト解セネバナラヌコデムスベテニノ音ニ解シマスヲ変格ノ定
例ト心得ラルヽガヨロレイ 但シ是ハ希求ノ[こよ]ヲ解スルトキ
ノコヽロエゲヤ

新和歌集雑下 修行にぞ侍る母もなきこのや川よするかなる
かり衣おなせころも うらめしやたまをとるの
花とすてゆく王をおもきとくうつりにキこ

兼輔集 雑 ㋵
ひとつ世てもなにすら手すらちしの花とくめ
ふるこ㋵ゆへ乃うき云

尖夫集
よびとおきれなし
まし色何くゆく
ありきでまくむ
とふひまこ㋵

七十一番職人歌合画詞

七十一番職人歌合画詞 あこよくくもてこ㋵ キ雑

サテコヽニイフベキコガ[じ]小夜時雨トイフ書 萩原広道トカ云人ノ著ハサレタ書ヂヤ
ヤ小夜時雨トイフ書ハ人ヲ驚カムトイヘル心デムツ ニ曰ク[こ]よといふもわろし來ハ
古今集ニこてふに似たるをしもあらず秋古今集ニ
とめこのし 梅さかりなる我宿をうとくやこしとのみ
いなて下知る意なる詞なるバ[こ]よといふをハいよしへ
よハなえたトアルハイニシヘノ書ヲ見ナイ人トイフモノヂヤ
猶辨の類講義ニ[こ]㋵トイヘル所ニテモ其徴ヲアゲラク
ハレク申マシヤウ全体広道トイフ人ハ謡ノマナビヲヨクモ
セラレヌ人ト見エテアルゲヤイカニトイフニ[こ]トノミイヒテ
下知ニナル詞ト此行ヲノミ左様ニイハレタレド此行バカリヂ

小大君集
よるも乃霞めこま
しきあしたけくあ
うらぞまとむとか
らきよこ(よ)

ヤナイ下二段加行変格古行変格トモニ如ヲ添ズデモ希
求ニナル詞ヂヤ此事ハ伺乃ハ欄ニモイサヽカイハレテアルデム
悄クハレクハ後刻謹ヲアゲテ申サウホドニ図面ヲドナタ
モヨウ見テ下サレヨ

左行変格活用よノ徴

古今　みる人ハ花乃こころもまなりぬなりこけ乃たも
とよこのまさぐみせ(よ)シテタモレ
帝王貴人ナドノ云々せよ心せよナド歌ヲミニテアラシヨモ
其歌ヲ解ゲセンニハ〔ニテタモレ〕ト解スカタオダンレクテヨロシウ聞
エマスヂヤ

新古今
あきふかうかのませ(よ)
とか秋風よるびく
尾花乃末をよ
るる

コノ哥モヨクオモヘバ
シテタモレト解スカタ
マサリタリ生ガハ
いかよせよトイヘル
ハつまるまき人乃心ずら
我心ニ希れする
意なり

左行変格ハ如ヲ丸テ如ト解スベキ丁ヂヤ左様デナケレ
バ俗意ニハ適セヌデムサレバ御覧ゼヨ御覧ジマセ給ふヲ御覧
ジサセ給ふナドイフトオナジコヽロバヘデム
古今　こずゑのまも君がハ千代よそうそくしとぞ見え
あきてハおもひでよせ(よ)シテタモレ　ハ如ハ歎息ノ如ヂヤ
ツイテヂヤニ依テ申マスガ此古今ノとくめちきてハテ
とくめちきてバト法音ニヨミテ古今遠鏡ニトカレタハヨロ
シウナイヂヤ此ノ如エ文字ハノチアヒヂヤホドニ清音ニヨ
ムガヨロシイ
拾玉集ニ住よし乃神もあはきと御覧ぜ(よ)シテタモレ　三神ま
あはてちらすを乃は

井蛙抄 被進権井
宮秋子古哥を
りてあつらしき
哥を除かんの
中に三句まで
こぶる還かめづらし
じる 二句の上に
三字四字これを
けりけす 捨是
ままなせ(よ)
(廿)

吉野拾遺下
心やすく後世ねの
こもあずせよこの
とい[illegible]ばいと
う[illegible]しくて
(廿)

浮舟物語 一 おくへろうらみどもいとまれうしたゞ御よも
りさるべうらむ 二三人をこうしていとおのおて
あらむぜ(よ)紐 是ハ藻士ノ帝ガ右ニ對レテイハル、詞ヂ此物語ヲ見テサトラルルガヨロシ

盛衰記 卅九 二人夜をよすがるべきども夜すぜよすがら
て宮仕せ(よ)紐

落久保 二 あこきが伯母ノモトへやりつる文ノ詞 いそぐる侍りてなむきのふ
けふ守臣ぎりつるけふあすのほどよ清げ
ならむけらハ捨とれもとめいでねこそこまも
よき童ならバひとりふ〳〵の[illegible]人ある
やうハたいめきこ匠むあつさます捨
之世(よ)紐 コレハ四段ノ方ニ引ベキカ

[illegible]
ふてをものしてお
なせよやよ
(廿)

落開下
伸忠侍 示も
いますずし座
くちつめ[illegible]し
なそこまで御[illegible]
せむ[illegible]しれあ
くておなせよ
(廿)

し

熱田縁起 男本也歌 古許爾爾麻津礼波。岐美毛美古止麻
爾。多加比奈麻志曾麻毛利於波勢與
まもりおませ世(よ)紐

古今 物名 足引乃山へゆきを悲バ白雲乃いこの下世(よ)紐 とあ
をなのはなき

牧是進ハ希求ノ辞ノ徴且論弁ニモイタレマシレタガ是マデ
ハコタ加行変格左行変格等ノ辞ノ論談ヲイタレマレヤウ
先ヅコヽニ辞ト片假字モテ出レタルハ子細ガニツアルナヂ
ヤ其子細ハ爰ノ過去ノ辞ハ他ノ行ニテハ第二階ノ辞ナレ
ドモ加行変格左行変格等ニテハ第一階ノ辞ヂヤ牧加

行変格ハ第二階ニテモ来卬トモ又受レド左行変格ニテ
ハ来卬トハ受ヌ格デム則チ是ガ一ツノ子細ヂヤ今一ツ
ノ子細トイフハ此過去ノ卬ハ第二階ノ方ハ来卬卬ク
ト運用ク定例ヂヤサルヲ此第一階ノ卬ハ卬卬カトノミ運
用マス是ガ二ツノ子細ヂヤニヨリテ其印ニ此ノ卬ヲ仮
仮字ニイタシマシタノデム

サテ卬ノ俗意ハあゆひ抄巻ノ五卬ノ条ニ云リ [きしくの]
[し] 云こ ならいすへるをといひけるよりきのふるをといふと
ぐひ也里 [図] といふ但里子ハ [図] といふをつけよみぐりまいひて
[し] といふべき所ならずして [ぬ][つ][き] なげるなゆひよわるりて
もいつでこれならでようくあるまじき詞もおもはねバよぶが

らくかくあてらうえむ人きしくるのこころをるそすらすん
まるかでてんらべしちするいさぐ詞ろらつそ [さきごつて] るぞぶ
詞をそつてえまがまこのかず上にトイハレタハ実ニ密論ノヤウヂヤ
ガマダ辨別ガタラヌヂヤ全躰卬ヲ [図] トノミ解レテハ至テ
至テ紛ハレイナデム夫故ニ [さきごつて] トイフ詞ヲ其ウヘニ置テ
心得レバヨイトナイフ教ヘデアルケレドモ一首ノ中ニ此ノ卬ニウ
アル歌ハカヘツテ歌ノ意ガクドクドク成テ解レカネマスヂヤ夫ニ
ツイテあゆひ抄ノ説ノ趣イフテ論弁シ且俗意ヲモ弁ジマ
ヤウ此過去ノ卬ハ [ぞ][や][か][の][何] 等ノ繋トナリ又 [こそ] ノ
繋辞トナリマス辞ヂヤニ依テ其指辞ニ随テ俗意モ替ル了
ヂヤ先 [ぞ][の] [こそ] 等ノ三ツノ指辞ヲ結タル卬ハ [テアツタル]

ト解シテヨロシイ又体言ヘツヾクナモ同格ヂヤ［の］［を］［は］等
ノ指辭ヲ結タルハ［ニテアルタテアラウ］ト解シテヨロシイ其外ノ［そ］［も］等
［の］［は］［が］［の］等ノ指辭ハ更ニ結ビマセヌヂヤドナタモカ様ニ
委細ニ心得ネバナラヌ訣ヂヤニ依テあゆひ抄ノ説ガ粗イト申
スノヂヤ猶クハシクハ二階ノ講談ノ時申サウ

加行変格ノ徴

［こ］伊勢物語　君やこし（キテシマヘル）我やゆきけむ（ユキテアリタカ）おもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

［こ］隆祐集　明る日念佛聽聞にまうでよし徳大寺の許より中されて侍しまかりて聴聞し侍るよし徳大納言のもとより亭主へ［こし］おくりも御法のこゝろぞよ

［こ］後撰　ほひこし（キテシマヘル）あくるは風乃ふきまき散乃宿
もみぢ葉をちらしき錦とこそしくども時雨をそ
ふりてこそこし（キテアリタリ）

［こ］朝忠集　我宿乃梅乃匂をなくいづくは風乃ふきかくる香や
をめこし（キテアリタレ）

［こ］古事記中　須久那美迦微能加牟菩岐本岐玖流本斯登余本岐本岐母登本斯麻都理許斯　まつり

［こ］古今春下　こし（キテシマヘル）美岐叙
春乃野にわかなつまむとこし（キテシマヘル）ものをちりかふ花に道をまどひぬ

［こ］同　春乃野にすみれつまむとこし（キテシマヘル）我ぞ野を

きにこし（キテシマヘル）ふ花を風をやみ
於佐都美軒
良斯迦杼理
須流可毛
此歌ナドニテ此ノ意ヲヨク会得セテルガヨロシイ

重複

方二六十五丁
いそのかみふるくぞよ
あつさこし図よ
けくもぞあるき

なつうしを恋と揺まける

〔こ〕新宮撰歌合 なかみこ（キテ之名）れきつ浪乃浮ひ木久しくも

せぬまるぞあまうる

〔こ〕萬葉 十五 宇良未欲里許藝許之布禰乎風波夜美

こ（キテ之名）ふねを風ちやみ 於伎都美宇良尓

夜杼里須流可毛

此等ナドニテノ辺ノ意ヲヨク會得セラルヽガヨロシ

空穂廃開 下 祭 いでいるとしそをる見つる雲井まであかく乃

日をも延しこ（）哉

左行変格ノ徴

〔せ〕老若五十首歌合 橘乃白ひまつてほとゝぎす花ちらせと

萬四十下廿三丁
まそいそのかごとん
ぜし
重〔同〕ナリ心ウベシ

ハちぎ至やハせ（テ之名）

〔せ〕忠度集 ますまましころをのぞそろちむべき人かと

正子どいとひやハせ（レテ之名）

〔せ〕寂蓮法師集 家隆悦附記しくやまでつらかりける〔同〕

しさも袖をつゆぞるゝけり苔乃衣をいむ

とせしまするべし〔同〕まりさをいみたる苔

乃袖をも朽さむといまぬ根をぞせ（テ之名）

〔せ〕枕草卅 春四ノ十丁 いろきるゝいひてハなみゝねどるべしとて

疑中まで〔ロ〕なむおをせ（テ之名）

〔せ〕空穂廃開 上 落窪乃吹のぞちろちこがほまあそまり語る

我られハちいさくぞ〔ロ〕おとせ（テ之名）

笛
竹乃中より▢▢▢
聞えくるかな▢▢
ねの▢▢きさまに▢お
ち海◯▢
[廿]

夷女 御四十二
▢▢世◯▢▢て
年ごろあそび
なれ▢しところの
思ひいでられて▢ま
すれば
[廿]

水鏡上
武内乃大臣をつくし
へつかはしてをさ▢
めまつりごと▢せたて
まつらせ給ひしを
二乃武内乃▢▢▢
すて給はせ◯人乃▢
かしま申給ふく
[廿]

萬葉 十五 過大島鳴門而経再宿之後追作歌二首 トアル其歌ノ字

奈美能宇倍爾宇伎禰世之欲比うきね世◯

よひ 安杼毛倍香許己呂我奈之久伊米爾

美要都流

古今 秋上 やどりせ◯人のかたみか藤袴わすられがた

がく香ににほひて

儀州紙 三 賀陽院一宮哥合ニ能因哥ニもろがすみしが

ぬ山にゐせ◯くよあふころちするそれぞくら

ひ 時人不得意之由ヲ称云々

此哥初句ノ春霞トアルハ心得ザルイヒザマヂヤヨリ考テ見マシヤ

ウ爰ニ心得ベキヿガゴ加行変格ノ来‖左行変格ノ為‖

秋草紙四
白き紙にかいみじ
くろきてまおらせ
むとせ◯をろし
けいは▢▢きす
給ふ

落窪上
とわきよるまて
ろおきせ◯▢▢
うしとう▢給ふ

右ごげ十二才
ソえすけろけ▢かを
▢▢▢きの▢▢
夕くれのここち世◯
ふ

むかしのみ乃やつるき
の富乃はむすめの
はそらには▢せ◯
を関白殿▢▢▢し
たてのうつ給そ

徒世徒
花のあか▢ハシメ
おはせ◯こそ

[と]

ハ上代ヨリ今ニ至ルマデイフ詞ヂヤガ゛コ‖ノ方ハ中昔已後ハ

第二ノ音ノ来◯コヨリ‖トツヾケテ来‖トモイフヿト成マシタヂヤ其

レイフハ第二ノ音ノ講訳デ申マシヤウガ先爰デチヨツト申サウ

ナラ源氏須磨ニよろづのをきしかたゆくすゑおもひつゞけ

給ふよナドイヒテ有ルヿデゴザル但シ左行変格ニハ此格ハゴザラヌ

シカルヲおはしきナドツカフテアルハ左行四段ノ方ナル濫用デ

イサヽカ其意モカハルヿヂヤ其カハルトイフハ前条ニモ申タ通リ

おはせきトイフホドノ意ニナリマスルノヂヤヨリ會得シメサレ

扨是迄ハ希求ノ‖ヲ弁シマシタガ是ヨリハ又‖ノ論談ヲ致サ

ウデゴザル全体‖ハ断止タル詞ヲ連続スル辭デゴザル故ニ断止サヘ

スレバ何レノ詞ニモ付テ其断止タル詞ヲ又々連続ルガ如ノ役ヂ
ヤ左様ナル辭ヂヤ故ニ加行変格ノ一ノ音ナル（こ）如トアルノミナ
ラズ下二段活用ノ一ノ音ヨリモ如ト受ケ又左行変格ノ一ノ音ヨ
リモ如ト受マスハ同例デム同例ヂヤニ依テ図面ニモ如ノ辭ヲ
下二段ニモ左行変格ニモ加行変格トオナジク出レテヨイ詞
ヂヤガ加行変格ノ（こ）如ト受タルハイニシヘモ今モ常イフヿ
ナレド下二段活用ナル（つらへ）如（やめ）如左行変格ナル（せ）如トナ
ドイヘルヿハイトヾ稀ナルヿニテアレバ押ナベテノ定例トハ為ガタ
キヿデムサル故ニ下二段左行変格等ノ二行ニハ此如トイフ
辭ヲ出レマセヌノデムドナタモ左様心得メサレ
扨又モヒトツイハネバナラヌヿガムム夫ハ何ヂヤトイフニ左行変格

○如ノ字原書ニ如トアレド意ヲエテアラタメツ

ナル（おませ）如トイフ辭ヂヤ是ハイクラモアル辭ヂヤガ十ニ九ツハ左行
四段ニ活用おませヲ如ト受タルニテ左行変格ナル方ハイトヾ稀
ナルヿヂヤ又大坐ませトハ尊ミテイフ意ノ方モ間ドヽ四段デムカラ
忘レヌヤウトシメサレ新儀式上五丁御坐止又御坐止トムヂヤ
宇治拾遺三ニ是も今ハむかし法輪院大僧正覚猷といふ人おはしけり其の甥子
陸奥前司国俊僧正のもとへくりてありけるをいとせけれバ久しくおとせず
へ一そなたにしばしおはせとありけれバまちゐたるほどに
おませ如トイフハ如ヨトイフベキヲ如トイヒつく如トイフベキヲつくト
イヒやめ如トイフベキヲやめトイフト同例デムサリナガラ前条ニモ申ス如ク如ト
イヘルハ普通ナレド（つく）如やめ如おませ如ナドハ押ナベテノ例トハシガタキヿナレバ図
面ニハ挙マセヌノヂヤ左様コヽロ得メサレ
聴聞ノ中ヨリ一人ガイハク只今ノ御論弁ハ承リヌサリナガラ左
行四段ノ五ノ音ノ（おませ）如ト左行変格ノ一ノ音ノ（おませ）如ト何レ
ノ意ヲ以テ見分ベク候ヤ夫ハヨキ心附ヂヤ全躰

おをせハ大坐ノ意ナルヿ前条ノおをせす条下ニ申タ通リ御坐アルヲ
おをせ おをす おをする ナド左行変格ニイヒ又御坐アソ
バサル、ヲ おをさむ おをす おをせ ナド左行四段ニ濫用ヨシ妄
レク申コレタ此事ハモハヤ会得致サレテアラウデムレカルヲ中昔
已後ノモノニハ御坐アソバサル、トイフ意ヲイサヽカ轉ジテ御出アソバ
サル、トイフ所ヘ用フヿニ成タヂヤ 是ガ詞ノ沿革トイフモノデム
此徴ヲイサヽカ申サウナラ落久保物語ニ安識ガ伯母ノ許ヘヤリ
タル文ノ詞ニ いそぐる侍りてなむきのふけふきこえさせつる
けふあすのほどよ清げならむわらはをおとなもとめいで給へ
そこもとよきもあらバひとりふたり給へ あやうハるこいめ
まきこ近む あこのきみの おをせよ(御出アソバサレテクダサレ) トムヂヤ 此文ナドノおをせヲ御坐ノ意ニ解シテハ聞カヌヂヤ

此ノ御出アソバセトイフ意ノおをせハ皆左行四段ノ方デムカラ
ヲガ左様ニ弁別イタスノデム 又大坐せさせ給ト尊ミテイフ意
ノ方モ同ジク四段デムカラ忘レヌヤウニシメサレ 新儀式 五上五丁
御坐止 又御坐止トムチヤ 会得シメサレ 程四段五ノ音ノ講訳
ノ寸申サウ 断止ル詞ヲ受ル如ハ雅言モ俗言モオナジ意デ
別ニ俗意ハナイデム
希求トナリテ断止詞ヲ受テ連続ルノミノ辞ヂヤ エヨ ヨト
トヨヲ添テ解シテヨロシイデム 第五階メとよ 此くとト同義
ヂヤ心得メサレ

加行変格ニノ徴

秋草紙
ちごろみそのとのたゞなのらせ給とていぬる 見ガ

蜻蛉日記
はみりまほかし
はまどてつきのしう
てなまたしりは
こ(と)あふぶさつく
もとあり

万廿九丁
旅まても毋
なくさや
こ(ト)

〔こ〕 〔こ〕 〔こ〕

と訪れバとこのあそばしなぐさめてとくこ
こ(と)ハ気やりたるにこよひハ匠まゐるまじとて
かつしれこせるさまじきのみまもあるぞ
すくさわざなし

兼好法師集 神な月乃ころもつせにまうで侍りしに入道大
納言(為世)をみちをつまてこ(と)おぼせられしをため
でうき様にえいうをまうざしてもさせられど

落久保 二 君乃おぼしなげくるいみじくなむ報る
どみそかにぬけを出車りぬでしやま事なん
なひしてこ(と)乃こまをせつるといふを

今物語 車よせ乃簾にすきて一人のこゑくきけるが心

かへりておほえけれバともなりなる殿人にい
まぐ入やらでそ返てるがふりきてかくきこえし
何とまきいひてこ(と)の給けれバ

扨是迄ハせノ論談ヲ致シマシタガ是ヨリハ加行変格左行変格等ノぞノ論弁且ハ俗意ヲ申マシヤウ此ノぞハ先哲モ申オカレタ通リ必ズ上ニなぞトイフ詞ガ有マス其ハもそ乃なぞおそ―ぞ人なぞとがめぞナドイフ類デムム是ヲ名ヅケテ禁制ノぞト申マス又ハな何ぞトモ申マスヂヤあゆひ鈔巻ノ二ニ此ノぞヲ解レテ「ルイハオケ」又「テクルナ」又「テクレナ」又「ルイハキトムヨウ」又「ルイキト無用」ナド丶解セラレタガ是デハ更ニ益ニタチマセヌ毎度申ヂヤガ冨士谷ヌシハ一首ノ歌ニ向テ其歌ノ上デノミ俗意ヲアテラレタニ依テ此様ニ俗意ノ数モ多イノデ初学ノ輩ハイヅレノ俗意ヲ宛テハヨイカワカラヌ程ニカヘツテマヨヒマスデムムソコデ予ガ宛マス俗意ハ「テハナラナイ」トアテマス是デ古今貫通致シマス北邊王モ禁ノ部ニ此ノぞヲ入レテ論ゼラレナガラ「テクレナ」ナドモノヤワラカニ解(ゲ)セラレタハ何タルコヅヤ

モヒトツ心得ネバナラヌコガムム此ノぞハ断止辞(キルテニヲハ)ニテ連続(ツヅク)コハ更ニナイコヂヤ「も」「も」「の」「陸」「向」「が」等ノ結辞(ムスビコトバ)トナルノミヂヤコレモヨク會得シメサレ

扨又モヒトツ心得ネバナラヌコガムム上代ニハ此ノぞヲ略(ハブキ)テ同ジ意ニ用(ツカ)フコモアルヂヤ萬葉集七ニ「妹があたりわが袖ふらむ木乃間より出て来る月よ雲なぞくもなびき」是ハ「タナビキテハナラナイ」トイフ意ヂヤ又同集十七ニ「我なし―となぞわびわがせこ郭公なこのむさ月ハ玉をぬかさぞ子」是モ「ワビテハナラナイ」トイフ意ヂヤカヤウニハブキマスハ上代ノ一格デムム心得メサレ ○逸史五卿けさの朝げ

なこと いひつゝ

杪カヤウニそ卩文字ヲハブキマスハ一ツノ例デムガな卩文字ヲ
ハブキマスコハナイコデムレカルヲ夫木集十九ニ源仲正朝臣
ノ歌「ちりぬともおそくハ卩やりそ卩ゑこく此木乃梢めぐらして谷
乃辻風 同集廿七寂蓮法師「牛乃子ニふまるな庭乃かく
つぶり角あるバとて身をバ卩このみそ卩トムギヤ 此ノ二首ノ歌
ヲ詞の玉緒巻五ニ論ゼラレタルニハ二首ら乃歌もな卩文字なし
皆元がをなり近き世までも此誤をおほく見ゆトイハレ又義
門法師が玉乃緒操分ニ「外へハやりそ卩」ハ「外へなやりそ卩」の誤「身
をそこのみそ卩」ハ「身をなたのみそ卩」の写誤ニぞ有らむ恐ら
くハ仲正寂蓮の拙かりしにハあらじ抑玉の緒ハ少しゆるかし

こきもの多し皇乃著書なれど中々あるひの論めとなれる
こともまゝまじりて云々トムギヤ 杪モ此二首ノ歌ハ夫木集ニ
ハ左様ニ見エタレドモ是ハ義門師ノイハレタ通リ写誤ナルコ
勿論デムレカルヲ本居翁ガコトリハレウイハレタハヨロシウナイデ
ム仲正朝臣ノ集ハ世ノ中ニ在リモヤスランオノレイマダ見ネバ
サテ置マシテ寂蓮法師ノ集ヲ見マスレバ左大臣家十題百首
内「牛のこにふまるな庭乃かくつぶり角のあるとて身をな卩
このみそ卩トアリマスギヤ本居翁ハ聞エル学匠デハアルケレド
辞(テニハ)ノ学ナドハ片端ノワザノ如ク思ハレテ夫ヨリモ大キナル
御志(コヽロザシ)デアラレタカラ違格ノ処ハ是ハ違格ナリトトガメラレ
タノミギヤガ義門師ハ語学専門ノ方デアリナガラ寂蓮集

ヲ見合セラレザルハイカニゾヤ此集ヲサヘ見合スレバ写誤ナルコ
ハ明白デゴザルモノヲヤ又玉乃緒ニ六帖ノ「いつの世こそふるさと
見つゝなげくらむ清き月かよ雲こそなきか」トアル歌ヲ
論ゼラレテ云クこそもなかを略て下なかとのをいつるいみじきひ
がごとなり下乃かは略ける例あれども上のなかを略くは例
も聞えもなし 此哥ハ万葉十一ニあって雲莫(クモナ)田名弥と
なるを誤せる語也ト見エテアリマス是ハ本居翁モ古今六
帖ノ見ヤウガタラヌノデゴザソレハイカニトイフニ此哥ハ古今六帖
ニ二所(フタトコロ)出テアル歌デ月トニフ題ト雲トニフ題ニアリマス雲ト
イフ題ノ方ハ雲こそなきかトアレド月トイフ題ノ方ニハ雲
なくもなひきかトアリマスダヤ殊ニ月トイフ題ノ方ガ前ニ

アルモノヲ後ノ方ハなくもノ文字ノ落タノニ相違ハナイデゴザレカルヲ
落字ノ方バカリヲトリ出シテ論ゼラレタルハ何タルコゾヤ
全躰かハ第二階ノ辞ナルユヱ委レイコハ第二階ノ講釈デ申
マシヤウ此外前條ニ申タ加此ノ次ニ申スねかナドモ第二階ノ
辞デゴザレカレドモ加行変格ハ第一ノ音ヨリモ受マス故此処
ニテ此様(コノヤウ)ニ申タデゴザ

〔二〕

加行変格その徴

後撰

立よらばうずむむろりちらけきどたまの
なかこそ乃関をまたゑけむ（キテハナラナイ）
たまかノかハかむニテ結ビマレタノヂヤかニテ結ビマレタノ

〔二〕

（デハナイ）

ふく風をなかこそ乃せきとおもへども道もせず（キテハナラナイ）

ちる山さくらかな

此歌ハイヅレモ陸奥ノ奈古曾ノ関ニ勿来ヲ兼タル故謹ト為
ベキ歌デムこそしヲこそしトモ中昔已後イナニナラヒテこそ
ヲこそトモイフベキ例トモ思ヘド左様ナル徴ハ見出申サヌ
故図面ニモ加行変格ノ第二階ノこそハ除イタノデム

〔二〕
空穂俊蔭　ゆき孝乃子なちバ氷をけて魚いでこ孝乃
子ならずハないでこそ『とてなし

左行変格ソノ徴

〔廿〕
空穂忠社　童部もゐきをつまゐるを志ぶしハなも乃せ

山家下
こゝ舟よ浴つまで
うけさなせ
いふきのさけよ
りまくめり
砂石集二
寺ゐまでさぞ目
さなせ

そ『といひしかバそこにこそなやこ給ふをあ
るヲとふらひにも乃せむとい給ふ『だやむを
なまき事まうそあなれ』とてあこうさ給ふまう
で

〔廿〕
萬葉　廿　伊射子等多波和射奈世曽　ゐそわざな
世そ『天地能加多米之久爾曽夜麻登之
麻禰波

〔廿〕
空穂俊蔭一五　天狗乃するにこそなうめなおもせそ

〔廿〕
同蔵開上　女君うちこゝろ給ひてなやしの御おどせ
ふうくなおそせそ

〔廿〕
水鏡下帝廃　孝謙天皇なりふしも志う給をえかくなおそ

【ヤ】

サヱ』と申させ給ひしかどもつゆそのをよ
びひ給はざりしゆゑ

扨ナガノハトソ部ノ論談ヲ致シタガ全躰初ハ加行左行ノ両
変格ノミ第一階ノ辞ニシテ其餘ハコトゴトク第二階ノ辞デム
カラ第二階ノ講釈ノ寸委シク申マシヤウ是カラハ加行変
格ノヤ部ノ論并ヲ致サウガ先此ノ部ハ歎ノヤ部ト申スヤ部デ
ム夫故ニ片假名ヲ以テ歎ノ目印ト致シタノデムレカル故
ハ指辞(サシコトバ)ノヤ部ト紛レサセマイトイフ心付ヂヤ
扨爰ニ心得ベキヿガム歎ノヤ部ト一口(ヒトクチ)ニ誰モノハモイヒマスケレ
ドモ歎ノ中ニモ種々ノ意味ノ有ルヿデ先此處ノヤ部ト第
五階ノヤ部ト同意デム是ヲ希求(ケグ)歎ノヤ部ト名目ヲ申マス

是ハ先達モイフタイハレヌヿヂヤマデガ并別致スニツイテ申
シ始メタル名目デム　第三階ノヤ部ハ疑嘆ノヤ部ト申スヂヤ此疑嘆ノヤ部ハ第三階ノ講釈ノ寸申マシヤウ
扨モヒトツ心得オカネバナラヌヿガム尤テ歎辞ハ断止(キルル)言ノ
下ニツクガ定例ヂヤ是ハ誰モ知テヰラルヽヿトハ思フケレド念
ノ為ニ申スノデム此希求(ケグ)歎ノヤ部ヲ例ノ俗意ニテ解シマ
スト【テタモレヨウ】【タガヨイヨウ】ト二様(フタヤウ)ニ解シマス是ハ希求(ケグ)ノ部ヲ
二様ニ解シマシタト同格デ歌ヲ解スニハ【テタモレヨウ】ト解スガ
多ク文ノ方ハ【タガヨイヨウ】ト解スガ多イヿハ前条ノ部ト専ヲ
オナジヿデム扨是デ古今貫通致スデムあゆひ鈔ニハ
爰ノヤ部ノヿハ論ジテナイ故ニ彼鈔ノヿハ爰ニ引合ニハ出
サヌデム左様心得メサレ扨モヒトツ心得ベキヿハ此部ハ断止(キルル)

バカリデ連続（ツヾキ）テハ且テナイデヤ [も] [も] [の] [徒] [何] [が] 等ノ
結辞トナリマスデヤ會得シメサレ

加行変格ヤノ徴

源氏夕顔　例ならぬをふておまへちらく近まならぬつま
しさまなげしも近のわろぞなやもて紀
へバ
[や]ところよきとぶひてこそとめしよせて見給
津の國乃こ[や]ともへをいふきまひまこそな
けまサ乃やへぶき
此哥ハ攝津ノ昆陽ニ来ヤヲイヒカケラレタルナレバ證トナ
レツヘレ心得メサレ

花開下サヲウ
人そうては里之よ
なまべ富もて
て[や]てては流トて

神楽 野開　あめなるひなどりよりこ[や]ひなどりとみくさもち
て

是迄ハ嘆ノヤヲイサヽカ弁ジマシタガ猶委シイコトハ第五階
ノ講談ノ寸甲スニ依テ此處ハマヅ荒増ニ申オクノヂヤ

あーし

是ヨリハ加行変格ノのしノ論弁ヲ致シマシヤウガ此のしハ前條ニ申タ歎ノやトオナジ格デ爰ノトコロニテ加のしトイフモ四段ノ活用ノ第五ノ音ヨリゆけのし、あけのしナドイフモ同ジ格トシラルルガヨロシイ允テ、のし、のしハ断止辞(キルテニヲハ)ヲ受テ断止辞ヂヤ歎ノやトオナジク[も][も][の][徒][が][何]等ノ結辞トナルノミデ連續ヿハ更ニナイヿヂヤヨツ心得メサレ

又心得ベキヿガム のしニ二ツノ意ガム其一ツハ第一階第五階ノかし是ヲ希求ノかしトイヒマス第三階ノかし是ツ嘆ノかしトイヒマス嘆ノかしハ第三階ノ講談ノ寸申マシヤウ

扨此ノ希求ノかしヲあゆひ鈔巻五ニ[ヌガヨイハサテ]ト略意ヲアテテレタガ切デトアルハ粗論デム何ニトナフニ希求ハ前条ニモ申タ通リ意ガ二ツアルヿヂヤニ依テ[テタモレカ・タガヨイサ]ト二タ様ニアテネバナラヌデム[テタモレサ]ノ方ハ歌ニ多ク[タガヨイサ]ノ方ハ文ニ多イヿハ前条ノ希求ノ如又希求嘆ノやノ条ニ申タ格ノ通リヂヤヨツ古歌古文ニ向テ味ヒメサレ

[加行変格のしノ徴]

新古今

とめこ「のし」(キテタモレサ)梅さかりなるわがやどをうときも人はをりにこそよれ

扨コヽニ申シタキコトガゴザル本居翁ノ詞の玉の緒巻五ニかしヲ
論ゼラレテイハツかしハ切まるる辞乃下に添ることをく
もし上なるかしや何るどの辞あまバ又さる格の結辞まて
切るる下まもおくるあまと上トアルヲ同操ぞニ義門法師
ガイハクげましろるあまど今少し初学乃ためよとな
らバかしを載る辞乃下ま添るむとむえまるハくさく
をとらく詞どもきるる処よりも又てまをはの載るこをハ

乃下にも又希求(ねがひ)の辞乃下にも添るをなるといふべよ
ろしうらむ比ナド本居翁モ義門法師モイハレタハ実
ニサルコトデハアルケレドモマダノ粗論デゴザル何カニトイフニ第
一階ノかしハ第五階ノかしハ一ツ意デ希求(ネガヒ)ノかしヤヤガ第
三階ノかしハ嘆ノかしデゴザルカラ此ノかしト同意デハゴザル又
又上ニ掛辞アリテ其結トナリタル詞ニモアレ辞ニモアレ其
下ニ添ルかしモ嘆ノかしデ第三階ノかしト同意デゴザル
此様ニ辨別セネバかしノ本意ハワカラヌコトデゴザル会得シ
メサレ猶委シイコトハ第三階ノ講談ノ寸申サウ

扨是迄ハかしヲ論弁致シタガ是ヨリハ又扨ノ論弁且又俗

意ヲモ申マレヤウガ先此ノね]ハ第二階ナルなむ]み]ぬ]ぬる]ぬれ]
ね]ト還用ね]ニシテ不ず]ノ意ノね]ナラヌコト勿論ナレバ第二階
ニアルベキハヅナレド第一階ニアリテ来こ]ね]ト受マスヂヤ此辞
ノミニアラズ前条ニ申シタこ]そ]ナドモ同ジ格デ来こ]し]来こ]そ]
ナド受マス是ガ変格ト名目ツケタル変格ノ所謂ノ一ツヂヤ
シカリトテ此ね]ガ活辞ハ致サヌデムサル故ニ来こ]なむ]トハイハズ
此ニイフなむ]ハ誂ノなむ]デハナイ 徃ムノ約なむ]ヂヤゾイ 来こ]み]トモイハズ来こ]ぬ]トモイハズ此ニイフぬ]ハ不ノ
ぬ]デハナイ ぬ]ヂヤゾイ 徃ノ来こ]ぬる]トモ来こ]ぬれ]トモイハズ只々来こ]ね]トイフ
ノミデム第二ノ音ノ来き]ヲ受ルトキハ来き]なむ]来き]み]来き]ぬ]来き]ぬる]
来き]ぬれ]来き]ね]ト還用マスヨク心得メサレ扱此ノね]ノ俗意ヲあ
ゆひ鈔巻一ニ［テシマヘ］又［ヤウニナレ］トアテラレタヂヤ此中ニ

［ヤウニナレ］トアルコトハトルニ足ラヌ俗意ヂヤニ依テサシ置テ［テシマヘ］
トアルコトハ随分相当ノヤウヂヤガ全躰此ね]ノ本意ヲ解シ
得ラレナンダ故ヂヤ此ね]ノ本意ハ奈行変格ノ徃ムト活用詞
ヨリ分轉シテ辞トナリシモノデム夫故其意味ノ場所ヘ用フ
辞ヂヤソコデ二ツガアラマス俗意ハ［次第ニ来テシモシ］［次第ニ来タガヨイ］ト二様
ニ解シマス如此二タ様ニ解シマス訳ハ［次第ニ来テシモシ］トイフ方ハ歌ニ
タメリ［次第ニ来タガヨイ］トイフ方ハ文ニ多イヂヤ此ハ前条ニ申タ通
リ希求言ノ格デム
扱ツイデヂヤニ依テ申マスガ辭格考トイフ書ニ此ね]ノ事ヲ論ジ
且ツ本居翁ヲ難ジテ詞の玉緒にこは ナ]ニ]ヌ]ネ] とあらく
辞にて そのね]は きえね]こすまね]るごとくとあるは ひとさく

りはまるやうなれどもくもしらぬなりきえね わすれね など
ハ 希の まて 去の まくらける祁まハあらぬもろをやナドイハ
レタケレドモ是ハイフニモタラヌ愚論ナル事ハ語学セシ程ノモ
ノ誰カ承引シマシヤウ本居翁ノイハレタ通リ此きゐね かね
すまね ハ奈行変格ノ往ム往往往往往ト活用ク詞ノ分轉
ニシレテ一ツノ辭トナシレルモノヂヤ允テ四段ニ活形語ノ第五階ハ
こそノ結トナリ且希求トナル事普通ノ例ナルモノヲヤレカル
故ニ四段ハ勿論良行四段一格 四段の五の音よりウツル格 ラレキ シクレキ の
二の音よりうつる格奈行四段一格等ノ第五ノ音ハこそノ結ト
ナリ又希求トモナルハ通例デム其分派ナレバ辭ノねハ
ノねトハイサヽカ変リテこそノ結ハぬ也希求ハねト持分テ

アル事ヂヤクハレイ事ハ辭の栞ノねノ講釈ノ寸中サウ
猶コレニ就テ心得オクベキ事ハこねハ只希求トナルノミデ 七
も 徒 ノ結辭トナル會得シメサレ

加行変格ねノ徴

萬葉 十五 安思必寄能山等妣古由留可里我禰婆美 キクガヨイ
世故爾由加波伊毛爾安比弖許禰 いもよ
何とてこね
聴聞ノ中ナル一人ガイハク いもよあひてこねハいもよあひてにこね
ト解シ候方聞エヤスキヤウニ存ジラレ候ハ若シ僻耳ニテ候
ヤ手答フレハアラネド所謂粗論ナリ何分ニトイフ
ニこねハ来ヨナリト解セシニハ来よトイフ詞ナクテモ事足

〔こ〕〔こ〕

ルトイフモノデゴ〻こよハこよノ意味アリ こねハこねノ意味アリ
オロソカニ思フナカレ 此歌ハ妹ニ逢テ来ヨト呼ノ下知ニ云ツケ
タ歌デハゴ〻ラヌ 此歌ノ端書ニ 肥前國松浦郡狛島亭ニ船泊
之夜遥望海浪各慟旅心作歌七首トアル其中ノ一首デ我
身ハ都遠クヘダヽリテ妻ニモ逢コハカタイーホドニ山ヲ飛越テ
行雁ヨツケ遊都ヘ行ウナラ我妻ニ逢テ来次ニキテタモレ
トイフ程ノ意味デゴ〻會得シメサレ

萬葉 十 春日野之芽子落者朝東風爾副而此間爾
落来根 こてちりこね キタイニキテタモレ

萬葉 一 在根良對馬乃渡渡中爾幣取向而早還許
年 をやかつりこね キタイニキテタモレ

ロツ一字脱

〔こ〕〔こ〕〔こ〕

神武紀 哆哆奈梅豆伊那瑳能椰摩能虚能莽由毛
易喩耆摩毛羅毗多多介倍磨和例破椰
隈怒之摩途等利宇介譬餓等茂伊莽輸
開珥虚禰 いますけよこね キタイニキテタモレ 今レ来ニ来不欲者スレ

神代巻 下 妹盧豫嗣爾豫嗣豫利據禰 よしよらこね キタイニキテタモレ

萬葉 十八 和我勢故我布流伎可吉能佐貝良波奈伊
麻太敷布賣利比等目見爾許禰 こそ
こね キタイニキテタモレ

釈差ニイフベキコガゴ〻 竹取物語ニきくなきところよいかで
うゑましくハおをせむゐてお〻そせね『とるきてふせきで

トアルヲ見テ佐行変格ノ活用ノ第一ノ音ナル おもせヨリ
ねト受タルニハアリハセマイ歟ト思フ人モアリマシヤウ左様
致セバ詞乃栞ノ図面ノ佐行変格ノ第一ノ音ニ加行変格同
様ねノ辞ヲ出シタル方ヨロシカラムト思フ人モアリマシヤウガ
是ハ前條ニモ申タ通リ俗意ニオ出アソバセトイフホドノおもせ
ヨリねト受タルハ佐行下二段活用ノおもせニテ佐行四段
ニテイフおもしねト同意デム 佐行下二段ノおもせハおもせさせヲツヾメおもせト云ノヂヤ 佐行四段ノおも
しハおもせさせト云フホドノおもしヂヤ シカル故ニ此處ノ第一ノ音ニねヲ出シマセヌ
ヂヤ竹取物語ノ文意ヲ味ヒ見ラレヨ 輙るて おもせ(ね)とし なき オイデ被成ニ輙テオイデアソバシテ
てふせ生バトイフ意デムヨクヽヽ會得シメサレ
扨モ此様ニクドヽヽシク申スノモねト如ハ同ジ希求ニハア

ルケレドモねトイフ方ハ心ユルヤカナル希求ナリ如トイフ
方ハ心キビシキ希求ナリ其意ヲシラシレメンガ為ニ申スノ
デム

扨是迄ニテ栞ノ図ナル第一階ノ辞ノ論弁ハ事終リマシ
タデム ソコデ是ヨリ論談致スノハ下二段ト加行変格ト佐
行変格トノ第一ノ音(け)(せ)(て)(ね)(へ)(め)(れ)(ま)(ゑ)(こ)(せ)
等ハ如ヲ添ズシテモ其侭希求言ニシテ [も]-[も]-[徒]ノ結詞
トナル徴且又俗意等ヲモ弁ジテ今晩ノ讀切ト致シマシ
ヤウ

扨コノ一ノ音ハ四段ノ第五ノ音良行四段一格第五ノ音ナド、
同ジク[も]-[も]-[徒]ノ指辞ニテ云トヾメサヘスレバ希求言ト

(元)

ナルコハ定例デムサリナガラ四段ヤ良行四段一格ナドノ方ハ
昔モ今モイフコヂヤガ下二段ノ一ノ音加行変格佐行変格
等ノ一ノ音ハ古ハ希求ニイヒマレタガ近昔已後ハ見当マセヌ
昔トテモ稀ナルコデ證歌モ至ツテ少イデム證例ノ少イ
ハ詞ガラノ切迫ニスギル故デゴザラウ然ル故ニ強テハ歌ニ
モ文ニモ用フマジキ詞ヂヤ心得テオカレヨ
扨其俗意ハ［テタモレ］又［タガヨイ］トイフ意ヲ添テ解シマスノヂヤ
是ガ前條ニモ申ス希求言ノ定格デ［テタモレ］トイフエクハ歌ニ
多ク［タガヨイ］トイフ方ハ文ニ多イコヂヤ

下二段一ノ音希求言ノ徴

阿行下二段ノ元ハ得ヂヤカ此得ハ得トノミイヒトドメニノ

続紀廿五ウ丁
帝止在巳止(得)止

希求言トシタル例古歌古文等ニ且テ見當ラナイデム夫故ニ
図面ニモ此阿行ノ(元)ハ除テムヂヤ

(け)
源氏横笛　ふえのきはあちをきかろりはいまう(け)テタモレ
と琴よりたよ近やハいひける

(せ)
続続宣命　小野東人喚中衛舍人備前國上道郡人上道
朝臣斐太都而詔云久此事倶佐西　ころを
いざ(せ)タガヨイ　伊射奈布依而倶佐西牟此事
者許而

(せ)
風俗歌越方　乎知加多世引加乃可太世阿太千乃波良尓
々々々多々流可々良尓太々流可良尓宇和流
可々良仁於乃乎仁々々与須當々々々左奴

登之難久尓与世波与勢引　よせだしの㋝タガ
ヨイ一　与世波与勢与曾不流比止能々々尓久
可良難火尓

〔せ〕枕草紙　四　七七　比叡乃山いみじくまかりてわうちなどよふ
ころちさせこぞうせで十五日までちふらを㋝
タガヨイ一

〔せ〕儀式　春日祭儀　次喚笛工名二人共称唯副命琴笛相和　詞云美許
止尓布江安波世　みさとよふえあを㋝タガヨイ一　四人共称
唯

〔せ〕空穂蔵開中　さうきさうよかきて咲たる梅乃花につけ
てまゐるまとのゐ所ちをものこどもあそむ

四段五音ノ訓ま世
ノ徴
新儀式　天皇加元服事
上客盛尓美支
御良人度成利賜
努天神地祇相

とら㋝タガヨイ一とて給へば

〔せ〕万葉　三十二　おちいふをのよしめゆふぞふをもあきむと
きの㋝テタモ一こひろるくさよ

〔て〕萬葉　十八　大伴能等保追可牟於夜能久都奇波之流
久之米多底　しるくしめた㋢テタモレ比等
能之流倍久

〔ね〕一遍上人繪詞上　左　廿三　をねぞを㋧をどらバをどらき春駒の
法乃道をバ志る人ぞしる

〔へ〕續紀宣命　此心知天波都可比此弊動比御命乎不忘此
状悟天　つら㋬タガヨイ一と

〔へ〕宇治拾遺　七　大柑子をこきのどうりくらむこ㋬タガヨイ

説譲刋福
奉賜天御壽
長久寶位
動久御坐世
止申
於佐治ノ文ニモ見ユ

萬十九
しぶ花をきりて
ワグサへこの度
お月秋あきて
ても馬おりし
と(め)

梓人をめふ手
とぞ(め)

『とてとゝせたまへバ あそばし
枕草紙去ほ四十 佛乃はるさへふうく
バかりけるおもろし たⓑとやす
コレモ四段ナルベシ

(べ) 今昔 古本十六 十六段 昔乃るなど申て居つるあそ守酒を
ゐⓑとて度を飲ませて

(へ) 萬葉 十三 長歌上略 真十見鏡蔵蜻領巾負並持而馬替
おひるあもちてうまかⓐ メガヨイ一 吾背

(め) 萬葉 二 長歌上略 千磐破人乎和為跡不奉仕國乎治跡く
よをまさⓜ テタモヒ『と皇子随任賜者

(め) 萬葉 七 垣越犬召越鳥獵為公青山葉茂山邊馬安
君 うまやすⓜ メガヨイ一 きみ

(め) 続紀宣命 カクオモヒテハカルヿヤⓝトノリタマフ

(正) 古今 ふじの山なるおもひもえむも正 メガヨイ
一 神だにけぬむるしけるを

(ま) 古事記 下 長歌上略 宇流波斯登佐泥斯佐泥豆婆加理許 母能美陀礼婆美陀礼 みだれバ みだれま
メガヨイ一 佐泥斯佐泥豆波 ・此所論アルベシ ミダラバミダレトアラバ四段
トモ云フベシ コハ下二段ニ変セリ

(ゑ) 順集 ゑごゑする君がもしるゑおきの野よな
まるちそをやくのすゑ メガヨイ一

加行変格 一ノ音希求ノ徴

(こ) 萬葉 七 佐左浪乃連庫山爾雲居者雨曾零智否
かへりこ メガヨイ一 りかせ

夫木廿卅七丁
家経集 三ノ
神楽歌 具駒
兼好集 五十丁

左行変格希求ノ徴

(廿)

万十二 十二テウ
うこうるこてろいふ
かしことおもり
よく(廿)テもこ々がり
せこあつるとまだまし
(廿)

建暦御記 文易御馬御覧ノ條
上卿日下利
中二段ノ下ルトイフヿヲ論ズベキヿ雑記見
合スベシ
黒河先生ノヨレハ必ズ
與ノ字脱セルナルベシ本
中二段ニテカク希求ト
シタル例ナシ本ヨリ如
ヲツケズ希求トナルベキ

榮花月宴　あふ坂もそへゆきゝのせきもるずくづねて
とひ(こ)タガヨイ一きるぞうつきし
萬葉十四　阿乃我利乃麻萬能古須氣乃須我麻久良
安是加麻加左武許呂勢　子等ろ(廿)タガヨイ一多
麻久良
萬葉十　大夫之伏居嘆而造有四垂柳之蘰為　かづら
(廿)タガヨイ一辞妹